高松市埋蔵文化調査報告第39集

太田第２土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第二冊

キモンドー遺跡

１９９９年３月

高松市教育委員会

1．1～3工区

2．4工区

1．SD16

2．木製品

高松市埋蔵文化調査報告第39集

太田第２土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第二冊

キモンドー遺跡

１９９９年３月

高松市教育委員会

はじめに

本報告書は，太田第２土地区画整理事業地域内における都市計画道路朝日町仏生山線の建設に伴い，平成５年・７年の２次に分けて実施された発掘調査の成果をまとめたものであり，「太田第２土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第２冊」として刊行いたします。発掘調査の結果、弥生時代の溝や自然旧河道，中世～近世の建物・溝・土坑等の多数の遺構が検出されました。特に注目すべき遺構としては，３・４工区に確認された石垣の残る溝が挙げられます。この溝は，その規模・方向・石垣の存在から当該地域に比定されている『佐藤城』の堀跡であると考えられ，貴重な資料が明らかになりました。

本報告書が，高松市の歴史の解明に学問的な貢献を果たすとともに，文化財に対する関心と理解のための一助となるように念じ，広く活用されることを願っています。

最後になりましたが，発掘調査から出土品の整理・報告書の刊行にあたり格別のご理解とご尽力を賜りました関係者・関係機関に厚くお礼申し上げる次第であります。

1999年３月

高松市教育委員会
教育長　山口寮弐

例　　言

1．本報告書は，太田第２土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第二冊で，キモンドー遺跡の報告を収録した。

2．本遺跡の所在する地域の小字名は「應紋胴」であり，本来は遺跡名もこの文字を使うべきであるが，非常に難解な文字であるため「キモンドー」とカタカナで表記する。

3．発掘調査地並びに調査期間は，次の通りである。
　高松市伏石町1,100番地他
　第１次調査　1993年８月４日～11月30日
　第２次調査　1995年９月７日～10月31日

4．発掘調査および本報告書の作成にあたっては，高松市教育委員会が主体となり，文化部文化振興課文化財専門員　山本英之が担当し、末光甲正・中西克也（讃岐文化遺産研究会）が補佐した。

5．本報告書の執筆は，目次で示したように第１章第１節・第２章・第５章を山本，その他を中西が行った。

6．出土遺物ならびに図面・写真類は，当教育委員会において保管している。

7．本調査に関して，以下の業務を業者委託発注により実施した。
　発掘調査　第１次　大通土建株式会社
　　第２次　〃
　航空写真測量　第１次　国際航業株式会社
　　第２次　アジア航測株式会社
　遺物写真撮影　西大寺フォト

8．発掘調査及び遺物整理・本報告書刊行にあたって，下記の関係諸機関ならびに方々から貴重なご教示・ご指導を得た。記して厚く謝意を表すものである。　（敬称略、順不同）
　香川県教育委員会
　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
　石上英一（東京大学）　金田章裕（京都大学）　木原溥幸・丹羽佑一（香川大学）
　高橋学（立命館大学）　外山秀一（皇學館大學）
　松田重治（仏教大学学生）　王姿美（香川大学学生）

9．本報告書における表記および記述に関する凡例は，以下の通りである。

(1) 図の縮尺は原則として次の通りである。

遺構－調査区設定図：1／1000　遺構配置図：1／400　附図：1／200
掘立柱建物：1／40　住居：1／40　土坑：1／20，1／40
溝：1／20、1／40，1／100、1／200　旧河道：1／80，1／100
井戸：1／40
遺物－土器：1／4　石器：1／2　木製品：1／2，1／4，1／8
瓦：1／4
例外のものも含め，各各にその縮尺値を明記する。

(2) 本報告書で使用する遺構略号は次の通りである。

SB　建物	SD　溝	SE　井戸	SH　住居
SK　土坑	SP　柱穴	SR　自然旧河道	SX　性格不明遺構

(3) 遺構番号は調査時に設定した番号を廃棄し，整理段階で新たに番号を付けた。

(4) 遺物観察表は本文中に実測図とセットで掲載する。

(5) 遺物観察表中の表記方法は次の通りである。

1　土器の法量の中で（　）を付けているのは残存値である。
2　色調が内外面とも同じ場合には外面のみ表記する。
3　陶磁器は釉と地の色調を表記する。釉の記載がない場合は透明釉である。
4　土器胎土の粒子表記の基準
微砂：非常に細かい　細砂：0,5㎜以下　粗砂：0,5～1㎜　細礫：1㎜以上

(6) 遺物番号は遺構毎に付ける。

(7) 遺物実測図中のスクリーントーンは朱塗り・赤漆・黒漆を表す。

(8) 本報告書で用いる高度値は海抜であり，方位は磁北を示す。

(9) 本報告書の第2図「周辺遺跡分布図」の作成にあたり、国土地理院発行1／25000地形図「高松南部」を使用した。

目　　次

第１章　調査の経緯と経過 …… 1
　第１節　調査の経緯 …… （山本英之） 1
　第２節　調査の経過 …… （中西克也） 1

第２章　地理的・歴史的環境 …… （山本英之） 6
　第１節　地理的環境 …… 6
　第２節　歴史的環境 …… 6

第３章　調査の概要 …… （中西克也） 10
　第１節　調査区の位置 …… 10
　第２節　遺構と遺物 …… 11
　　１　１工区 …… 11
　　１）弥生時代 …… 12
　　１　溝 …… 12
　　２　自然旧河道 …… 19
　　２）近世 …… 32
　　１　土坑 …… 32
　　２　井戸 …… 35
　　３）１工区包含層出土遺物 …… 36
　　２　２工区 …… 41
　　１）近世 …… 41
　　１　土坑 …… 41
　　２　溝 …… 42
　　２）２工区包含層出土遺物 …… 48
　　３　３・４工区 …… 48
　　１）中世～近世 …… 51
　　１　堀 …… 51
　　２　性格不明土坑 …… 69
　　３　住居跡 …… 71
　　４　掘立柱建物跡 …… 74
　　５　土坑 …… 75
　　６　溝 …… 82
　　７　建物 …… 88
　　８　導水管 …… 96
　　２）３工区包含層出土遺物 …… 98

第４章　おわりに　（山本英之） …… 99

挿　図　目　次

第１図　調査区設定図　3～4
第２図　周辺遺跡分布図　9
第３図　調査区　10
第４図　１工区遺構配置図　11
第５図　ＳＤ01平面図　12
第６図　ＳＤ01断面図　12
第７図　ＳＤ01杭列平・立面図　12
第８図　ＳＤ01出土遺物　13
第９図　ＳＤ02平面図　14
第10図　ＳＤ02断面図　14
第11図　ＳＤ03・04平・断面図　15
第12図　ＳＤ05平・断面図　16
第13図　ＳＤ05出土遺物　16
第14図　ＳＲ01平面図　17～18
第15図　ＳＲ01土層断面図　19
第16図　ＳＲ01出土遺物(1)　20
第17図　ＳＲ01出土遺物(2)　21
第18図　ＳＲ01出土遺物(3)　22
第19図　ＳＲ01出土遺物(4)　24
第20図　ＳＲ01出土遺物(5)　25
第21図　ＳＲ01出土遺物(6)　26
第22図　ＳＲ01出土遺物(7)　27
第23図　ＳＲ01出土遺物(8)　28
第24図　ＳＲ01出土遺物(9)　29
第25図　ＳＲ01出土遺物(10)　30
第26図　ＳＲ01出土遺物(11)　31
第27図　ＳＲ01出土遺物(12)　32
第28図　ＳＫ01平・断面図　32
第29図　ＳＥ03平・断面図　33～34
第30図　ＳＥ03出土遺物　35
第31図　土器溜り出土遺物　36
第32図　１工区包含層出土遺物(1)　37
第33図　１工区包含層出土遺物(2)　38
第34図　２・４工区遺構配置図　39～40
第35図　ＳＫ02・03平・断面図　41
第36図　ＳＫ04平・断面図　42
第37図　ＳＫ05・06平・断面図　42
第38図　ＳＫ05出土遺物　42
第39図　ＳＤ06断面図　43
第40図　ＳＤ07～09断面図　43
第41図　ＳＤ10断面図　43
第42図　ＳＤ10出土遺物　43
第43図　ＳＤ11断面図　44
第44図　ＳＤ11出土遺物(1)　44
第45図　ＳＤ11出土遺物(2)　45
第46図　ＳＤ11出土遺物(3)　46
第47図　ＳＤ11出土遺物(4)　47
第48図　ＳＤ11出土遺物(5)　48
第49図　２工区包含層出土遺物　48
第50図　３工区遺構配置図　49～50
第51図　ＳＤ16断面図　51
第52図　ＳＤ16平面図　53～54
第53図　ＳＤ16(３工区)平・立面図55～56
第54図　ＳＤ16(４工区)平・立面図57～58
第55図　ＳＤ16出土遺物(1)　59
第56図　ＳＤ16出土遺物(2)　60
第57図　ＳＤ16出土遺物(3)　61
第58図　ＳＤ16出土遺物(4)　62
第59図　ＳＤ16出土遺物(5)　63
第60図　ＳＤ16出土遺物(6)　64
第61図　整地部平面図　65
第62図　整地部断面図　66
第63図　整地部集石平面図　67
第64図　整地部出土遺物(1)　67
第65図　〃　(2)　68
第66図　〃　(3)　69
第67図　ＳＸ01平・断面図　69
第68図　ＳＸ02平・断面図　70
第69図　ＳＸ03平・断面図　70
第70図　ＳＨ01平・断面図　71
第71図　ＳＨ02平・断面図　72
第72図　ＳＨ02出土遺物　72
第73図　ＳＨ03平・断面図　73
第74図　ＳＨ03出土遺物　73
第75図　ＳＨ04平・断面図　74
第76図　ＳＨ04出土遺物　74

第77図　ＳＢ01平・断面図　75
第78図　ＳＢ02平・断面図　76
第79図　ＳＫ07・08平・断面図　77
第80図　ＳＫ08出土遺物　77
第81図　ＳＫ09平・断面図　77
第82図　ＳＫ10平・断面図　77
第83図　ＳＫ11平・断面図　78
第84図　ＳＫ12平・断面図　78
第85図　ＳＫ13・14平・断面図　78
第86図　ＳＫ15平・断面図　79
第87図　ＳＫ16平・断面図　79
第88図　ＳＫ16出土遺物　80
第89図　ＳＫ17平・断面図　81
第90図　ＳＫ18平面図　81
第91図　ＳＫ18出土遺物　82
第92図　ＳＤ12断面図　82
第93図　ＳＤ13断面図　82
第94図　ＳＤ14断面図　82
第95図　ＳＤ17断面図　83
第96図　ＳＤ17出土遺物　83
第97図　ＳＤ18断面図　83
第98図　ＳＤ19断面図　84
第99図　ＳＤ20断面図　84
第100図　ＳＤ20出土遺物　84
第101図　ＳＤ21・22断面図　85
第102図　ＳＤ21出土遺物　85
第103図　ＳＤ22出土遺物　85
第104図　ＳＤ23断面図　85
第105図　ＳＤ24断面図　86
第106図　ＳＤ25・26断面図　86
第107図　ＳＤ27平・断面図　86
第108図　ＳＤ27出土遺物　87
第109図　ＳＢ03平・断面図　88
第110図　ＳＢ04平・断面図　89
第111図　ＳＢ05出土遺物(1)　90
第112図　ＳＢ05平面図　91～92
第113図　ＳＢ05出土遺物(2)　93
第114図　ＳＢ05出土遺物(3)　94
第115図　ＳＢ05出土遺物(4)　95
第116図　ＳＢ05出土遺物(5)　96
第117図　ＳＤ28平面図　97
第118図　ＳＤ28出土遺物　97
第119図　３工区包含層出土遺物　98

図　版　目　次

巻頭図版１－１	１～３工区
－２	４工区
巻頭図版２－１	ＳＤ16
－２	木製品
図版１－１	１工区完掘
－２	ＳＤ01
－３	ＳＤ01杭
図版２－１	ＳＤ02
－２	ＳＤ03（ＳＥ01）
－３	ＳＥ01
図版３－１	ＳＤ05（ＳＥ02）
－２	ＳＲ01遺物出土状況
－３	〃
－４	ＳＥ03
図版４－１	２工区完掘
－２	ＳＤ11
－３	ＳＤ16
図版５－１	ＳＤ16石垣
－２	〃
図版６－１	ＳＤ16石垣
－２	４工区完掘
－３	ＳＤ16石垣
－４	〃
図版７－１	ＳＸ01
－２	ＳＸ03
－３	集石
－４	下駄出土状況
－５	ＳＤ16石垣
－６	〃
図版８－１	ＳＨ01～04
－２	ＳＢ02
－３	ＳＢ01
図版９－１	ＳＫ16（第１面）
－２	ＳＫ16完掘
－３	ＳＫ18
図版10－１	ＳＢ03・04
－２	ＳＢ04
－３	ＳＢ03
図版11－１	ＳＤ27
－２	３工区完掘
－３	ＳＤ28
図版12－１	ＳＢ05遺物出土状況
－２	ＳＢ05
図版13	出土遺物
図版14	〃
図版15	〃
図版16	〃
図版17	〃
図版18	〃
図版19	〃

附　図　目　次

附図１　キモンドー遺跡１工区遺構図
附図２　キモンドー遺跡２・４工区遺構図
附図３　キモンドー遺跡３工区遺構図
附図４　キモンドー遺跡３工区遺構図

第1章　調査の経緯と経過

第1節　調査の経緯

キモンドー遺跡は高松市伏石町1,100番地他に位置し，太田第2土地区画整理事業の中で整備が進められている都市計画道路朝日町仏生山線の予定地にあたる。

太田第2土地区画整理事業は，1987年2月2日の香川県都市計画審議会による都市計画決定を受けて，1988年度から実施されている。事業区域は高松市街の南郊約6kmの田園地帯で，林，木太，太田，多肥の4地区に及ぶ360.3haは全国有数の事業規模である。この地域には，一般国道11号高松東道路ならびに四国横断自動車道の建設が予定され，これによる急速な市街化が予想されるため，路線沿線の市街化ならびに都市基盤整備を計画的に進める目的で事業計画がなされたものである。

この地域によらず，それまで高松市域の平野部は周辺の丘陵部に比べて周知の埋蔵文化財が極端に希薄な遺跡の空白地帯であった。そこで，高松市教育委員会では1986年度に国庫及び県補助事業として区画整理事業地を対象として『高松市太田地区周辺遺跡詳細分布調査事業』を実施し，広範な遺物散布地と二十数基の塚跡等を確認した。

この間に，太田第2土地区画整理事業地に含まれる高松東道路予定地77,000㎡については，市施行の区画整理事業と密接な関わりを有するという理由で，高松市教育委員会が発掘調査を担当することが建設省，高松市，高松市教育委員会の三者間で確認され，調査の準備が進められていったが，区画整理事業に関わる埋蔵文化財の取り扱いについては公式な協議はなされなかった。しかし，1988年8月に松縄町の都市計画道路工事中に天満・宮西遺跡の不時発見を見たため，改めて土地区画整理事務所と協議の結果，道路工事に先立って発掘調査を実施した。そして1990年度からは，「太田第2土地区画整理区域内試掘調査事業」として埋蔵文化財調査補助金の交付をうけ，都市計画道路予定地を中心に工事前に試掘調査を行い，埋蔵文化財が確認された場合は事業者の負担によって事前調査を実施するように取り扱いを定めた。

区画整理事業関係の埋蔵文化財調査は1996年3月までに6遺跡の調査を終了し，都市計画道路に関わる調査をほぼ終了した。整理作業は1993年度から開始し，区画整理事業の完了が予定されている2003年度を調査報告書完了の目途として順次実施の予定である。

第2節　調査の経過

1．発掘調査の経過

キモンドー遺跡の発掘調査に先立って，1992年9月25日～11月5日にかけて高松市教育委員会によって試掘調査が3回に分けて実施された。試掘調査はトレンチ方式を採用し，道路予定地のほぼ境界付近に路線に沿った南北方向のトレンチを掘削し，平面ならびに土層観察によって遺構の有無を判断した。その結果，全てのトレンチにおいて溝・土坑・自然旧河道・中世城郭の推定地割に対応する溝状の落ち込み等が確認された。

以上の試掘調査の成果を検討した結果，調査した全域を埋蔵文化財包蔵地と認め，細かな調査対応が必要であると考え、工事請負方式で調査を実施することとなった。

発掘調査は，1993年８月から11月にかけて第１次調査が実施され，1995年９月から10月にかけて第２次調査が実施された。調査面積は3,460㎡である。調査区域は現有道路・水路によって大きく４区に分けられ，北側より１工区～４工区と仮称する。第１次調査の範囲は１～３工区，第２次調査は４工区である。

第１次調査は，排土作業の都合により北端の１工区と２工区を同時に開始し，８月19日～９月３日までに２工区を終了し，溝・土坑・柱穴を検出した。１工区は10月１日までに終了し，弥生時代後期の溝・土坑，近代の出水が検出された第１面とその下位に弥生時代中～後期の自然旧河道が検出された。10月２日に１・２工区の航空写真測量を行った。３工区は10月７日～11月30日までの約２ヶ月の期間を要し，中世～近世の溝・土坑・建物等の多数の遺構が検出された。11月24日に３工区の航空写真測量を行った。

第２次調査は９月７日～10月31日までの約２ヶ月にわたって行われ，中～近世の溝・土坑が検出された。

以下に調査日誌を掲げて，調査の詳細について報告する。

調　査　日　誌　（抄）

1993年

８月

現況測量を行い，安全柵等を設定し，調査準備を整える。同時に調査区東側に調査事務所を設置し，発掘器材等を搬入する。

19～25日　１・２工区において重機による表土掘削を行う。

26～30日　１工区の遺構検出を行い，自然旧河道・溝・土坑・出水を確認する。２工区の側溝を堀り，遺構検出を行う。その結果，溝・柱穴・土坑を確認する。

31日　２工区の溝・土坑を掘り下げる。

９月

１～３日　２工区のＳＤ10・11の調査を行い，ＳＤ11より多量の陶磁器・瓦・加工材が出土した。ＳＤ７～11の土層図を作成する。１工区の南東隅を掘り下げる。

６～10日　１工区のＳＤ１～５を掘り下げ，土層図を作成する。南西隅に確認された石組みの出水を掘り下げる。

13～17日　１工区の溝を完掘し，平面図を作成し，完掘写真を撮影する。出水の掘り下げを続けるが，湧水が激しく難行する。ＳＲ01を掘り下げる。

20日　ＳＤ03・ＳＥ01の土層図を作成。ＳＲ01を掘り下げる。

24・25日　ＳＤ03・ＳＥ01を完掘し，平面図を作成し，写真を取る。ＳＲ01を掘り下げて多量の土器が出土する。その遺物は実測・写真撮影して取り上げる。

27～29日　ＳＥ03の石組みを実測し，写真を取る。ＳＲ01を掘り下げる。ＳＫ01を調査。

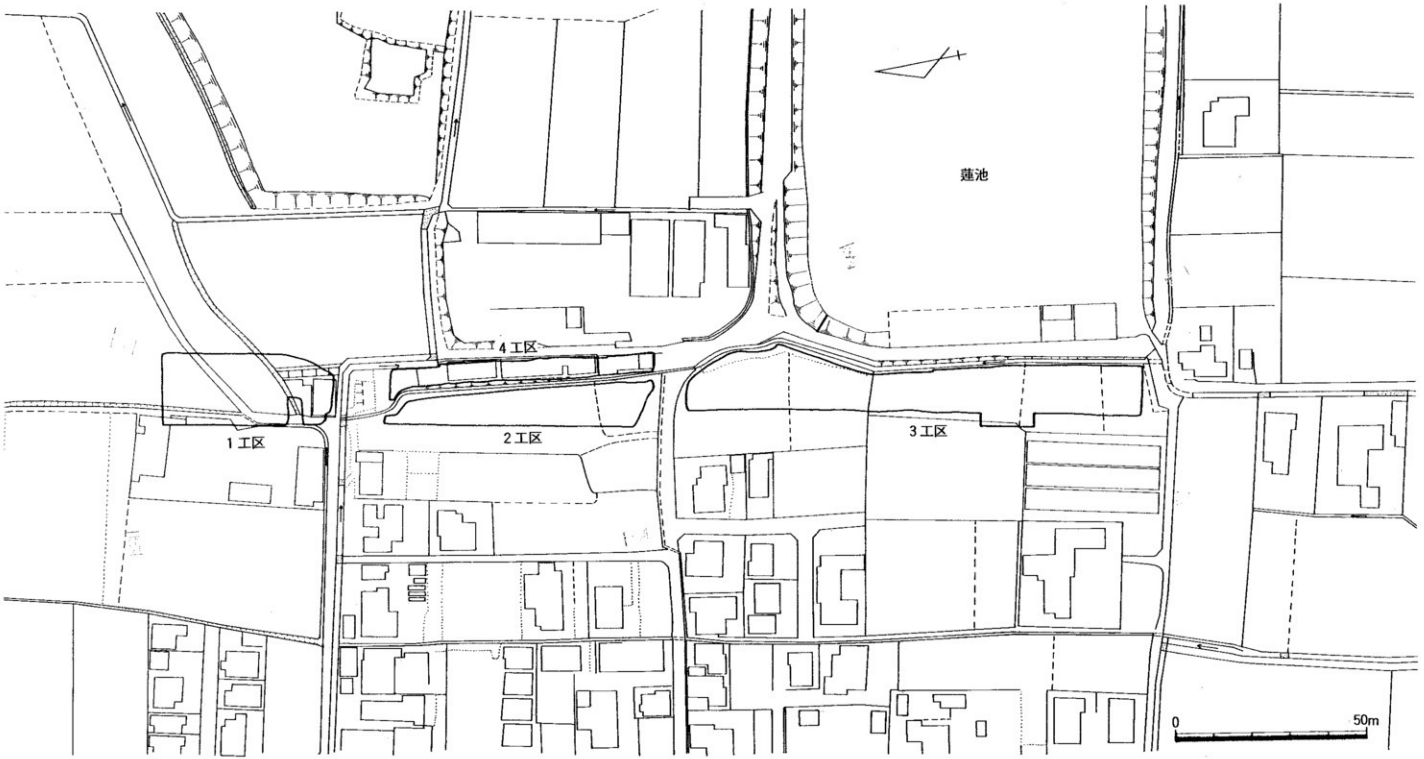
30日　雨のため調査は中止。

10月

１日　ＳＲ01は完掘し，１・２工区の航空写真の準備をする。

２日　１・２工区の航空写真測量

４～７日　１工区の東壁土層図，ＳＥ03の実測・写真をとる。２工区ＳＤ11の遺物を取り上げる。３工区は重機による表土掘削を始める。



第1図　調査区設定図（S：1/1000）

12～15日　３工区の表土掘削を終え，遺構検出を行う。
18～22日　ＳＤ16の上面にＳＢ03～05を検出する。ＳＢ03は１×２間の建物であり，ＳＢ04は礎石を長方形に配する建物である。ＳＢ05は石列であり，周辺に瓦が散乱している。ＳＢ03～05の実測し，写真を撮る。
25～29日　ＳＢ04・05の実測。ＳＤ16の掘り下げを始める。

11月

１～５日　ＳＤ16を掘り下げる。２段の石垣を検出する。
９・10日　ＳＤ16は完掘し，石垣の実測を始める。ＳＤ17の調査を始める。
15～17日　ＳＤ17～27・ＳＢ01・ＳＨ01～04を調査し，土層図と平面図を作成する。
19日　ＳＫ09～14・16～18，ＳＤ28の調査
22～23日　ＳＫ16の土層図・遺物出土実測図を作成し，完掘する。航空写真測量の準備。
24日　３工区の航空写真測量を行う。
25・26日　ＳＤ28の平面図を作成し，瓦を個々に番号を付け取り上げる。ＳＤ16の底面を掘り下げ，写真を撮る。ＳＤ16石垣の実測図，ＳＤ27の実測図，ＳＨ01～04の実測図を作成。
29・30日　ＳＤ16石垣の実測。３工区東壁の土層図を作成。ＳＤ16に囲まれた内側を掘り下げる。その結果，集石・溝を検出し，下駄が出土する。

1995年

９月

現況測量を行い，安全柵等を設定し，調査準備を整える。第１次調査の３工区に調査事務所を設置する。
７～20日　重機による表土掘削を行う。
21・22日　昨日の雨により崩落した調査区東壁の復旧と補強を行う。
25～29日　ＳＤ16の南側の石垣と裏込めの栗石を検出する。

10月

２～６日　ＳＤ16の調査，溝・土坑の調査を行い，平面図を作成する。
９～13日　ＳＤ16の調査し，北側の石垣を栗石を検出する。
23日　ＳＤ16の石垣・栗石の平面図の作成を始める。航空写真測量の準備。
24日　航空写真測量
25～30日　ＳＤ16の石垣・栗石の実測。
31日　ＳＤ16の石垣・栗石の実測を終了する。

２．整理作業の経過

整理作業は，1998年８月から始める。９月末までに出土遺物の水洗と注記作業を終え，10月下旬で遺物の復元作業を終え，遺物台帳の作成と実測の選定作業を行う。11月から1999年１月にかけて遺物の実測・トレース・挿図の作成を行う。２月末に割り付け・原稿の執筆を終える。

第2章　地理的・歴史的環境

第1節　地理的環境

高松平野は，香川県のほぼ中央にあり瀬戸内海沿岸に位置する沖積平野で，西を五色台山塊，南を日山，上佐山，東を立石山，雲附山等に遮られており，南北約20㎞，東西約16㎞を測る。

平野の境界を画する低位山塊及び屋島，紫雲山等の独立山塊は，偏食の容易な花崗岩層（三豊層群）が風化偏食に抵抗の強い安山岩層に覆われたことによって偏食解析から取り残されて形成されたメサまたはビュートと呼ばれるもので讃岐ののどかな田園風景の象徴の一つである。

高松平野には，西から本津川，香東川，春日川，新川といった河川が北流しているが，中でも香東川が平野の形成にもっとも大きな影響を及ぼしており，現在の春日川以西の大部分は香東川によって形成された沖積平野といわれている。

現在石清尾山塊の西を直線に北流する香東川は，17世紀はじめの河川改修によって人工的に開削されたもので，それ以前には現在の香川町大野付近から東へ分岐した後，石清尾山塊の南側を回り込んで平野中央部を東北流するもう一本の主流路が存在していた。この旧流路は，現在では水田及び市街地の地下に埋没してしまっているが，空中写真等から，林町から木太町へかけての分ヶ池，下池，長池，大池，ガラ池を結ぶ流路等数本の旧河道が知られており，発掘調査によってもその痕跡が確認されている。なお，17世紀の廃川直前の流路は御坊川としてその名残をとどめている。

これらのため池は，年間1000㎜前後と降水量に乏しい讃岐平野において農業用水確保のために不可欠のものであるが，林，多肥地区周辺では扇状地末端部に当たることから，ため池に加えて出水と呼ばれる自噴地下水脈の利用が盛んで，両者を併用した特徴的な配水網と厳格な水利慣行を伝えてきた。しかし，昭和50年の香川用水の通水によって，この一帯は三郎池の受益範囲に取り込まれ，農業用水確保の不安が払拭された反面，大池，長池等のため池が三郎池の子池となり，地元水源を核とした水利慣行が急激に消滅するとともに，ため池や出水の水源自体もその役割を失いつつある。

第2節　歴史的環境

高松平野では，石清尾山古墳群，高松市茶臼山古墳などを初めとする丘陵部の古墳の状況については比較的早くから知られていたが，平地部では天満遺跡など二，三が知られるのみで長く遺跡の空白地帯となっていた。しかし，昭和60年代に入って高松東道路建設，太田第２土地区画整理事業，空港跡地再開発などの大規模プロジェクトに伴い埋蔵文化財の確認調査ならびに事前発掘の件数が増大したことによって遺跡数は飛躍的に増大しつつある。また新たな遺跡の発見とあわせて，香東川の旧河道が平野の形成に大きな影響を及ぼしていた事実も次第に明らかになってきた。今後，未確認遺跡の把握と保護に加えてこれまでの調査成果を時間的，空間的に結びつけて高松平野の歴史環境の変遷を復原する作業が新たに必要になってきている。

高松平野で最古の遺跡は旧石器時代に遡る。平野縁辺の低丘陵部で久米池南遺跡（東山崎町），雨山南遺跡（三谷町）等の遺跡が知られるが，いずれも表採や混入によると見られる状況を示

す。中間西井坪遺跡（中間町）では高松自動車道の事前調査によってＡＴ火山灰層上層からナイフ形石器が出土している。

縄文時代では，大池遺跡（木太町）で草創期と見られる有舌尖頭器２点の表採が報告されている。また，近年平野部の発掘調査によって縄文晩期を中心とした遺跡出土例の増加が特筆され，林・坊城遺跡，浴・松ノ木遺跡，浴・長池遺跡，浴・長池Ⅱ遺跡，井手東Ⅰ遺跡，井手東Ⅱ遺跡，居石遺跡，上天神遺跡等を数えることができる。これらの多くは旧河道等の堆積から遺物の出土が確認されたものであるが，井手東Ⅰ遺跡では，地表下約70cmからアカホヤの堆積層が確認されており縄文中期の高松平野の形成過程をうかがうことができる。

弥生時代前期に移ると，天満・宮西遺跡，松縄下所遺跡，大池遺跡，空港跡地遺跡，宮西・一角遺跡，浴・松ノ木遺跡，浴・長池遺跡，浴・長池Ⅱ遺跡，弘福寺領田図北地区比定内遺跡等が挙げられる。浴・長池遺跡，浴・長池Ⅱ遺跡，弘福寺領田図北地区比定内遺跡ではこの時期に10㎡前後の方形に整然と区画された水田面を検出しているが，それ以外では遺物廃棄（埋納）土坑や河川堆積の包含遺物など遺物を中心とした確認例が多く，集落などが明確に把握できている事例は見られない。

中期になると，平野部では浴・長池遺跡，浴・長池Ⅱ遺跡，井手東Ⅰ遺跡，多肥松林遺跡で住居跡，周溝墓等を伴う集落の一部が調査されているが，規模・密度は総じて希薄である。また，中期後半になると久米池南遺跡など平野縁辺部や丘陵上に高地性集落が営まれる。

弥生時代後期になると遺跡は数，規模共に爆発的に増加し，平野部では上天神遺跡，天満・宮西遺跡，凹原遺跡，空港跡地遺跡のように十数棟の住居跡と大量の廃棄土器を伴う集落の他に太田下須川遺跡，蛙股遺跡，日暮・松林遺跡，井手東Ⅰ遺跡がある。丘陵部では，香川県の弥生後期の標識遺跡として著名な大空遺跡が平野東部に存在する。

古墳時代では，これら弥生後期の遺跡のうち上天神遺跡，凹原遺跡，空港跡地遺跡が古墳時代初頭に至るまで集落が存続することが知られており，太田下須川遺跡では古墳時代中期の集落を検出している。さらに生産関連の遺跡としては浴・松ノ木遺跡の水田跡，三谷三郎池の須恵器窯跡，中間・西井坪遺跡の土師質陶棺焼成土坑が知られ，古墳時代全般を通じて集落・生産遺跡の遺跡数は希薄である。このことは古墳の造営が全市域的に盛んであるのと対照をなしており今後古墳の造営母体となるべき集落域の解明が重要な課題となるものと思われる。

古墳の分布状況を概観すると，発生期と考えられる諏訪神社墳丘墓，鶴尾神社４号墳を皮切りに，石清尾山塊では猫塚，石船塚等の積石塚から成る石清尾山古墳群，三谷地区では小日山１・２号墳，前田地区では高松市茶臼山古墳，下笠居地区では横立山経塚古墳等が築造され，その後ほぼ古墳時代全期間を通じて地域単位で断続的に展開している。

石清尾山古墳群では頂上部の尾根筋を中心とした前期の積石塚の築造が途絶えて100年以上の断絶を経た後，南山浦古墳群，浄願寺山古墳群等の盛り土の群集墳が爆発的な盛行を見るし，三谷地区では小日山１・２号墳に続いて割竹形石棺をもつ全長88mの前方後円墳である三谷石船古墳，直径42mを測り周濠を巡らせる円墳の高野丸山古墳が中期に，そして後期には平石上２号墳，矢野面古墳，犬の馬場古墳，石船池古墳群といった古墳につながって行く。前田地区でも同様に高松市茶臼山古墳に続いて，前期から中期にかけての茶臼山古墳群，諏訪神社古墳，後期の久本古墳，小山古墳，山下古墳，瀧本神社古墳，岡山小古墳群，平尾古墳群といった古墳が引き続いて築かれている。

また，鬼無地区では前期末から中期初頭と見られるかしが谷２号墳をはじめとして組合式の

土師質陶棺を出土した中期前方後円墳の今岡古墳，巨石積みの横穴式石室を主体部にもつ古宮古墳，平木１号墳等からなる神高池古墳群へと続いている。なお，先述の土師質陶棺の焼成坑を検出した中間・西井坪遺跡は本津川沿いに鬼無地区の上流にあたり，西山崎町の本堯寺北古墳でも埴輪円筒棺の出土が伝えられており，本津川を介した物資や情報の流通が想像できる。

屋島地区でも，瀬戸内海を見渡す丘陵上に位置する長崎鼻古墳をはじめ浜北古墳群，中筋古墳群，金比羅神社古墳群、東山地古墳群などが知られている。未調査で時期の確定を見ないものも含まれるが，平野周辺部の地域単位よりもなお閉鎖性の強いであろう島嶼部の古墳群という点で，また生産基盤としての耕作地をもたないという点においても注目される地域である。

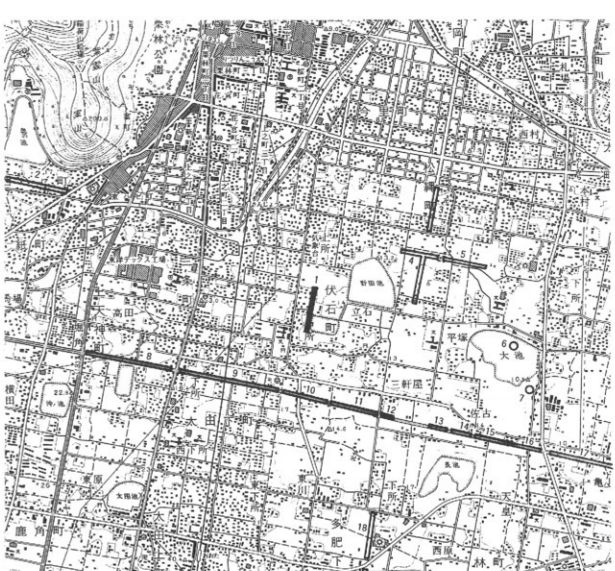
古代では条里遺構と古代寺院跡が注目される。浴・長池遺跡，浴・松ノ木遺跡，浴・長池Ⅱ遺跡，井手東Ⅰ遺跡，蛙股遺跡，上天神遺跡，凹原遺跡，松縄下所遺跡，空港跡地遺跡，宮西・一角遺跡等で条里界線にあたるとおもわれる遺構を検出している。遺構の多くは古いものでも平安時代から鎌倉時代，多くは近世以降の遺物を含み一般に条里の施行期とされる奈良時代とは時期的に隔たっているが，溝の存続期間と遺構としての埋没時期の関係など，検討すべき多くの問題をはらんでいる。

中でも，松縄下所遺跡は現地表面の条里とは10数メートルずれた位置にありながら地表条里と同方向の道路側溝状の遺構を検出し，時期も７世紀代にまで遡り得るなど高松平野の条里施行に関わる可能性がある重要な遺跡である。また，浴・長池Ⅱ遺跡の条里界線も旧郡界線にあたる部分に幅６ｍの間隔で道路側溝状の溝が並行し，空港跡地遺跡亀の町地区においても現在の畦道の延長として幅３～４ｍの道路側溝状の並行溝が検出されており，12世紀代の遺物が出土している。その他道路に関しては三谷町の南海道推定線上で河岸段丘の崖をおよそ６ｍ幅で開削して切通し状に斜面を形成したと思われる痕跡が確認されており，南海道に関連する遺構の可能性が考えられる。

古代寺院跡では宝寿寺跡，山下廃寺，下司廃寺，高野廃寺，拝師廃寺，坂田廃寺，多肥廃寺，勝賀廃寺などが知られている。伽藍配置などの具体的な様子の判るものはないが一様に瓦の散布が見られる。宝寿寺跡，下司廃寺では塔礎石が現存し，坂田廃寺，高野廃寺では建物礎石が転用材として散布している。また，坂田廃寺では過去に金銅釈迦誕生仏の出土を見たほか最近の調査で背後谷斜面から坂田廃寺に瓦を供給したと見られる片山池１号窯跡が確認された。

これら寺院跡の中のいくつかは地域単位の後期古墳群の分布と一致する傾向が強いことから，古墳時代後期から古代への転換期に地域単位の造墓集団が寺院建築への転向を図ったものと考えられる。坂田廃寺が所在する香川郡坂田郷には，日本霊異記にも在地の綾氏の話としての説話が伝えられており早くから仏教の受容が進んでいたことを示している。

中近世以降では，東道路関連の浴・長池遺跡，浴・松ノ木遺跡，弘福寺領讃岐国山田郡田図北地区比定地等で，旧河道が埋没していく過程の凹地に小規模な区画の水田面が検出されており，その後現在に至るまで連続して水田層の堆積が見られることから，この時期までに現在の地形環境がほぼ形作られていたことが推測される。また，東山崎・水田遺跡，川南遺跡では春日川の氾濫による洪水砂層上に営まれた近世集落跡や耕土層が発掘され，豊富な木製品が発見されているほか，現高松市美術館の紺屋町遺跡でも近世の陶磁器や木簡が出土し，玉藻町の高松城東ノ丸跡でも寛永年間の東の丸造営以降の石垣や建物礎石の遺構が出土し，往時の城下町の一端を窺うことができる。



1	キモンドー遺跡	11	居石遺跡	21	多肥松林遺跡（高松土木）
2	西ハゼ・土居遺跡	12	井手東Ⅱ遺跡	22	松林遺跡
3	天満・宮西遺跡	13	井手東Ⅰ遺跡	23	多肥廃寺
4	松縄下所遺跡	14	谷・長池Ⅱ遺跡	24	北原遺跡
5	境目・下西原遺跡	15	谷・長池遺跡	25	多肥宮尻遺跡
6	大池遺跡	16	谷・松ノ木遺跡	26	下池遺跡
7	弘福寺領関係遺跡	17	林・坊城遺跡	27	池ノ内遺跡
8	上天神遺跡	18	凹原遺跡	28	一角遺跡
9	太田下・須川遺跡	19	日暮・松林遺跡	29	宮西・一角遺跡
10	蛙服遺跡	20	多肥松林遺跡（新設高校）	30	空港跡地遺跡

第２図　周辺遺跡分布図（Ｓ：1/25,000）

第3章　調　査　の　概　要

第1節　調査区の位置

調査区は，道路建設に伴う発掘調査であるため南北方向に細長く設定され，全長は約200m，幅20mを測る。調査対象地の総面積は約3,460㎡である。1工区と2・4工区の間には東西方向の現有道路・水路があり，さらに地元で「キモンドーさん」と呼ばれている祠が鎮座しているため，調査は実施されなかった。また，2・4工区と3工区の間には東西方向の現有道路があり，未調査である。3工区の東接して蓮池の堤防があるため3工区の幅は約13mに狭くなっている。

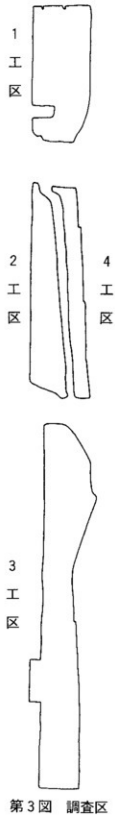
本遺跡は高松平野のほぼ中央に位置し，高松平野に数多く存在する溜池のひとつである蓮池に西接する。現況は，1工区南端と4工区に建物・住宅が建っていたが，それ以外は水田であり，南から北方向にゆるやかに傾斜して低くなっている。4工区南端の標高は11.51mであり，1工区北端は10.17mである。ただし，4工区は周囲の地表より低くなっており，2工区との比高差は約80cmを測る。

1工区は本遺跡の北端に位置する調査区であり，南側には建物があった。その北側には用水路が北東方向に流れ，一段低い水田がその用水路に沿って帯状に存在し，その位置が調査結果の自然旧河道と合致している。北側は広い水田である。1工区の西側南寄りの所に電柱が立っているため，安全性を考えて4×7mの範囲は掘削していない。標高は北側の水田で10.17m，低い水田で9.99mを測る。

2工区は本遺跡の中央に位置する調査区であり，東側の用水路を境に4工区と接する。北側には「キモンドーさん」の祠がある。現況は南端の狭い水田と広い水田の2枚の水田である。標高は南側の水田で10.69m北側の水田で10.84mを測る。

3工区は本遺跡の南端に位置する調査区であり，最も広い面積の調査区である。現況は5枚の水田であり，その標高は南端から11.51m・11.41m・11.38m・11.29m・11.15mを測り，南から北にゆるやかに低くなっている。調査区中央やや南寄りの位置で住居跡が検出されたため，調査区域を南北に約15m・東西約3m拡張している。

4工区は2工区の東側に位置し，本遺跡のほぼ中央である。現況は，前述したように3軒の住宅が建っており，その標高は10.00mを測り，周囲より約80cm低くなっている。北側には現有の用水路があり，東側には道路があるため，調査区の幅は狭く，特に南端になるにしたがい非常に狭くなっている。遺構確認面が深く，調査時に東壁の一部が崩落したため，補強措置を行った。



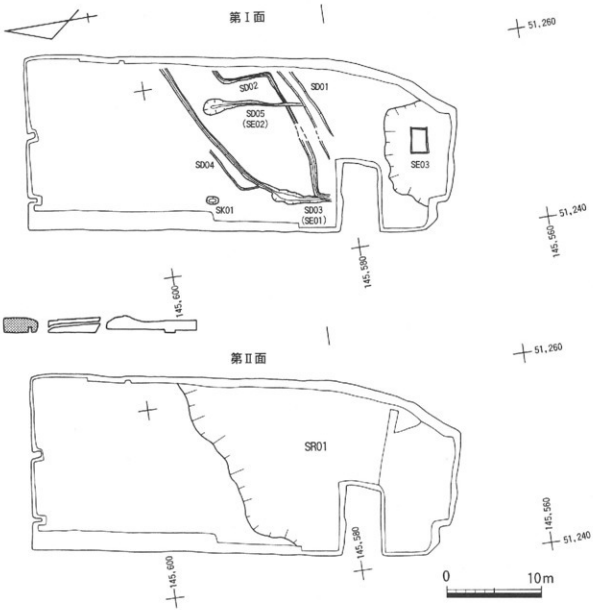
第3図　調査区

第２節　遺構と遺物

１．１工区

１工区は本遺跡の北端の調査区であり，南北方向の全長は約45m，東西幅は約19mを測る。東壁の南側は現有用水路があるため湾曲しており，調査区南端の幅は約13mである。調査区中央の南北軸座標値はＸ＝-145.590，東西軸座標値はＹ＝-51.250である。

土層の堆積状態はほぼ水平堆積をなしており，上層より現水田耕作土・床土と灰黄色シルト質極細砂（近世の条里型水田）が全域に堆積している。その下に褐灰色シルト質極細砂が部分的に見られる。調査区中央より南側にある自然旧河道の土層堆積は後述する。



第４図　１工区遺構配置図（Ｓ：1/400）

1）　弥生時代

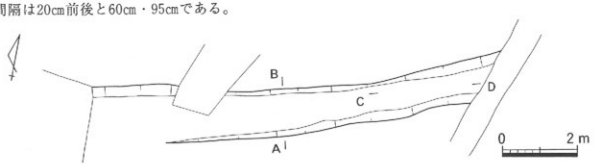
1　溝

ＳＤ01　（第５～８図）

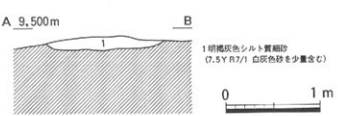
調査区中央やや南寄りにおいて検出された溝であり，ＳＲ01が埋没した後に作られていることからＳＲ01より後出の遺構である。

確認面のレベルは標高9.35m前後である。溝の方向はＮ－80°－Ｅを示し，ほぼ直線である。検出された全長は11.00mを測り，幅は1.25mである。確認面からの深さは15cmを測る。掘り込みは非常に緩やかであり，断面は浅いＵ字形を呈す。溝の西端では南側の掘り込みが消滅している。底面は平坦であり，そのレベルも同じである。

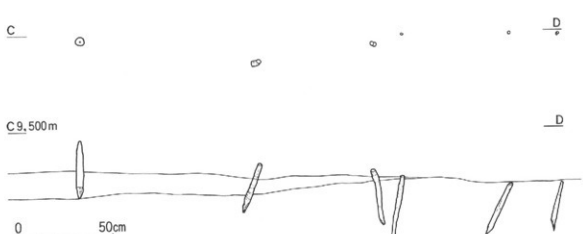
溝底面の東端においてほぼ直線上に打ち込まれた杭が６本検出された。杭の検出された範囲は2.50mであり，その方向は溝と同一である。杭は西端を除き，やや斜めに打ち込まれている。間隔は20cm前後と60cm・95cmである。



第５図　ＳＤ01　平面図（Ｓ：1/100）



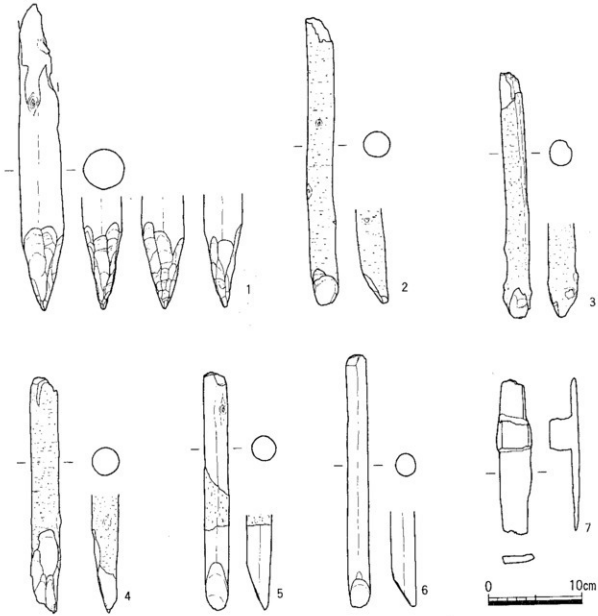
第６図　ＳＤ01　断面図（Ｓ：1/40）



第７図　ＳＤ01　杭列平・立面図（Ｓ：1/20）

出土遺物　遺物としては数点の弥生土器片と６本の杭，加工材があるが，土器は細片であり図化することはできなかった。

１～３は杭の基部を欠損する。１は先端部を全方向より明瞭に加工し，２～６は１方向より加工し，４～６は基部も加工している。２～５は樹皮が残存しており，樹皮の残存しない６も含めて椋と考えられる。



番号	器　種	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材　質	特　徴
1	杭	(32.5)	4.3			木	先端部は全方向より明瞭に加工する。
2	〃	(30.5)	2.8			〃	先端部は１方向より加工する。樹皮残存。
3	〃	(26.0)	2.4×2.6			〃	先端部は１方向より加工。枝払い。樹皮残存。
4	〃	25.0	3.0			〃	先端部は１方向より加工。樹皮残存。
5	〃	25.0	2.6			〃	先端部は１方向，基部は全方向より加工する。
6	〃	26.6	2.2			〃	先端部は１方向より加工する。
7	加工材	16.2	3.3	0.8		〃	板材。板目。

第８図　ＳＤ01出土遺物（Ｓ：1/4）

ＳＤ02　（第９・10図）

調査区のほぼ中央において検出された溝であり，ＳＤ03・05を切っている。しかし，これらの溝はほとんど時間差はないと思われる。

確認面のレベルは標高9.60m前後である。溝の方向は基本的に東西方向であるが，西端と東端においてほぼ直角に曲がっている。検出することができた全長は約21.70mを測り，その幅は30～70cmである。深さは25cmであり，断面はＵ字形を呈する。底面のレベルは南から北に若干下がっている。

出土遺物　遺物は数点の弥生土器片のみであり，細片のため図化することはできなかった。

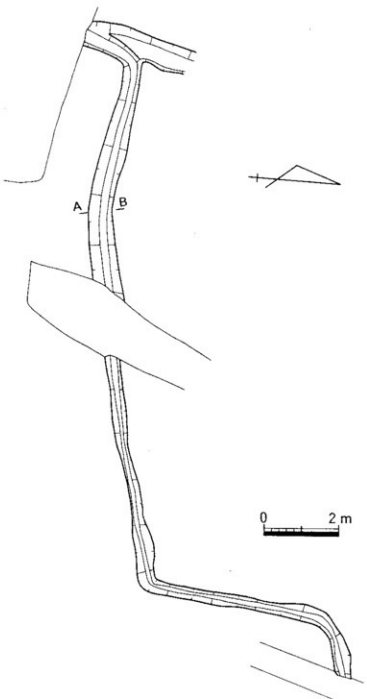
ＳＤ03　（第11図）

調査区のほぼ中央において検出された溝であり，ＳＤ02に切られ，ＳＤ04を切っている。南端近くに出水状遺構ＳＥ01が検出される。

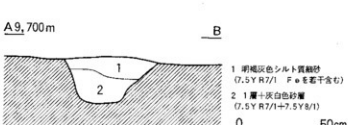
確認面のレベルは標高9.70m前後である。溝の方向は，若干湾曲しているがN-66°－Ｅを示す。検出できた全長は約24.50m幅は40～70cmを測る。深さは10cmであるが，ＳＥ01の南側では16cmとなり，底面の中央が少し高くなっている。北側の底面のレベルは同じである。断面はＵ字形を呈する。

ＳＥ01は長軸3.20m，短軸1.50mを測る不整な楕円形を呈する。最深部は54cmを測る。

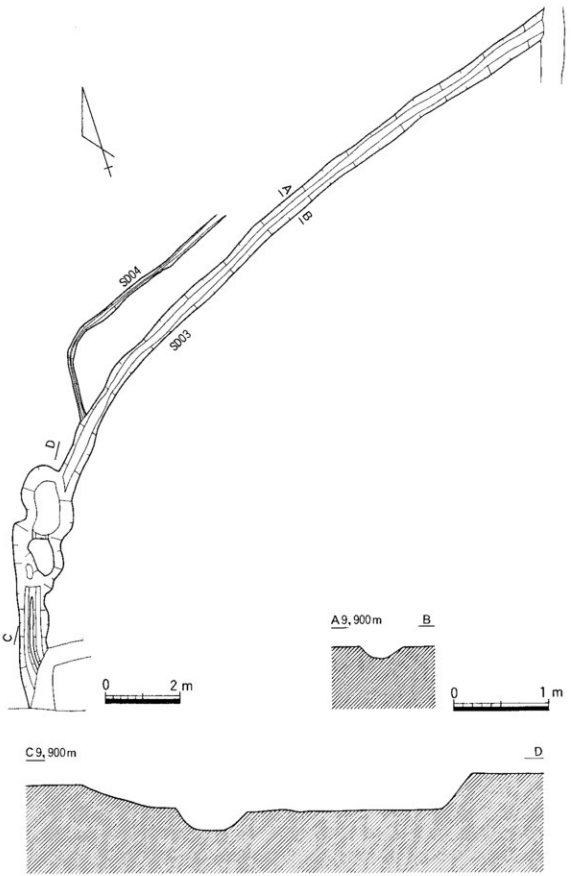
出土遺物　遺物は数点の弥生



第９図　ＳＤ02　平面図（Ｓ：1/100）



第10図　ＳＤ02　断面図（Ｓ：1/20）



第11図　ＳＤ03・04　平・断面図（Ｓ：1/40．1/100）

土器片のみであり，細片のため図化することはできなかった。

ＳＤ04　（第11図）

調査区のほぼ中央で検出された溝であり，ＳＤ03に切られている。

確認面のレベルは標高9.80m前後である。検出できた全長は7.20m，幅10～20cmを測る。深さは５cmである。断面はＵ字形を呈する。平面形はほぼ直角に曲がっている。底面のレベルはゆるやかに北に下がっている。

出土遺物　遺物は数点の弥生土器片のみであり，細片のため図化することはできなかった。

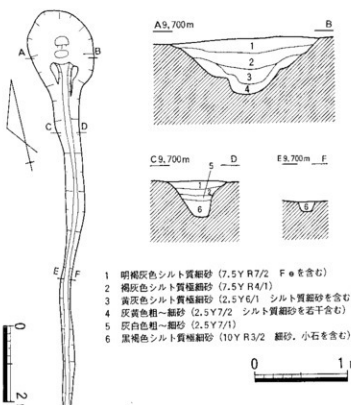
ＳＤ05　（第12・13図）

調査区中央東寄りにおいて検出された溝であり，ＳＤ02に切られる。北端にＳＥ02が検出された。

確認面のレベルは標高9.25～9.65mである。溝の方向はＮ－10°－Ｅを示し，ほぼ直線である。検出できた全長は10.50m，幅は20～70cmを測る。深さは１～40cmである。掘り込みはやや急傾斜であり，Ｕ字形を呈する。底面のレベルは北方向に若干下がっている。

ＳＥ02はＳＤ05の北端に位置し直径1.75mを測る円形を呈する。掘り込みは緩やかで底面は狭い。最深部の深さは60cmを測る。一段高い所の深さは56cmである。

出土遺物　遺物は弥生土器壺(1)石鏃(2)，その他の弥生土器片である。

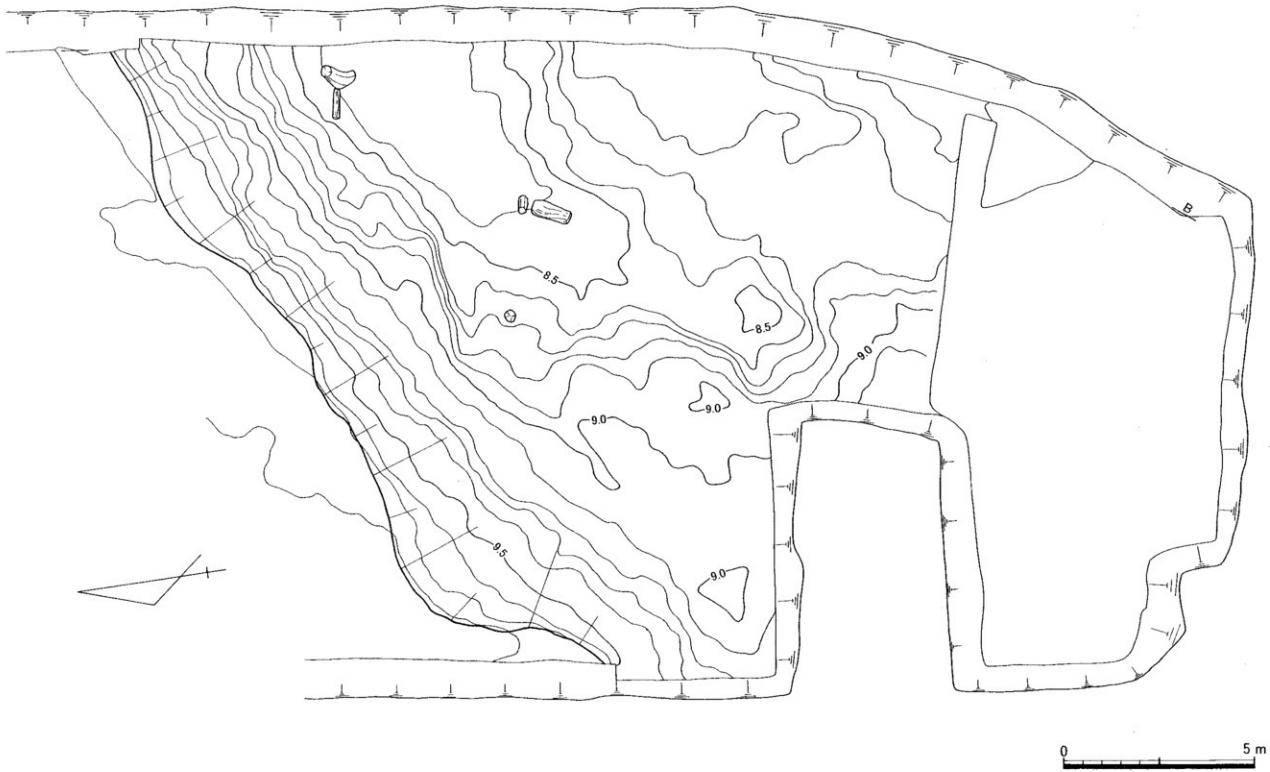


第12図　ＳＤ05　平・断面図（Ｓ：1/40．1/100）

番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壺	26.4		(2.1)	内外面ともに摩滅	鈍い橙(7.5YR6/4)		石英，長石，角閃石

番号	器種	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
2	石鏃	3.4	1.3	0.3	1.8	サヌカイト	凸基式．全面ていねいな調整。断面六角形。

第13図　ＳＤ05出土遺物（Ｓ：1/4．1/2）



第14図　ＳＲ01　平面図（Ｓ：1/100）

2　自然旧河道

ＳＲ01　（第14～27図）

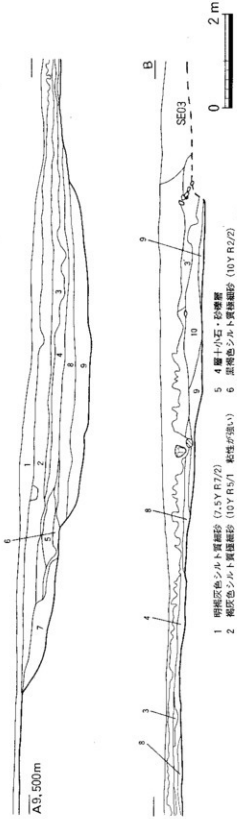
調査区の中央から南側にかけて検出された自然旧河道である。南側はＳＥ03があるため掘り下げていない。ＳＲ01が埋没した後にＳＤ01～05が掘削されている。

確認面は黄灰色シルトの地山であり，そのレベルは標高9.70m前後である。旧河道の北岸のみの検出であり，全体の方向・規模等は不明である。北岸の方向はＮ－70°－Ｅである。調査区の南西隅で確認面の地山が存在していることより，南西方向に延びるのではなく，南東方向に曲がると考えられる。

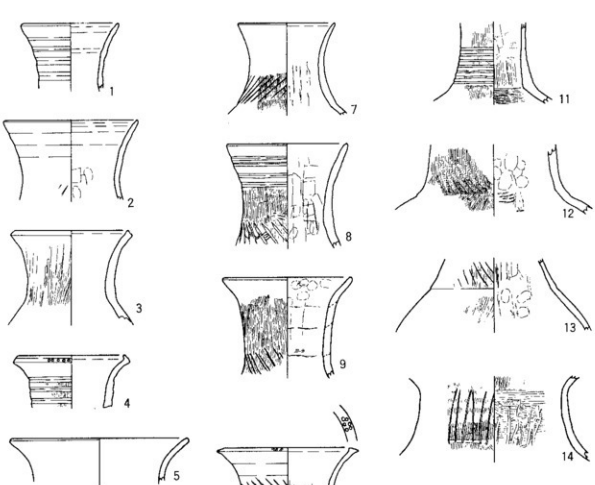
北岸の傾斜は緩やかであり，最深部の標高は8.30mで，確認面との比高差は1.40mである。河床は凸凹が著しく，浅い部分の標高は9.00m前後である。

埋土は10層に分層することができほぼ水平堆積を示している。しかし南側になると第2層上面は非常に細かく変化しており，人為的な要因を考える必要があるかもしれない。

出土遺物　旧河道の埋土中および河床より多量の遺物が出土した。遺物は，弥生土器壺（1～58・145），同甕（59～75・139～141），同底部（76～94），同高杯（95～121），同器台（122・123・132），同鉢（124～131），同手づくね土器（133），同蓋（134・135），同製塩土器（136・137），同バケツ形土器（138），縄紋土器深鉢（142～144），土錘（146），打製石庖丁（147～153），打製石斧（154・155），石鏃（156～158），加工材（159～179），種子（180～183）である。

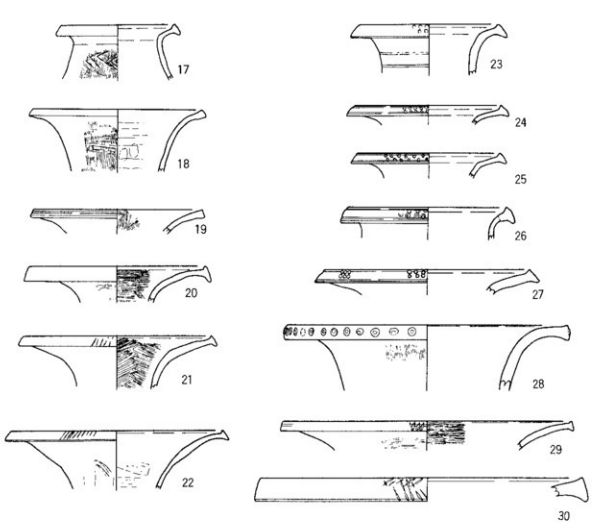


第15図　ＳＲ01　土層断面図（Ｓ：1/80）



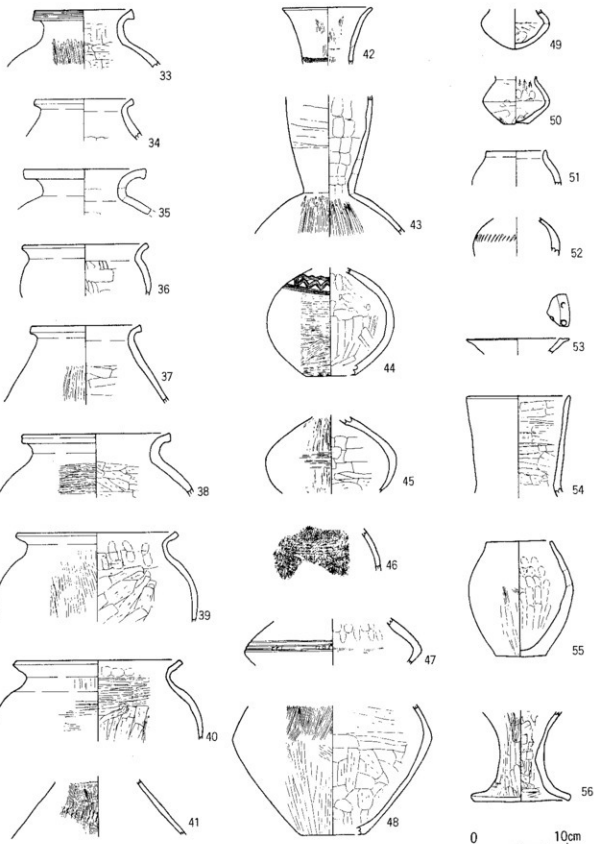
番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	色調 内	胎土
1	弥生土器 壺	10.2		(7.1)	口縁部はゆるやかに外反。内外面に浅い凹線、ナデ。	純黄橙(10YR6/4)		石英、長石、角閃石
2	〃 〃	14.2		(8.3)	浅い凹線、ヘラによる押圧文。内面指頭圧痕ナデ。	純褐(7.5YR5/4)	鈍い褐(7.5YR6/3)	〃
3	〃 〃	12.2		(10.3)	口縁部はヨコナデ。頸部外面はヘラ削り後にヘラミガキ。	〃	褐 (7.5YR4/4)	〃
4	〃 〃	11.2		(5.6)	口縁部は上方に拡張し、竹管文5個。頸部は凹線、刷毛目。	純黄褐(10YR5/4)		〃
5	〃 〃	18.8		(4.8)	口縁部は大きく広がる。内外面とも摩滅。	灰白(2.5Y8/1)	灰黄 (2.5Y7/2)	細砂、細礫
6	〃 〃	18.0		(8.5)	口縁端部は拡張し、刻目文。外面に斜目突帯文3条。	灰黄褐(10YR5/2)		長石、微～細砂
7	〃 〃	10.4		(9.7)	頸部外面は細かい刷毛目。刷毛原体による押圧文。しぼり目。	明褐(7.5YR5/6)	純黄橙(10YR7/3)	石英、長石、角閃石
8	〃 〃	12.6		(11.1)	外面刷毛目、屈体による押圧文。内面指頭圧痕、ヨコナデ、ヘラナデ。	純黄褐(10YR6/3)		〃
9	〃 〃	13.4		(10.5)	外面刷毛目、櫛状工具による押圧文。内面ナデ、輪積み痕。	〃		長石、角閃石
10	〃 〃	13.2		(6.6)	口縁端部に竹管文6個。外面ヘラ押圧文。刷毛目後にナデ。	〃	灰黄褐(10YR5/2)	石英、長石、角閃石
11	〃 〃			(8.5)	外面に凹線6条、刷毛目。内面は横撫の刷毛目。ヘラナデ。	灰黄褐(10YR5/2)	純黄橙(10YR7/2)	長石、角閃石
12	〃 〃			(7.3)	外面は刷毛原体による当点文。刷毛目。内面指頭圧痕、ナデ。	純黄橙(10YR7/3)		石英、長石、角閃石
13	〃 〃			(7.7)	外面は刷毛目、ヘラによる刻目文。内面しぼり目。指頭圧痕。	純黄橙(10YR7/4)		〃
14	〃 〃			(8.8)	9本単位の刷毛目後にヘラナデ、ヘラミガキ。	純黄橙(10YR7/3)		〃
15	〃 〃			(5.5)	外面に2条の沈線。内面しぼり目、ナデ。	灰黄褐(10YR5/2)	純黄橙(10YR7/3)	〃
16	〃 〃			(4.9)	外面に3条の沈線。	灰白(2.5Y8/2)	灰黄(2.5Y7/2)	長石、角閃石

第16図　ＳＲ01出土遺物(1)（Ｓ：1/4)



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	色調 内	胎土
17	弥生土器	壺 12.0		(5.9)	口縁部は上下に拡張。頸部外面は櫛毛目、刻目文。	灰黄褐(10YR6/2)		石英、長石、角閃石
18	〃	〃 17.8		(6.6)	外面は明毛羽後にヘラミガキ。内面は指頭圧痕後にナデ。	鈍い橙(7.5YR5/3)	灰黄(7.5YR5/2)	〃
19	〃	〃 18.0		(2.5)	口縁部に朱塗り。外面ナデ、内面ヘラミガキ。	〃	〃	〃
20	〃	〃 18.8		(3.8)	口縁部は大きく拡張、ヨコナデ。内面ヘラミガキ。	〃	〃	〃
21	〃	〃 20.0		(5.5)	口縁部は拡張、刻目文。外面ナデ、内面ヘラミガキ。	鈍黄橙(10YR5/4)	鈍黄橙(10YR5/3)	〃
22	〃	〃 22.6		(6.1)	口縁端部は、刻目文。外面ヘラ削り後にナデ、内面ヘラ削り。	鈍黄橙(10YR5/3)	鈍黄橙(10YR6/3)	〃
23	〃	〃 14.6		(5.4)	口縁部は拡張、竹管文。外面に沈線。摩滅。	灰黄褐(10YR5/2)		細砂、新雲
24	〃	〃 15.6		(2.6)	口縁部は拡張し、竹管文。浅い沈線。	鈍黄褐(10YR5/4)		石英、長石、角閃石
25	〃	〃 15.0		(2.7)	〃	鈍黄褐(10YR6/2)		長石、角閃石
26	〃	〃 16.6		(3.4)	〃	鈍黄褐(10YR5/4)		石英、長石、角閃石
27	〃	〃 21.8		(2.6)	口縁部は拡張し、5個1組の竹管文を6組。ヨコナデ。	灰褐(7.5YR4/2)		〃
28	〃	〃 30.0		(6.9)	大型の壺。口縁部は回転押え。外面櫛毛目、内面ナデ。	鈍黄橙(10YR7/4)		〃
29	〃	〃 30.8		(3.0)	大型の壺。口縁部に刻目文。内外面ともヘラミガキ。	灰黄褐(10YR5/2)	鈍黄橙(10YR5/3)	〃
30	〃	〃 35.4		(2.5)	大型の壺。口縁部は拡張し、櫛形状の刻目文。	黄褐(7.5YR5/3)	灰褐(7.5YR4/2)	微～細砂、雲母
31	〃	〃 58.0		(2.1)	口縁部外面、口縁部内面に竹管文。	褐色(10YR4/4)		石英、長石、角閃石
32	〃	〃 16.2		(1.4)	口縁端部に刻目文。内面に刻目状圧痕密集。4個の孔。	灰黄褐(10YR4/2)	鈍黄橙(10YR6/3)	細～粗砂、石英

第17図　ＳＲ01出土遺跡(2)（Ｓ：1/4）



第18図　ＳＲ01出土遺物(3)（Ｓ：1/4）

（第18図）

番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
33	弥生土器　壺	10.2		(6.2)	口縁部に凹線。胴部外面ヘラミガキ、内面はヘラ削り。	灰褐(7.5YR5/3)	灰黄褐(10YR5/2)	石英、長石、角閃石
34	〃　〃	10.2		(4.4)	外面ヨコナデ、内面ナデ、ヘラ削り。スス付着。	暗褐(7.5YR3/3)		〃
35	〃　〃	13.0		(4.8)	口縁部は短く大きく外反し、ヨコナデ。胴部外面ナデ。	灰黄褐(10YR6/2)		〃
36	〃　〃	13.0		(5.5)	口縁部外反、外面ヘラナデ。胴部内面はヘラ削り。	〃		〃
37	〃　〃	11.6		(8.2)	口縁部ヨコナデ。胴部外面ヘラミガキ、内面ヘラ削り。	暗褐(7.5YR3/3)		〃
38	〃　〃	15.6		(6.6)	口縁端部ヘラナデ。胴部外面ヘラミガキ、内面ヘラ削り。	灰黄(2.5Y6/2)		〃
39	〃　〃	16.6		(9.4)	肩部張る。胴部外面ヘラミガキ、内面指頭圧痕、ヘラ削り。	鈍い褐(7.5YR5/3)	鈍い褐(7.5YR5/4)	〃
40	〃　〃	17.4		(8.3)	胴部外面ヘラミガキ、ナデ。内面ヘラミガキ、ヘラ削り。	鈍い褐(7.5YR5/4)	鈍い褐(7.5YR5/3)	〃
41	〃　〃			(6.0)	外面細かい刷毛目・貝殻押圧文。内面ナデ。	鈍黄橙(10YR7/2)	褐灰(10YR6/1)	〃
42	〃　細頸壺	9.6		(6.0)	外面ヘラミガキ・ナデ・波状文、内面ナデ・ヘラミガキ。	鈍黄褐(10YR6/3)	鈍黄褐(10YR6/4)	〃
43	〃　〃			(14.7)	頸部内面指頭圧痕。胴部内外面ヘラミガキ。	鈍黄褐(10YR5/3)		〃
44	〃　〃		5.2	(11.3)	外面波状文・沈線、ヘラミガキ。内面指頭圧痕・板ナデ。	灰黄褐(10YR6/2)	黒褐(7.5YR3/1)	〃
45	〃　〃			(8.0)	扁平な胴部。外面ヘラミガキ。内面ナデ・ヘラ削り。	橙(7.5YR6/6)	暗灰黄(2.5Y5/2)	〃
46	〃　〃			(4.4)	外面に沈線5条。摩滅。	鈍黄橙(10YR7/2)		〃
47	〃　〃			(4.8)	外面に3条の沈線・竹管文、内面指頭圧痕・ナデ・刷毛。	灰黄褐(10YR5/2)	灰黄褐(10YR6/2)	〃
48	〃　壺		6.8	(13.5)	外面上半刷毛目、下半ヘラミガキ。内面ヘラ削り。	鈍黄褐(10YR5/3)		〃
49	〃　小型丸底壺			(4.2)	外面摩滅、内面ナデ・ヘラ削り。輪積み痕。	鈍黄橙(10YR6/3)	鈍黄橙(10YR6/4)	長石、角閃石
50	〃　〃		2.6	(5.0)	外面ヨコナデ・ヘラ削り。内面しぼり目・指頭圧痕・ナデ。	褐(7.5YR4/4)		石英、長石、角閃石、雲母
51	〃　小型壺	6.2		(3.7)	口縁部は短く直立。内外面摩滅。	鈍黄橙(10YR7/2)	黄灰(2.5Y4/1)	微～細砂
52	〃　〃			(3.9)	外面に刻目文。内外面ナデ。	鈍黄橙(10YR7/3)	黒(10YR2/1)	細砂多量
53	〃　甕	11.0		(1.6)	内外面ヨコナデ。内面に竹管文。	鈍黄橙(10YR5/3)		石英、長石、角閃石
54	〃　〃	10.8		(10.6)	直線的な頸部。外面摩滅(ヘラミガキ)、内面ヘラナデ。	灰黄褐(10YR5/2)	灰黄褐(10YR4/2)	〃
55	〃　無頸壺	7.1	5.4	12.1	外面下半ヘラ削り・ヘラミガキ。内面指頭圧痕、指ナデ。	灰黄褐(10YR6/2)		石英、長石
56	〃　台付壺		10.2	(9.4)	外面ナデ・ヘラナデ・ヨコナデ。内面ヘラ削り・ヘラナデ。	〃		石英、長石、角閃石

1～3・5はゆるやかに外反する口縁部の広口壺であり，文様をもたない。1・2は浅い凹線を有し，3の口縁端部は面をなす。6は口縁端部外面に刻目文を施し，その下方に刻目突帯文を3条巡らす。7～14は頸部外面に文様を持つものであり，外面に刷毛目を施し，その後に刷毛原体による押圧文（7・8）と櫛状工具による押圧文（9），ヘラによる押圧文（10・13）刷毛原体による烈点文（12）が施される。15・10は口縁端部に竹管文をもつ。14はヘラミガキを規則的に縦方向に施す。

17～32は口縁端部を上下に拡張する。19は口縁端部に朱塗りされている。19～21は内面に分割ヘラミガキが施される。23～28・31は口縁端部に竹管文を有する。23～27は単位を持ち施されるが，28・31は全周している。31は口縁部内面にも2段の竹管文がある。29・30・32は口縁端部に刻目文を施し，32は口縁部内面に刻目貼付突帯文を持つ。

33～40は短頸広口壺である。37を除き胴部は大きく球形に張る。

42～47は細頸壺である。42は外面に波状文を巡らす。43の頸部内面は規則的な指頭圧痕が施される。44の外面に波状文・沈線が巡り，ヘラミガキが施される。47は算盤珠状の胴部を呈す。

49・50は小型丸底壺，51・52は小型壺である。

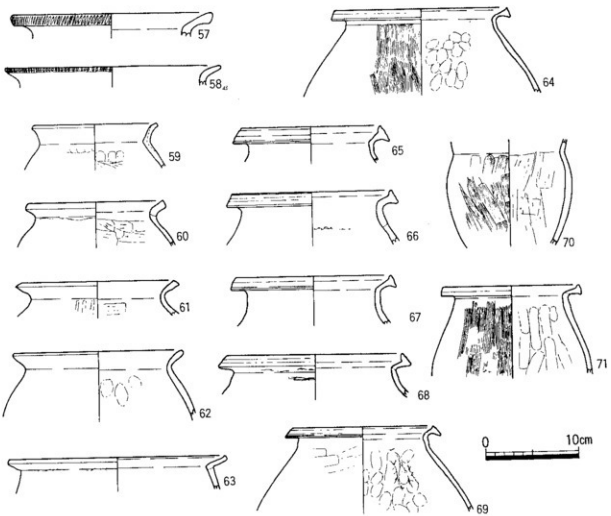
54は長頸壺であり，ほぼ直線的な頸部である。

55は完形の無頸壺，56は台付壺の台部分であり，内外面ともていねいな調整が施される。

57・58は口縁端部に刻目文を施される。

59～63は無文の甕で，口縁端部はわずかに角ばる。64～75の甕は，口縁端部が大きく上下に拡張する。65～69は大きく拡張した口縁端部外面に非常に浅い凹線を巡らす。64・70・71・73・75は，胴部外面に刷毛目，内面に指頭圧痕・ヘラ削りが施される。72の胴部外面は叩き目の後に刷毛目が施され，下半にはヘラミガキが施される。内面の上部に指頭圧痕，下半にヘラ削りが施される。74の外面は叩き目とナデが施されている。

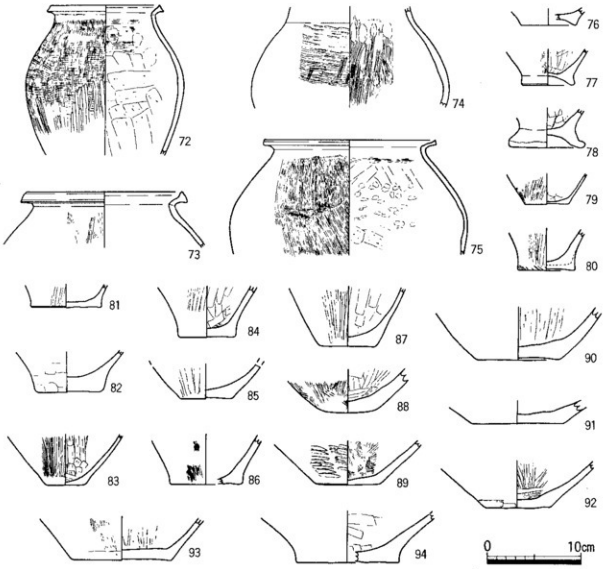
76～94は底部である。77・78は低い台である。79～94は平底であるが，88は若干丸底気味である。88・89の外面は叩き目が施される。



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	色調 内	胎土
57	弥生土器 壺	21.4		(2.5)	口縁端部に押圧文。ヨコナデ。	灰黄褐(10YR5/2)		石英、長石、角閃石
58	〃 〃	23.0		(2.1)	口縁端部に刻目文。摩滅。	灰白(10YR8/2)		石英、長石
59	〃 甕	13.5		(4.7)	口縁部ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面指頭圧痕、ヘラ削り。	明赤褐(2.5YR5/2)		石英、長石、角閃石
60	〃 〃	14.4		(4.7)	口縁部ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラ削り。	鈍赤褐(10R5/3)	鈍黄橙(10YR6/3)	〃
61	〃 〃	16.4		(3.6)	口縁部ヨコナデ。胴部外面ヘラナデ、内面ヘラ削り。	赤褐色(10YR2/3)	鈍黄橙(10YR5/4)	〃
62	〃 〃	18.0		(7.4)	口縁部、胴部外面摩滅。内面指頭圧痕。	鈍黄橙(10YR7/3)		微砂
63	〃 〃	23.2		(3.5)	くの字口縁。口縁部ヨコナデ、胴部外面摩滅、内面ナデ。	浅黄(2.5Y7/3)	灰黄(2.5Y7/2)	〃
64	〃 〃	18.4		(8.9)	口縁端部は肥大。胴部外面縦刷毛目、内面指頭圧痕の後ナデ。	鈍黄褐(10YR5/3)		石英、長石、角閃石
65	〃 〃	15.0		(3.7)	口縁端部は肥大し、浅い凹線。ヨコナデ。	橙(10YR6/6)		〃
66	〃 〃	17.0		(5.7)	口縁端部に浅い凹線。ヨコナデ。胴部ナデ。	灰黄褐(10YR5/2)	鈍黄橙(10YR7/2)	〃
67	〃 〃	16.6		(5.1)	口縁端部は肥大。摩滅。	鈍赤褐(5YR5/4)		〃
68	〃 〃	18.6		(4.7)	口縁端部は肥厚し、浅い凹線有り。ヨコナデ、ヘラミガキ。	褐〜橙(7.5YR6/4)	鈍黄橙(10YR7/2)	〃
69	〃 〃	14.8		(9.0)	口縁端部は肥大し、浅い凹線、外面ヘラナデ。内面指頭圧痕	黒(7.5YR2/1)	鈍黄褐(10YR5/4)	〃
70	〃 〃			(11.3)	外面は明瞭なヘラナギ、内面ヘラ削り。	灰白(2.5Y8/1)	灰白(2.5Y8/2)	微砂粒
71	〃 〃	14.4		(9.3)	口縁端部肥大。胴部外面は縦刷毛目、内面指頭圧痕。	鈍黄橙(10YR6/3)	鈍黄橙(10YR5/3)	長石、角閃石

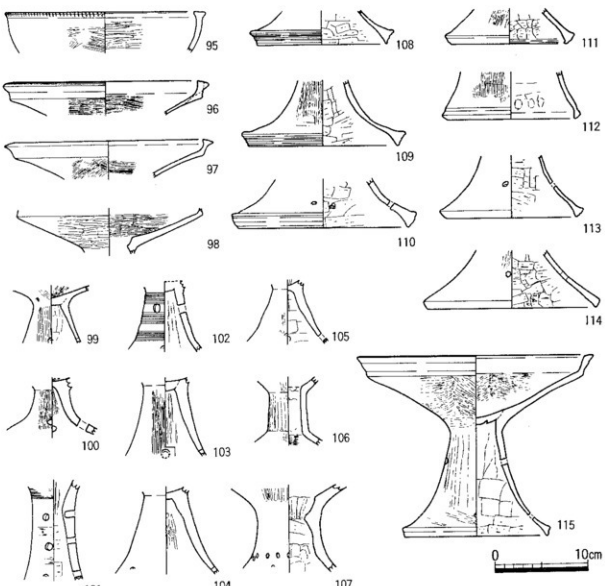
第19図　ＳＲ01出土遺物(4)（Ｓ：1/4)

95はやや深い皿状の杯部をもち，口縁端部が拡張し外面に刻目文を施す。96〜98,115は皿状の杯部から屈曲して立ち上げる口縁をもち，端部を拡張させる。杯部内外面とも分割ヘラミガキが施される。115は完形で，脚部に２段の孔をもつ。100,106の脚部を除き，ゆるやかにしっかり広がる脚であり，108〜111の裾部は大きく拡張し，凹線をもつ。117,118は外面にヘラによる直線文を放射状に施す。



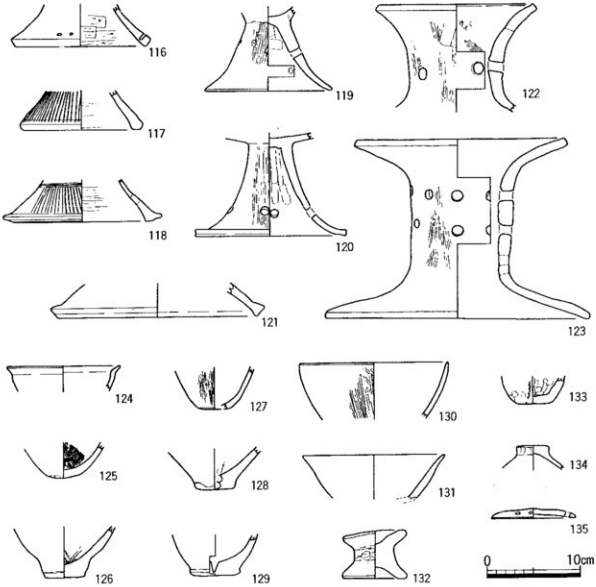
番号	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	形態・手法の特徴	色調 外	色調 内	胎土
72	弥生土器 甕	11.6		(15.7)	外面タタキ後に刷毛目、ヘラミガキ。内面刷毛目・ヘラ削り。	鈍黄橙(10YR7/2)	鈍黄橙(10YR6/3)	石英、長石、角閃石
73	〃 〃	16.6		(5.8)	口縁端部歪大、ヨコナデ。胴部外面刷毛目。	褐(7.5YR4/4)		〃
74	〃 〃			(10.6)	外面タタキ目・ナデ。胴部内面指頭圧痕後に刷毛目。	鈍い黄(2.5Y6/3)		微砂、雲砂、石英
75	〃 〃	18.2		(12.0)	くの字口縁。外面刷毛目、内面刷毛目・指頭圧痕・ヘラ削り。	鈍黄橙(10YR5/3)	鈍黄橙(10YR6/3)	石英、長石、角閃石
76	〃		6.0	(1.8)	上げ底。摩滅。	鈍黄橙(10YR7/3)	灰黄褐(10YR4/2)	細礫、石英、長石
77	〃		5.4	(3.8)	上げ底。外面ナデ・ヘラミガキ、内面ヘラナデ。	鈍黄褐(10YR5/3)	褐灰(10YR4/1)	石英、長石、角閃石
78	〃		8.0	(4.1)	上げ底。外面ナデ・ヘラナデ、内面ヘラ削り。	灰黄褐(10YR5/2)	鈍黄橙(10YR6/3)	〃
79	〃		4.8	(3.1)	器内薄い。外面ヘラミガキ、内面ヘラ削り。底面ナデ。	黒褐(10YR3/2)	〃	〃
80	〃		6.2	(4.4)	ほぼ直立。胴部外面・底面ヘラミガキ。輪積み痕。	鈍黄褐(10YR5/3)	褐灰(10YR4/1)	〃
81	〃		7.4	(2.4)	外面ヘラミガキ。底面板ナデ。	灰黄褐(10YR4/2)	鈍黄褐(10YR5/3)	〃
82	〃		7.0	(4.3)	底部厚い。摩滅するが、外面にヘラ削り が残る。	鈍い橙(7.5YR6/4)	鈍黄橙(10YR6/4)	〃
83	〃		4.0	(5.3)	外面ヘラミガキ。内面ヘラ削り。底面1方向からヘラミガキ。	黒褐(10YR3/1)	鈍黄褐(10YR5/4)	〃
84	〃		6.2	(5.3)	外面ヘラミガキ・ヘラナデ、内面ヘラ削り。底面ヘラナデ。	鈍黄橙(10YR7/2)	黄灰(2.5Y4/1)	〃
85	〃		5.6	(3.6)	外面ヘラ削り、内面摩滅。	鈍黄褐(10YR5/4)		石英、長石多量
86	〃		7.6	(5.1)	外面刷毛目、内面ナデ。底面ナデ。	灰黄褐(10YR6/2)	鈍黄橙(10YR7/2)	細礫、石英
87	〃		5.9	(6.2)	外面・底面ヘラミガキ。内面ヘラナデ。	鈍黄褐(10YR5/3)	黒(10YR2/1)	石英、長石、角閃石
88	〃		5.4×4.9	(4.5)	外面タタキ目の後に刷毛目・ナデ。内面ヘラ削り。底面ナデ。	灰黄(2.5Y7/2)		細砂、細礫、石英
89	〃		6.6	(4.7)	外面タタキ目、内面刷毛目。底面ナデ。	褐灰(10YR5/1)		微～細砂、石英
90	〃		9.0	(5.5)	外面摩滅、内面ヘラ削り。底面指頭圧痕後にヘラナデ。	灰黄(2.5Y6/2)	黒褐(2.5Y3/1)	石英、長石、角閃石
91	〃		9.6	(2.5)	摩滅。	灰白(10YR8/1)	褐灰(10YR5/1)	微～細砂
92	〃		6.8	(4.9)	外面ヘラ削り後にナデ、外面ヘラミガキ後にヘラナデ。	鈍い黄(2.5Y6/3)	灰黄(2.5Y6/2)	細砂、雲砂若干
93	〃		10.8	(4.5)	外面ヘラミガキ・ナデ、内面ヘラ削り。底面ヘラナデ。	灰黄(2.5Y7/2)	鈍黄褐(10YR5/3)	石英、長石、角閃石
94	〃		11.0	(5.4)	外面ヘラミガキ・ヘラナデ。内面ヘラナデ。底面ヘラ削り。	鈍い橙(7.5YR6/3)	鈍黄橙(10YR6/4)	〃

第20図　S R01出土遺物(5)（S：1/4）



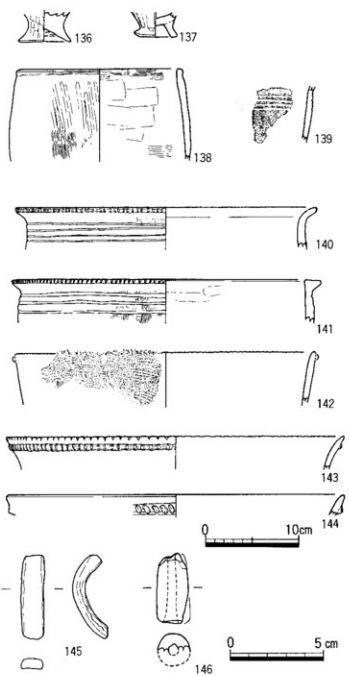
番号	器種		法量(cm)			形態・手法の特徴	色調		胎土
			口径	底径	器高		外	内	
95	弥生土器	高杯	21.4		(4.3)	口縁端部は肥厚,外面に刻目文,杯部は半球状でヘラミガキ。	褐灰(7.5YR4/1)	灰黄褐(10YR5/2)	石英、長石、角閃石
96	〃	〃	19.4		(3.5)	口縁端部は外側に肥厚。棧、杯部ヘラミガキ。	鈍黄褐(10YR5/3)		〃
97	〃	〃	20.0		(3.4)	口縁端部は肥厚。棧、杯部ヘラミガキ。	褐(7.5YR4/4)	褐(7.5YR4/6)	〃
98	〃	〃			(4.9)	円盤充填。棧、杯部ヘラミガキ。	鈍黄橙(10YR6/4)	鈍い褐(7.5YR5/3)	長石、角閃石
99	〃	〃			(6.0)	円盤充填。杯部・脚部外面ヘラミガキ。脚部内面ヘラ削り。	鈍黄褐(10YR4/3)	〃	石英、長石、角閃石
100	〃	〃			(9.0)	杯部内面・脚部外面ヘラミガキ、内面しぼり目・ヘラ削り。	灰黄褐(10YR5/2)		〃
101	〃	〃			(10.6)	外面に3段の沈線、内面ヘラ削り。3個の孔を3段。	鈍黄橙(10YR7/2)		〃
102	〃	〃			(7.3)	外面ヘラミガキ・ナデ、4条の沈線を3段。内面しぼり目。	〃	鈍黄橙(10YR7/3)	〃
103	〃	〃			(8.3)	円盤充填。脚部外面ヘラミガキ、内面しぼり目。	鈍黄橙(10YR6/3)		微～細砂、石英
104	〃	〃			(9.2)	円盤充填。脚部外面撫減、内面しぼり目・ナデ・刷毛目。	鈍黄褐(10YR5/4)		石英、長石、角閃石
105	〃	〃			(6.7)	杯部ヘラミガキ。脚部外面刷毛目の後ナデ。	灰黄褐(10YR5/2)		〃
106	〃	〃			(7.2)	外面ヘラミガキ。内面ナデ・刷毛目。	灰黄褐(10YR5/2)		〃
107	〃	〃			(9.2)	円盤充填。杯部ヘラミガキ。脚部外面ヘラ削り後に刷毛目。	鈍い褐(7.5YR6/3)		〃
108	〃	〃		14.0	(3.5)	裾部は肥厚し、3条の沈線、ヨコナデ。内面ヘラ削り。	鈍黄橙(10YR6/3)	灰黄褐(10YR4/2)	〃
109	〃	〃		15.8	(6.9)	裾部に3条沈線、ヨコナデ,外面ヘラミガキ,内面ヘラ削り。	鈍黄褐(10YR5/3)		〃
110	〃	〃		18.0	(4.7)	裾部は肥厚し沈線。内面ヘラ削り。	褐(7.5YR4/3)	鈍黄褐(10YR5/4)	〃
111	〃	〃		12.6	(3.7)	裾部は肥厚。外面ヘラミガキ・ナデ、内面ヘラ削り。	灰黄(2.5Y6/2)		〃
112	〃	〃		13.6	(5.1)	外面荒い刷毛目、内面ヘラナデ・指頭圧痕。	鈍い褐(10YR6/3)		〃
113	〃	〃		14.0	(6.5)	裾部肥厚。外面撫減、内面ヘラ削り。	鈍黄橙(10YR6/4)	鈍黄褐(10YR5/3)	石英、長石、微～粗砂
114	〃	〃		18.0	(6.0)	外面は撫減するが一部にヘラミガキがある。内面ヘラ削り。	鈍い褐(7.5YR5/4)	鈍い橙(7.5YR6/4)	石英、長石、角閃石
115	〃	〃	25.2	15.2	19.1	円盤充填,杯部ヘラミガキ,脚部外面ヘラ削り後ナデ,内面ヘラ削り。	鈍黄橙(10YR7/2)		〃

第21図　ＳＲ01出土遺物(6)（Ｓ：1/4）



番号	器種		法量(cm)			形態・手法の特徴	色調		胎土
			口径	底径	器高		外	内	
116	弥生土器	高杯		14.0	(4.4)	外面摩滅。内面ヘラ削り。2個の孔は未完通。	鈍い黄(2.5Y6/3)		細～粗砂、石英
117	〃	〃		12.6	(4.1)	外面にヘラによる直線文を施す。内面ヘラ削り。	浅黄(2.5Y7/3)		〃
118	〃	〃		13.6	(4.4)	粗部摩滅。外面に沈線とヘラによる直線文。内面ヘラ削り。	灰白(10YR8/2)		細～粗砂、石英、金雲母
119	〃	〃		13.2	(9.0)	外面ヘラ後削りヘラミガキ・内面ヘラ削り。	鈍い橙(7.5YR6/4)		石英、長石、角閃石
120	〃	〃		16.2	(10.9)	杯部内面・脚部外面ヘラミガキ。内面指ナデ、ナデ。	鈍黄橙(10YR5/3)	鈍黄橙(10YR5/4)	〃
121	〃	〃		21.0	(3.5)	脚部摩滅。	灰白(2.5YR8/1)	浅黄(2.5Y8/3)	細砂、細礫
122	弥生土器	器台	16.4		(11.4)	外面ヘラナデ・ヘラミガキ、内面ヘラ削り・ナデ・ヘラミガキ、孔。	鈍黄橙(10YR5/3)		微砂、長石、角閃石
123	〃	〃	22.1	28.0	18.8	外面摩滅・ヘラミガキ、内面ナデ。8個の孔を2段。	灰黄橙(10YR5/2)	橙(5YR5/6)	微砂粒、石英
124	弥生土器	鉢	12.0		(2.7)	口縁部は短く外反し、ヨコナデ。体部ナデ。	灰黄(7.5YR5/2)		微砂若干
125	〃	〃		3.3	(3.8)	丸底気味。外面ナデ、内面6本単位の刷毛目。	鈍黄橙(10YR5/3)		石英、長石、角閃石
126	〃	〃		4.1	(4.4)	底部摩滅。内外面ヘラナデ。内面ナデ。	浅黄(2.5Y7/3)		微砂
127	〃	〃		3.4	(4.5)	丸底気味。外面縦毛目、内面・底面ナデ。	灰白(2.5Y8/2)		微砂若干
128	〃	〃		4.0	(4.3)	底部摩滅。内外面摩滅するが、内面にヘラ痕がある。	浅黄(2.5Y7/3)		石英、長石、微砂
129	〃	〃		5.4	(4.3)	底部内面に未完通の孔有り。摩滅。	灰白(10YR7/1)	鈍黄橙(10YR7/4)	微～粗砂、石英
130	〃	〃	15.6		(6.0)	平坦底。口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラミガキ。	鈍黄橙(10YR6/3)		石英、長石、角閃石
131	〃	〃	15.0		(4.6)	内面・口縁部外面ヨコナデ。体部外面ヘラナデ。	鈍黄橙(10YR7/3)		〃
132	弥生土器	器台	6.0	6.6	5.0	内外面ともていねいなナデ。	橙(7.5YR4/4)	鈍黄橙(10YR5/3)	〃
133	弥生土器	手づくね		3.2	(3.0)	外面指頭圧痕の後にナデ、内面指頭圧痕。外面に刺突文。	鈍黄橙(10YR5/3)	灰黄橙(10YR5/2)	〃
134	弥生土器	壺	3.5		(2.6)	外面ヘラナデ・ナデ、内面ヘラナデ。	灰黄(2.5Y6/2)	灰黄(2.5Y7/2)	微砂若干
135	〃	〃		9.0	1.0	外面ヘラミガキ、内面ナデ。2個の孔残存。	鈍黄橙(10YR5/3)		石英、長石、角閃石

第22図　ＳＲ01出土遺物(7)（Ｓ：1/4）



122,123は同一形態の器台であり，123は完形である。脚部は大きく広がり，他の土器とは異なる胎土，色調を呈する。

132は小型の器台である。

133は手づくね土器であり，左右不対称な形で外面に1列の刺突文を縦方向に有する。

135は非常に器高の低い蓋で2個一対の孔を1組残存する。

136,137は製塩土器の脚部のみであり，不整形な形態である。外面はヘラ削りを施す。

138はほぼ直線的な胴部から口縁部に至る形態をなすバケツ形土器である。

140,141は弥生時代前期の甕であり，口縁部に刻目文，外面に沈線を巡らす。

142～144は縄紋土器の深鉢である。141,142は口縁部に刻目文口縁部外面に刻目付帯を施している。144は押圧付帯。

145は壺の把手である。

147～152は両側に抉りをもつ石庖丁である。147～151はサヌカイト，152は石墨片岩，153は徳島産の紅レン片岩である。147～151は刃部，背部，抉りを両面ないし片面から細かく調整し，背部は背潰しを行っているものもある。148は抉りが大きく入っている。

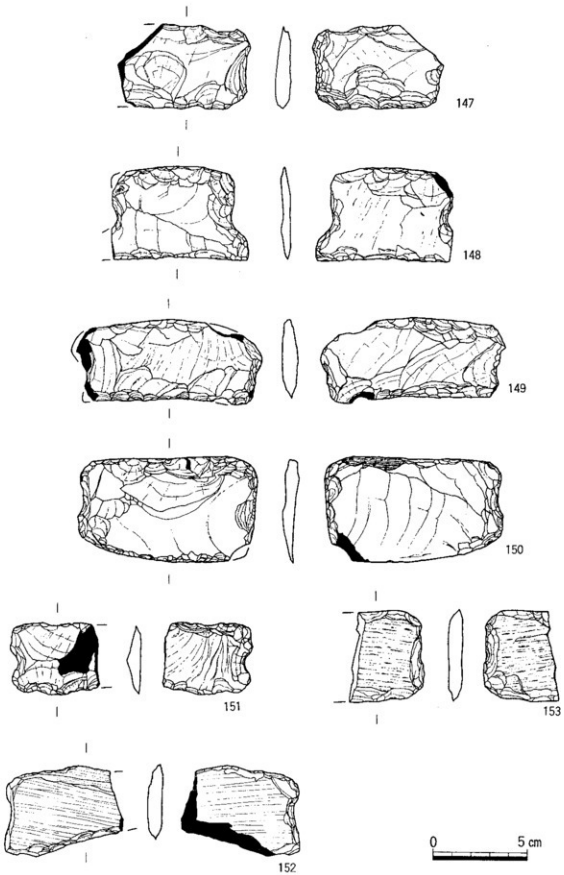
154,155は両面から細かく調整しており，石鏃の可能性も考えられる。

156は凹基式石鏃，157は平基式石鏃で，両面から細かく調整している。

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外面	色調 内面	胎土
136	弥生土器 製塩土器		5.6	(3.1)	外面ヘラ削り・ナデ，内面ヘラ削り。粘土ナデ。	鈍い橙(7.5YR5/4)		長石，角閃石
137	〃 〃		4.6	(2.6)	不整形な製品。外面ヘラ削り。	鈍い黄(2.5Y6/3)		石英，長石
138	弥生土器 バケツ形	18.0		(9.6)	胴部外面ヘラ削り・刷毛目，内面ナデ・刷毛目。	褐灰(10YR7/2)		石英，長石，角閃石
139	弥生土器 甕			(5.9)	外面に4条の沈線。	灰白(2.5Y8/2)		石英，長石
140	〃 〃	32.2		(4.4)	口縁端面に刻目文。胴部外面に沈線4条，ヘラミガキ。	灰黄(2.5Y7/2)	灰白(2.5Y8/2)	〃
141	〃 〃	33.0		(4.5)	口縁端部に刻目文。胴部外面に沈線3条，刷毛目，内面ナデ。	褐灰(10YR6/1)		石英，長石，角閃石
142	弥生土器 深鉢	32.0		(5.8)	口縁部に刻目文。外面は条痕，口縁部外面の突帯を欠損。	褐灰(10YR7/1)	黄灰(2.5Y5/1)	粗砂多量
143	〃 〃	36.0		(3.6)	口縁部に刻目文。口縁部外面に刻目突帯を施す。	灰黄褐(10YR6/2)	灰黄褐(10YR5/2)	粗砂
144	〃 〃	36.2		(2.2)	口縁部外面に押引突帯。	褐灰(10YR7/1)		細礫
145	弥生土器				把手。断面長方形。	褐灰(10YR6/1)		石英，長石，角閃石

番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
146	土錘	7.3	3.3		71.8		鈍い橙(7.5YR6/4)。中央に孔を有す。

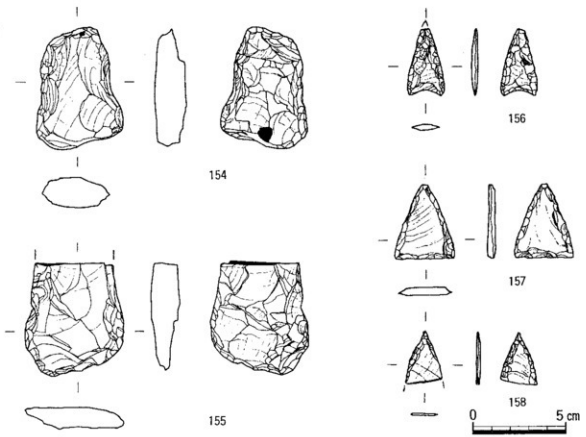
第23図　ＳＲ01出土遺物(8)（Ｓ：1/2．1/4）



第24図　ＳＲ01出土遺物(9)（Ｓ：1/2）

（第24図）

番号	器　種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材　質	特　　徴
147	打製石斧	(7.0)	4.4	0.7	41.2	サヌカイト	半分を欠損。刃部は両面から調整、抉りは両面から細かく調整。
148	〃	(7.2)	4.8	0.4	36.9	〃	両側に抉りを持つ。刃部・背部・抉りは両面から調整。
149	〃	(9.9)	4.2	1.1	60.9	〃	ほぼ完形。全面は両面から調整し、背部は背面とを行う。
150	〃	8.4	5.5	0.9	72.0	〃	完形。刃部は片面、背部抉りは両面から調整。背部は背面とし。
151	〃	(4.7)	3.3	0.7	19.0	〃	右半分を欠損。両面から調整し、背部・抉りは背面とし。
152	〃	(5.4)	3.9	0.9	38.1	石墨片岩	右側を欠損。調整は不明瞭。若干の抉りを持つ。
153	〃	(4.0)	4.8	0.7	28.0	緑レン片岩	左側を欠損。両面から調整し、背部抉りは背面とし。



番号	器　種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材　質	特　　徴
154	打製石斧	(6.3)	4.6	1.7	61.1	サヌカイト	刃部を欠損。全面を調整し、両縁辺は細かく調整。
155	〃	(5.9)	5.3	1.5	60.0	〃	基部を欠損。刃部、側辺は両面から調整。
156	石　鏃	(3.6)	2.0	0.4	2.5	〃	先端を欠損。凹基式。両面から細かく調整。断面六角。
157	〃	(4.0)	3.2	0.4	8.0	〃	先端欠損。平基式。基部・縁辺部は両面から細かく調整。
158	〃	(2.8)	2.0	0.1	1.4	〃	基部を欠損。先端部・縁辺部は両面から細かく調整。

第25図　ＳＲ01出土遺物(10)（Ｓ：1/2）

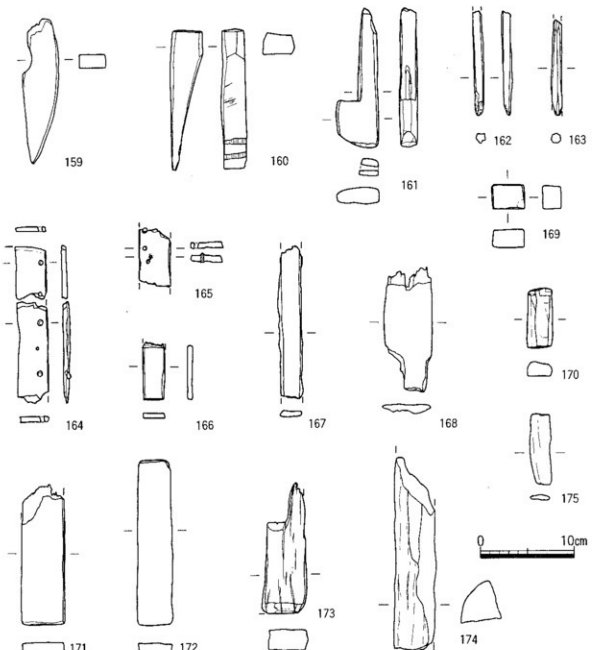
159～161は用途不明な加工板であり，159は上部を欠損し下端は細くなっている。160は完形であり，全面を面取りしている。上端は切断され，下端に向かって１方向からの鋭い加工が明瞭に見られる。161はＬ字形を呈し側面に細長い穴が開けられる。

162，163は全面を面取りする加工材であり，162の先端は焼かれている。163は細かく面取りされ，断面は７角形を呈する。

164，165は曲物の側板である。164の右側には５個の孔があり，その１個には木釘が残存する。165は３個の孔の内で１個に木釘を残存する。

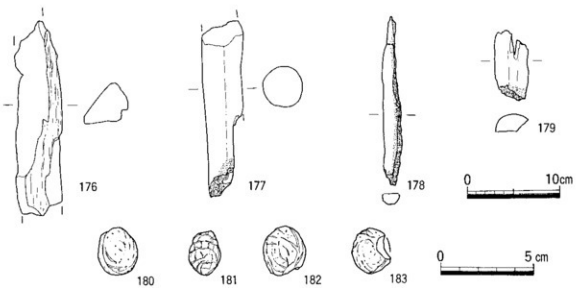
166～168，171～173は板材である。166，171，172，173は全面加工され，断面長方形を呈する。

169は用途不明瞭の加工材であり，全面面取りしており完形である。170も用途不明瞭の加工材であり，上下端を切断し，側面の一部を面取りする。



番号	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
159	加工板	(15.4)	3.8	1.4			板目。右横辺は孤を描く。円孔を有す。
160	〃	14.8	3.4	2.6			板目。全面を面取りし、先端を尖らす加工痕がある。
161	〃	(14.6)	4.5	1.9			柾目。組かい組分に決りがある。
162	加工材	(11.6)	1.0				全面を面取り。先端部を欠く。
163	〃	(15.1)	1.3				全面を面取りし、断面は7角形を呈す。
164	板 材	(16.2)	3.3	0.6			板目。右側に孔を5個有し、1個には木目が残存。
165	〃	(6.1)	3.3	0.7			板目。孔を3個有し、木目が残存。
166	〃	(6.0)	2.4	0.5			柾目。
167	〃	(16.1)	2.3	0.7			柾目。
168	〃	(15.1)	(5.1)	1.0			板目。
169	加工材	2.5	3.5	2.0			板目。上下面は切断、側面は面取り。完形。
170	〃	6.3	2.7	(1.5)			板目。上下面は切断、側面は一部面取り。
171	板 材	(14.4)	4.6	1.1			板目。
172	〃	17.4	3.6	1.9			板目。完形。
173	〃	(13.5)	(4.8)	2.1			板目。下面を加工。
174	加工材	(20.5)	4.2	5.3			ミカン割り。
175	〃	(7.5)	(2.0)	0.5			板目。

第26図　ＳＲ01出土遺物(11)（Ｓ：1/4)



番号	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
176	加工材	(20.6)	4.7	6.5			ミカン割り。樹皮残存。
177	〃	(18.6)	4.2				丸木。端部を焼いている。
178	〃	17.8	1.9	1.1			断面半円形。横面を焼いている。面取り。
179	〃	(7.5)	(3.8)	(1.8)			ミカン割り。端部を焼いている。
180	種	2.5	2.0				
181	〃	2.4	1.7				
182	〃	2.6	2.2				
183	〃	2.4	2.0				

第27図　ＳＲ01出土遺物(12)（Ｓ：1/2．1/4)

174,176はミカン割りの加工材である。177～179は丸木ないし半裁された加工材であり，一部を焼いている。

180～183は梅の種である。

2）　近世

1　土坑

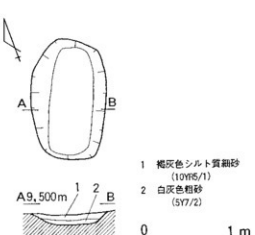
ＳＫ01　（第28図）

調査区中央の西壁寄りの位置で検出された土坑であり，単独に存在していた。

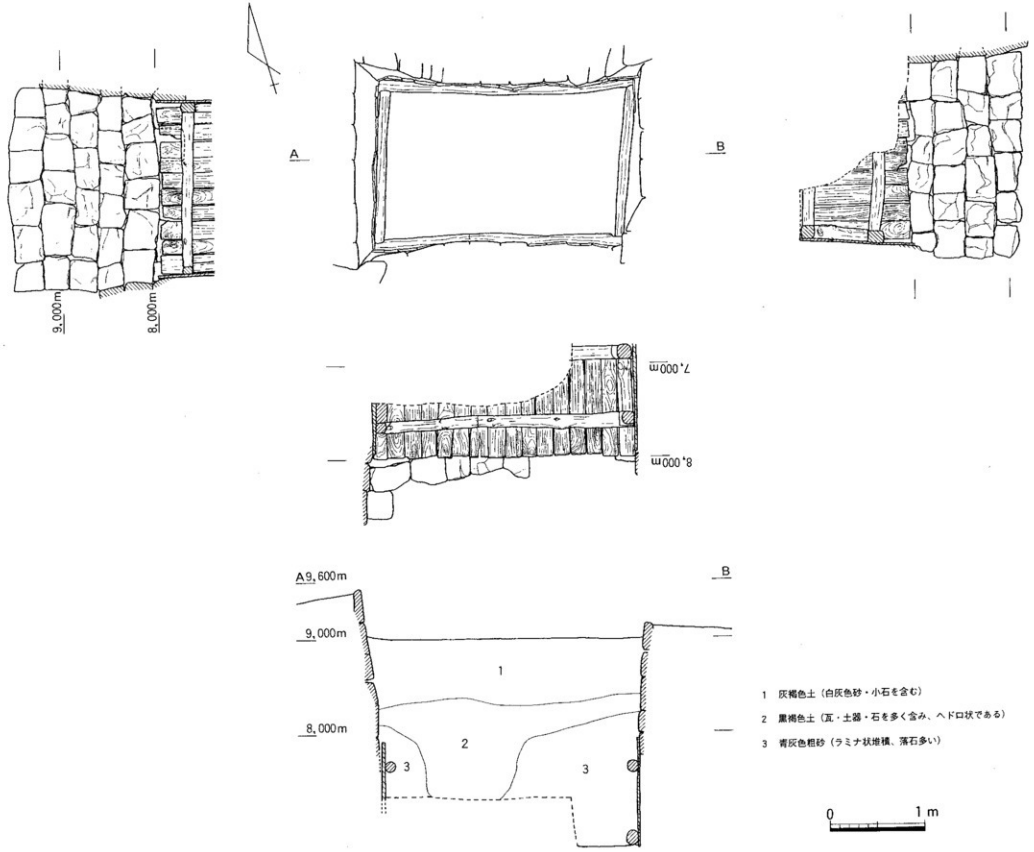
確認面のレベルは標高9.40mである。平面形は不整な楕円形を呈し，長軸は1.28m，短軸は0.80mを測る。確認面からの深さは約12cmである。掘り込みはゆるやかであり，底面はほぼ平坦である。底面は隅丸長方形を呈する。

埋土は褐灰色シルト質細砂と白灰色粗砂の２層であり，その堆積状態は自然堆積である。

出土遺物　遺物は数点の磁器片のみであり，細片のため，図化することはできなかった。



第28図　ＳＫ01　平・断面図（Ｓ：1/4)



第29図　ＳＥ03　平・断面図（Ｓ：1/40）

2　井戸

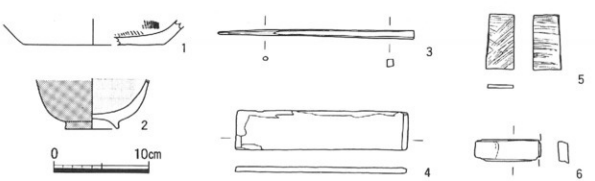
ＳＥ03　（第29,30図）

調査区の西端において検出された切石組みの井戸である。自然旧河道の西岸を掘り込んで作られている。調査時に北壁の一部が崩落していたのと湧水が著しく出たため，南東隅のみ底面まで掘ったが，その他は危険であったため未完掘である。

確認面のレベルは標高9.55mである。井戸は長方形を呈し，東西方向の長辺は約3.00m，南北方向の短辺は約2.20mを測る。確認面からの深さは約2.80mである。井戸の構造は上部の切石組み部分と下部の木枠部分からの２種類から成っており，その境は標高8.00mの位置である。４面の内，北壁と南壁は遺存状態が良くない。最も遺存状態の良い西壁の石組みは，切石を６段築いており，１段につき６個の石を使っている。木枠部分は，南壁に16枚，西壁に10枚の板材を立て，その内側に丸木を組み合わせている。調査時には板材の間より湧水が常時出ていた。

埋土は湧水のため詳細に観察できなかったが，大きく３層に分けられる。上位より白灰色砂，小石を含む灰褐色土，瓦，土器，石を多く含む黒褐色土とラミナ状堆積の青灰色粗砂である。最下層は自然堆積であるが，上層は人為的な堆積と考えられる。

井戸の掘り方は，地盤が砂礫層であるため非常に大きく，東西方向で約11mを測る円形の掘り込みである。



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
1	備前焼　擂鉢		14.8	(2.7)	回転ナデ・内面卸目	赤(10YS/1)		精砂
2	木　器　椀		5.6	(5.2)	外面黒色漆，内面赤色漆			

番号	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
3	箸	20.4	0.7				
4	重　箱	16.0	4.0	0.6			両面漆塗り
5	板　材	5.8	3.0	0.3			板目。両面とも擦痕が残る。
6	〃	(6.9)	(2.3)	1.0			右横の端部は切断。

第30図　ＳＥ03出土遺物（Ｓ：1/4）

出土遺物　埋土中より多量の土器，瓦，木製品が出土したが，ビニールやプラスチック，ピン等の非常に新しいものも共伴していた。近所の方の話によると，昭和30年代までこの井戸は使用されていたとの事であり，出土遺物の時期も明治～戦後までの長期間にわたっている。

１は備前焼擂鉢であり，卸目の間隔が狭い。

２は木製の椀であり，外面に黒色漆，内面に赤色漆が塗られている。

３は箸であり，握り部分の断面は正方形をなす。

４は重箱の側板であり，内外面ともに漆塗りである。

５，６，は用途不明の加工材である。５は完形であり，内外面に細かい擦痕が見られる。

3）　1工区包含層出土遺物　（第31～33図）

包含層出土遺物として報告する遺物は，ＳＥ03の北西側で検出された土器溜りより出土した遺物（第31図）と包含層出土の遺物，側溝掘削時の遺物（第32,33図）である。

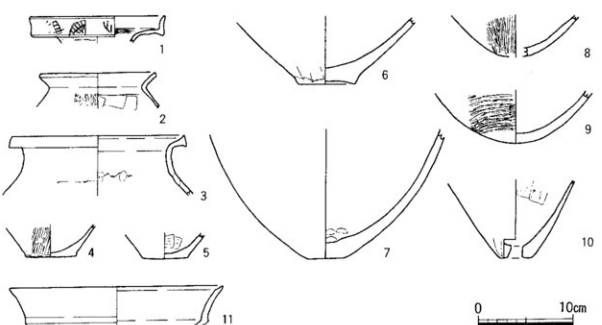
土器溜りはＳＲ01の西岸において確認され，明確な遺構ではなく若干の凹地に土器が集中していた。ＳＲ01と関連すると考えられる。遺物は，弥生土器壷（１），同甕（２，３），同底部（４～９），同甑(10)，同高坏(11)，その他の弥生土器片である。

１は明瞭な稜をもって口縁部が直立し，その外面に変形鋸歯文が施されている。

２は「く」の字状口縁を呈し，３はゆるやかな頸部から大きく水平に広がる口縁部をもち，口縁端部は上下に拡張する。

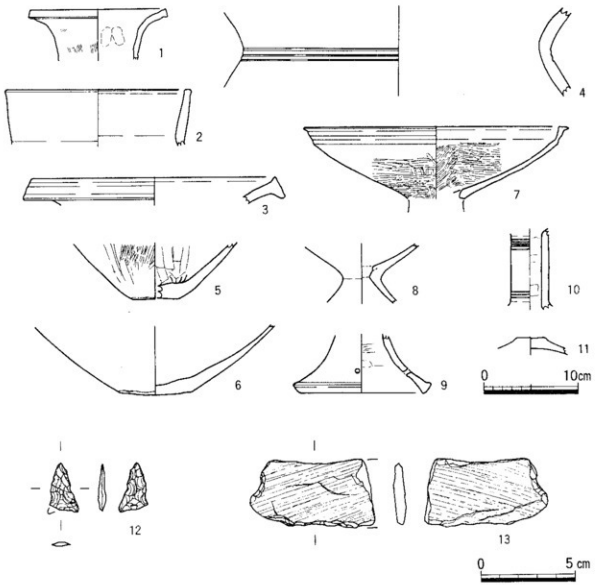
４～７は平底，８・９は丸底で，８はヘラミガキ，９はタタキが施される。

包含層出土の遺物は，弥生土器壷（１～４），同底部（５，６），同高坏（７～10），同蓋(11)，石鏃(12)，打製石庖丁(13)，須恵器蓋(14)，同杯(15)，同甕(16)，肥前皿(17)，同碗(20)，磁器(18,19,21)，同壷(22)，土師質土器焙烙(23～25)，丸瓦(26)である。



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	色調 内	胎土
1	弥生土器　壷	14.2		(2.8)	内面ヨコナデ・刷毛目・ナデ。外面に変形鋸歯文	鈍い橙(7.5YR7/4)	鈍黄橙(10YR6/4)	石英、長石、細砂
2	弥生土器　甕	12.0		(3.8)	口縁部ヨコナデ。胴部外面・刷毛目後にナデ。内面ヘラナデ。	橙(5YR6/6)		石英、長石、角閃石
3	〃　〃	18.2		(6.2)	口縁端部肥厚。口縁部ヨコナデ。胴部摩滅。内面胴部圧痕。	鈍黄橙(10YR6/4)	鈍黄褐(10YR5/4)	〃
4	弥生土器　底部		5.2	(3.4)	外面ヘラミガキ。内面摩滅。底面１方向からのヘラミガキ。	黒褐(10YR3/1)	鈍黄褐(10YR5/3)	石英、長石、角閃石、雲母
5	〃　〃		4.8	(2.7)	外面ヘラ削り後にナデ。内面ヘラ削り・ナデ。底面ナデ。	黒褐(2.5YR3/1)	鈍い褐(7.5YR5/4)	石英、長石、角閃石
6	〃　〃		5.8	(7.0)	やや上げ底。外面・底面ヘラ削り。	橙(5YR6/6)	灰白(2.5YR6/2)	石英、長石、細礫
7	〃　〃		3.6	(18.5)	外面ヘラナデ・ナデ。内面下端指頭圧痕。外面黒斑。	鈍黄橙(10YR7/3)	黄灰(2.5YR4/1)	石英、長石多量
8	〃　〃		3.6	(4.3)	やや丸底気味。外面ヘラミガキ。底面１方向のヘラミガキ。	黒(10YR1.7/1)	明赤褐(5YR5/6)	石英、長石、金雲母
9	〃　〃			(5.4)	丸底。外面タタキ目、内面・底面摩滅。	灰白(10YR8/1)		石英、長石、角閃石
10	弥生土器　甑		3.4	(8.2)	孔を有す。外面黒斑。外面刷毛目・ヘラ削り。内面ヘラ削り。	橙(7.5YR6/6)	褐(7.5YR4/3)	〃
11	弥生土器　高杯	22.4		(5.1)	明瞭な稜。口縁端部内面がやや細くなる。摩滅。	褐(7.5YR4/6)		〃

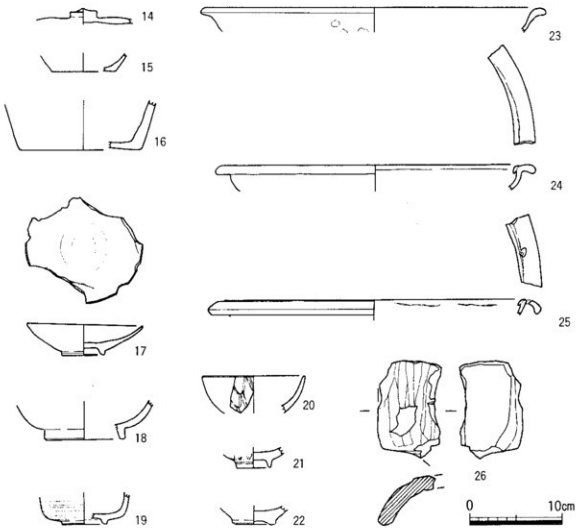
第31図　土器溜り出土遺物（Ｓ：1/4）



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
1	弥生土器 壺	14.4		(5.3)	頸部外面縦走日後にナデ、内面ナデ、指頭圧痕。	灰黄褐(10YR5/2)	黄褐(10YR5/3)	石英、長石、角閃石
2	〃 〃	9.4		(6.0)	口縁部は若立し、端部は角ばる。内外面ヨコナデ。	黄い褐(7.5YR5/4)		石英、長石、角閃石、雲母
3	〃 〃	25.8		(2.7)	口縁端部は上下に肥大し、浅い凹線を有す。ヨコナデ。	黄い褐(7.5YR5/4)	黄褐(10YR5/3)	石英、長石、角閃石
4	〃 〃			(9.4)	外面に3条の沈線。内外面とも摩滅。	灰白(5Y8/1)		石英、長石、雲母
5	弥生土器 底部		5.0	(5.9)	外面ヘラミガキ・ヘラナデ、内面ヘラナデ。	黄褐(10YR5/4)	黄褐(10YR5/3)	石英、長石、角閃石
6	〃 〃		7.6	(7.1)	平底。外面ヘラ削り後、内面磨滅。	黄褐(10YR5/4)		石英、長石
7	弥生土器 高杯	28.2		(7.6)	口縁端部は肥大、内外面ヘラミガキ。円盤充填。	黄い褐(7.5YR5/4)	黄い褐(7.5YR5/4)	石英、長石、微～細砂
8	〃 〃			(6.2)	円盤充填。内外面とも摩滅。	明褐(7.5YR5/6)	橙(7.5YR6/6)	石英、長石、角閃石
9	〃 〃		13.0	(6.2)	脚部屈折し、ヨコナデ。内面ヘラ削り・ナデ。孔1個残存。	黄褐(10YR5/3)		〃
10	〃 〃			(8.6)	円盤部。外面に浅い沈線8条。内面ヘラ削り。	〃		〃
11	弥生土器 壺		3.6	(1.9)	内外面とも摩滅。	黄灰褐(10YR7/2)	褐灰(10YR5/1)	〃

番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
12	石鏃	2.6	1.6	0.2	1.1	サヌカイト	凹基式。左側辺調整と欠損。両面から調整。
13	打製石鳶斧	6.5	3.2	0.5	28.4	砂岩	右側を欠損。刃部は1面から調整。抉りは両面から調整。

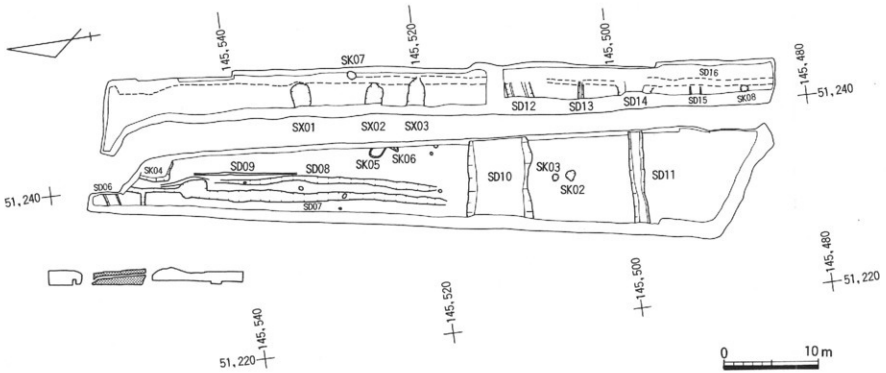
第32図　1工区包含層出土遺物(1)（S：1/4. 1/2)



番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
14	須恵器 蓋			(1.8)	回転ナデ。内面ナデ。宝珠の直径は2.8cm。	灰白(N7/)		微～細砂若干
15	須恵器 杯		7.0	(1.9)	回転ナデ。体部下端はナデ。底面は回転ヘラ切り。	灰(5Y5/1)		微砂若干
16	須恵器 鉢		12.0	(5.1)	外面回転ナデ後にヘラナデ。内面回転ナデ。底面ナデ。	灰(N6/)	灰白(N8/)	〃
17	肥前 鉢	12.4	4.5	3.3	若干内弯する体部。見込み部に重付け。粒の口軸ハギ。	灰白(N7/)		精選
18	磁器 碗		8.6	(4.0)	高台を除き、黒褐色(5YR2/2)の釉がかかる。	暗赤褐(2.5YR3/4)		〃
19	〃 〃		4.8	(3.3)	高台の断面は方形。全面に釉がかかる。	灰黄(2.5Y7/2)	黒褐(10YR2/3)	〃
20	肥前 〃	11.0		(3.9)	外面に淡青色の網目文。	青灰		〃
21	〃 〃		3.6	(2.2)	高台外面、体部外面に青色の釉付け。畳付は無釉。	青白		〃
22	磁器 壷		4.6	(2.0)	低い高台。内面と外面一部に灰白色(10YR7/1)の釉がかかる。	鈍い橙(5YR7/4)		〃
23	土師質土器焼塩	36.0		(2.6)	口縁部ヨコナデ。体部外面指押さえ・ヘラナデ。	黒褐(10YR3/1)	鈍黄橙(10YR6/3)	微砂
24	〃 〃	33.0		(2.8)	口縁部ヨコナデ。体部外面ナデ・指押さえ。内面ヘラナデ。	褐灰(10YR4/1)	褐灰(10YR5/1)	〃
25	〃 〃	45.8		(1.8)	内面に1個の孔。口縁部ヨコナデ。体部外面ナデ。爛付着。	黒褐(10YR3/1)	褐灰(10YR4/1)	〃

番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
26	丸瓦	(10.2)	(6.6)	1.6			下縁を若干残存。凸面ヘラナデ、凹面布目。

第33図　1工区包含層出土遺物(2)（S：1/4）



第34図　2・4工区遺構配置図（2）（S：1/400）

2　2工区

2工区は本遺跡の中央の調査区であり，4工区と西接する。南北方向の全長は約12m，東西幅は約10mである。現有用水路が南北方向にあるため，調査区の北端ではその幅が狭くなっている。調査区北端における南北軸座標値はX=－145.560，東西軸座標値はY=－51.240である。南端の南北軸座標値はX=－145.480，東西軸座標値はY=－51.230である。

土層の堆積は，現水田耕作土直下に近世の条里型水田の灰黄色シルト質極細砂が薄く堆積しているのみである。

遺構の分布は調査区域全域に見られるが，その密度は希薄である。遺構は，土坑・溝・柱穴であり，近世に属すると考えられる。

1）近世

1　土坑

ＳＫ02　（第35図）

調査区中央やや南寄りにおいて単独で検出された土坑である。

確認面のレベルは標高10.555mである。平面形は不整な隅丸三角形を呈し，長軸1.10m，短軸1.00mを測る。確認面からの深さは10cmであり，底面は平坦である。掘り込みは緩やかである。

出土遺物　遺物は数点の磁器片のみであり，図化できるものはなかった。

ＳＫ03（第35図）

調査区中央やや南寄りに検出された土坑であり，ＳＫ02の北側に位置する。

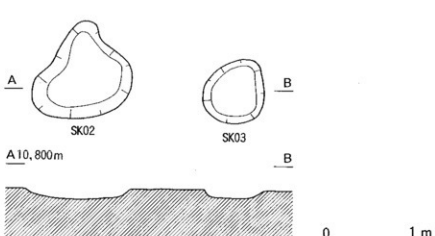
確認面のレベルは標高10.550mである。平面形は不整円形を呈し，直径0.65mを測る。深さは8cmである。底面は平坦である。埋土は白灰色シルト質極細砂である。

出土遺物　遺物は出土しなかった。

ＳＫ04（第36図）

調査区北端において検出された土坑であり，東側は現有水路にかかっている。

確認面のレベルは標高10.600mである。平面形は検出部分がわずかなため不明であるが，方



第35図　ＳＫ02・03　平・断面図（Ｓ：1/40）

形を呈すると思われる。深さは15cmで，掘り込みは緩やかである。

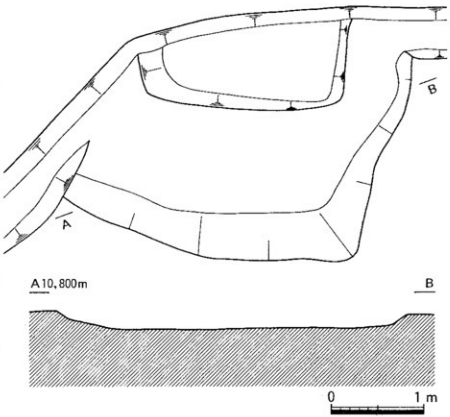
出土遺物　遺物は数点の磁器片のみである。

ＳＫ05　（第37･38図）

調査区中央の東側で検出された土坑である。

確認面のレベルは標高10.600mである。平面は楕円形を呈し，短軸は1.18mを測る。深さは８cmである。

出土遺物　遺物は染付皿（１）と数点の磁器片のみである。



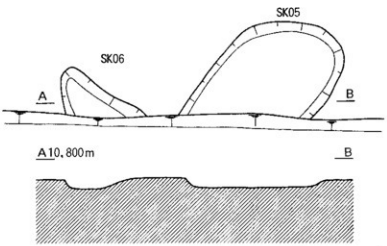
第36図　ＳＫ04　平・断面図（Ｓ：1/40）

ＳＫ06　（第37図）

調査区中央の東側において検出された。

確認面のレベルは標高10.600mである。平面形・規模は不明である。深さは10cmである。

遺物はなかった。



第37図　ＳＫ05・06　平・断面図（Ｓ：1/40）

２　溝

ＳＤ06　（第39図）

調査区北端において検出された溝である。

確認面のレベルは標高10.500mである。検出できた全長は1.40m，幅は1.30mを測る。深さは15cmである。溝の方向はＮ－70°－Ｅである。

出土遺物　数点の磁器片，染付皿である。

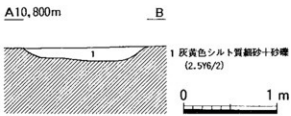
番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	色調 内	胎土
1	染付　皿	14.8		(2.5)	内外面に淡青色の草花文の絵付。	淡青白色		精選

第38図　ＳＫ05出土遺物（Ｓ：1/4）

ＳＤ07　（第40図）

調査区中央より北側で検出された溝である。

確認面のレベルは標高10.450m前後である。溝の方向はＮ－10°－Ｅであり，検出できた全長は34.00m，幅は0.40～1.10mを測る。深さは５cmである。溝は北端において西方向に分岐し，その南側には拡張した所がある。



第39図　ＳＤ06　断面図（Ｓ：1/40）

出土遺物　遺物は磁器片・染付皿のみであり，図化できるものはなかった。

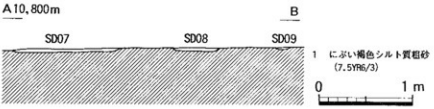
ＳＤ08　（第40図）

調査区中央より北側に検出された溝である。

確認面のレベルは標高10.450m前後である。溝の方向はＮ－10°－Ｅである。検出できた全長は29.20m，幅0.30～0.80m，深さ５cmを測る。遺物はなかった。

ＳＤ09　（第40図）

ＳＤ08の東側で検出された溝であり，確認面のレベルは標高10.450m前後である。全長は11.00m，幅0.20m，深さ２cmを測る。遺物は出土しなかった。

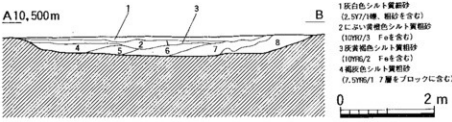


第40図　ＳＤ07～09　断面図（Ｓ：1/40）

ＳＤ10　（第41・42図）

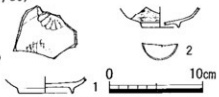
調査区中央やや南寄りにおいて検出された溝である。

確認面のレベルは標高10.350m前後である。溝の方向はＥ－８°－Ｓである。全長は8.80m，幅7.00mを測る。深さは0.40mである。埋土は８層に分層することができ，人為的に埋められたと考えられる。



第41図　ＳＤ10　断面図（Ｓ：1/80）

出土遺物　遺物は瀬戸碗（１），肥前碗（２），その他の磁器片・染付皿が出土した。



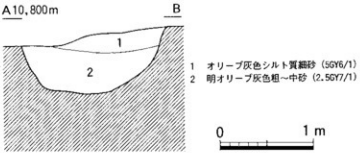
番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	瀬戸碗		5.8	(1.8)	細い高台で、骨付は無軸。見込みに花文の痕刻。	灰白		精選
2	肥前碗		4.0	(2.1)	外面は細色の草花文。底面に染付。裏銘	〃		〃

第42図　ＳＤ10出土遺物（Ｓ：1/4）

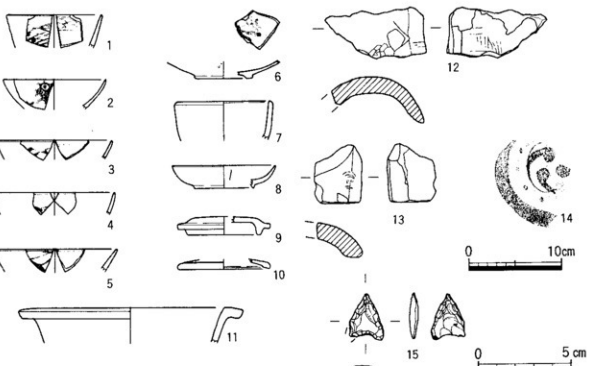
ＳＤ11　（第43～48図）

調査区南側に単独で検出された溝である。

確認面のレベルは標高10.500m前後である。溝の方向はＥ－０°－Ｓである。検出できた溝の全長は9.80m，幅は1.50mを測る。確認面からの深さは約0.5mである。掘り込みはやや急傾斜で，断面Ｕ字形を呈する。底面のレベルは東



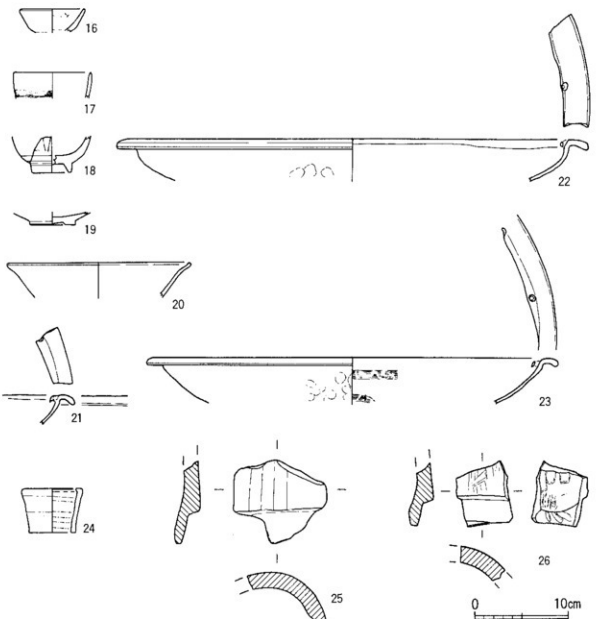
第43図　ＳＤ11　断面図（Ｓ：1/40）



番号	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	形態・手法の特徴	色調 外	色調 内	胎土
1	東戸碗	10.0		(3.4)	直線的な体部。内外面に青色の意文。軸は透明。	(地)白色		精選
2	〃　〃	10.8		(3.1)	内湾気味。外面に青色の亀甲文染付。軸は透明。	〃		〃
3	〃　〃	12.2		(2.0)	外面に青色の意文、内面に直線の染付。軸は透明。	〃		〃
4	〃　〃	12.8		(2.3)	外面に青色の意文、直線。内面に直線の染付。軸は透明。	〃		〃
5	〃　〃	13.2		(2.4)	外面に青色の意文、内面に直線の染付。軸は透明。	〃		〃
6	肥前　〃		6.0	(1.8)	見込みに紺色とこげ茶色の染付。低い高台。軸は白色。	(地)黄灰(2.5Y6/1)		〃
7	天目茶碗	10.0		(4.1)	厚い器内。軸は灰色。(10Y6/1)	(地)灰白(10Y7/1)		〃
8	染付　皿	10.8	6.3	(2.4)	断面逆三角形の高台。見込みに緑色の染付。軸は透明。	(地)白色		〃
9	陶器　蓋	7.8		1.9	1 緑部外面ヨコナデ。天井部外面未調整。内面ナデ。	鈍黄橙(10Y7/1)		微～細砂若干
10	〃　〃	10.0		(1.0)	低い器高。外面に透明な軸がかかる。	鈍い橙(7.5Y7/4)		精選
11	磁器　鉢	24.0		(3.7)	口径部は水平方向に曲がる。全面に灰白色の軸がかかる。	(地)灰白(7.5Y8/1)		〃

番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
12	丸瓦	(5.2)	(10.4)	1.7			凸面ヘラナデ、凹面布目。
13	〃	(6.2)	(5.0)	1.7			孔を有する。凸面ヘラナデ、凹面布目。
14	軒丸瓦						巴瓦
15	石鏃	2.3	1.8	0.4	1.9	サヌカイト	凹基式。右側辺刺を欠損。両側縁は両面から調整。

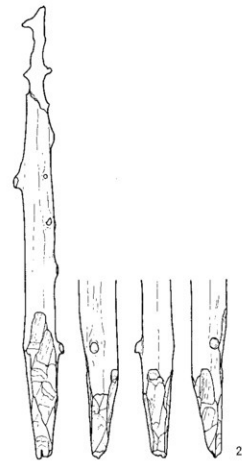
第44図　ＳＤ11出土遺物(1)（Ｓ：1/2．1/4）

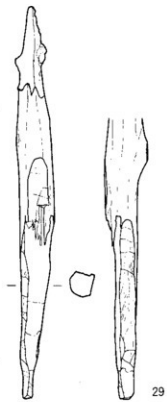


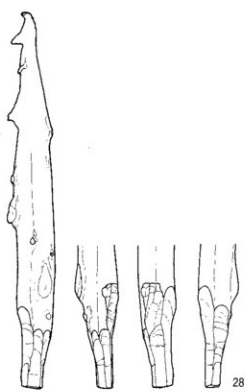
番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	色調 内	胎土
16	瀬戸 小瓶	7.0		(2.4)	内面に青色の草花文。	(地)白灰(2.5Y8/1)		精選
17	〃 天目	8.2		(3.7)	直線的な体部。こげ茶色の染付。	(地)灰白(2.5Y8/1)		〃
18	〃 碗		4.2	(3.8)	厚い器肉。外面に青色の染付。	(地)灰白(N8/)		〃
19	磁器 皿		4.8	(1.3)	蛇の目高台は無軸。	(地)灰白(7.5Y8/1)	(軸)灰白(7.5Y8/2)	〃
20	磁器 鉢	19.6		(3.8)	口縁部がやや屈曲。	(地)灰白(N8/)	(軸)明緑灰(5G7/1)	〃
21	土師質土器焼塩	59.0		(3.1)	口縁部ヨコナデ。体部外面指押え、内面ヘラナデ。スス。	褐灰(10YR4/1)		微～細砂
22	〃 〃	50.0		(4.4)	口縁部ヨコナデ。体部外面指押え、内面ヘラナデ。スス付着。	灰黄褐(10YR5/2)	褐灰(10YR5/1)	微細
23	〃 〃	42.0		(4.8)	口縁部ヨコナデ。体部外面指押え、内面ヘラナデ。スス付着。	褐灰(7.5YR4/1)		〃
24	〃 焼台	6.4	5.0	4.6	上端は内側に肥厚し、よく焼けている。	橙(5YR6/6)	鈍い橙(5YR7/4)	〃

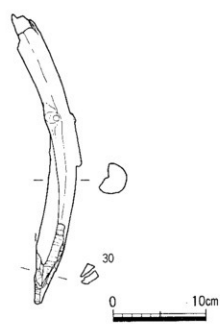
番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
25	丸瓦	(8.8)	(10.0)	1.7			下縁付近のみ残存。凸面ヘラナデ、凹面布目。
26	道具瓦	(5.9)	(5.5)	1.8			凸面ヘラナデ、凹面布目。

第45図　ＳＤ11出土遺物(2)（Ｓ：1/4）





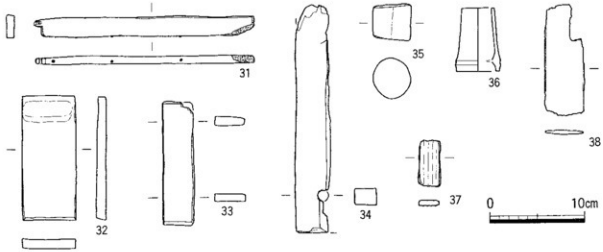




第46図　ＳＤ11出土遺物(3)（Ｓ：1/4)

（第46図）

番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
27	杭	(48.0)	3×3.9				先端部は4方向から明瞭に加工される。枝打ち。
28	〃	(41.7)	3.5				先端部は3方向から明瞭に加工される。枝打ち。
29	〃	(39.7)	4.0				先端部は6方向から明瞭に加工される。枝打ち。
30	〃	(32.0)	3.2				先端部は3方向から明瞭に加工される。枝打ち。



番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
31	加工板	(23.4)	2.0	0.8			板目。片端に板の側皮を残存。側面に木釘2、板跡1。
32	〃	13.1	5.7	1.0			板目。全面面取り。表側の一部がやや凹む。
33	〃	13.1	3.3	1.0～1.7			柾目。
34	加工材	(24.0)	(3.6)	1.7			柾目。孔を残存。
35	〃	3.9	4.3				丸木。両端を切断する。
36	灰吹	7.7	4.6			竹	両端を切断し、節を底部に利用する。
37	加工板	(4.9)	(2.3)	0.7			板目。
38	〃	(11.7)	(4.1)	0.5			〃

第47図　ＳＤ11出土遺物(4)（Ｓ：1/2．1/4）

方向へ緩やかに低くなっている。埋土は上層のオリーブ灰色シルト質細砂と下層の明オリーブ灰色粗～中砂であるが，下層が大部分を占めており，一気に埋没したと考えられる。

出土遺物　遺物は埋土中ないし底面より多量の土器や木製品が出土した。第44図の１～15は溝の上部から出土した遺物であり，第45図の16～26は下部から出土した遺物である。第47・48図31～40の木製品は埋土中出土である。

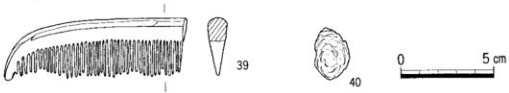
上部の遺物は，瀬戸染付碗（１～５），肥前染付碗（６），天目茶碗（７），染付皿（８），陶器蓋（９・10），同鉢（11），丸瓦（12・13），軒丸瓦（14），石鏃（15）である。下部の遺物は，瀬戸染付小皿（16），同天目茶碗（17），同碗（18），磁器皿（19），同鉢（20），土師質土器焙烙（21～23），同焼台（24），丸瓦（25），道具瓦（26）である。

木製品は，杭（27～30），加工板（31～33・37・38），加工材（34・35），灰吹（36），櫛（39），種子（40）である。

１～５は直線的な体部で内外面に染付が施されている。６は見込みに染付が施されている。８の見込にわずかな染付が見られる。14は巴瓦である。

16は見込に草花文の染付，18は外面に染付が施されている。19は蛇の目高台である。20は薄い器厚である。21～23は外面に指押えが施され，煤が多量に付着する。24は完形の焼台である。

27～30は先端部を明瞭に加工した杭であり，枝抜いも施されている。加工は３～６方向から



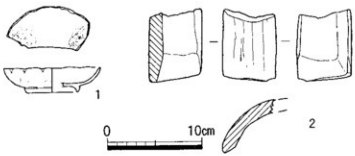
番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
39	棚	(9.6)	(3.1)	1.05			右端を欠損。
40	種	2.7	1.9	1.4			

第48図　ＳＤ11出土遺物(5)（Ｓ：1/2）

行われている。31は左端に桜の樹皮を残存し，右端は焼かれている。側面に目釘穴が３個あり，２個は木釘を残存する。32・33は前面を面取りした板材である。35は両端を切断する。36は竹の灰吹である。内側の節を欠損するが，節を底部にしていたと考えられる。39は約半分を残存する櫛である。

２）　２工区包含層出土遺物

実測できた遺物は瀬戸皿（１），丸瓦（２）のみである。



番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	瀬戸皿	10.4	5.6	2.6	輪花。高台の断面は三角形。内外面に青灰色の柴付。	(地)灰白(2.5YR/1)		精選

番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
2	丸瓦	(6.7)	(5.8)	1.3			凸面ヘラナデ，凹面布目。

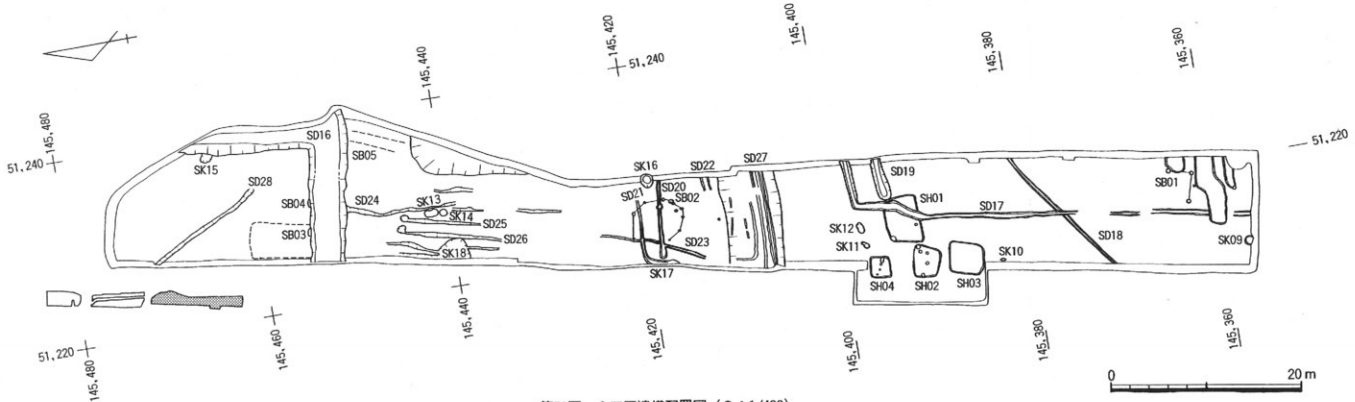
第49図　２工区包含層出土遺物（Ｓ：1/4）

３．３・４工区

３工区は本遺跡の中央より南側に位置する調査区であり，４工区は中央より北側に位置する調査区であり，２工区と現有用水路を挟んで東接する。３・４工区は別の調査区であり，調査年次も異なっており，本来は別々に記述すべきであるが，４工区において検出された遺構が３工区のＳＤ16と関連する遺構であるため両工区をまとめて報告する。ただし，４工区の遺構配置図は39～40ページの第34図に掲載する。

３工区の南北の全長は約122m，東西幅は13mである。調査区の東側は蓮池の堤防に規制されており，中央部がやや狭くなるが，北側では約17mまで広がる。調査区南端の南北軸座標値はX＝－145.360，東西軸座標値はＹ＝－51.220である。北端の南北軸座標値はＸ＝－145.480，東西軸座標値はＹ＝－51.240である。

土層の堆積状態はほぼ水平堆積をなすが，地盤が南から北に向かって緩やかに低くなっているので北側の土層堆積は厚くなっている。中央部での土層堆積は６層に分層できる。最上層は現水田耕作土であり，以下は条里型水田面が４面検出され，地山直上に細砂を多量に含む灰黄色シルト質極細砂が堆積している。条里型水田は土壌層と非土壌層に細分される。



第50図　3工区遺構配置図（S：1/400）

遺構の分布は全域に見られ，その時期は中世～近世に比定される。中世の遺構としては，北端のＳＤ16と南側のＳＤ17である。近世の遺構としては，掘立柱建物跡・住居跡・礎石のある建物跡・石列・溝・土坑・導水管が全域に検出された。

４工区の南北方向の全長は約71m，東西幅は約５mであり，北端のみ幅が広くなっている。調査区南端の南北軸座標値はＸ＝-145.480，東西軸座標値はＹ＝-51.240である。北端の南北軸座標値はＸ＝-145.550，東西軸座標値はＹ＝-51.250である。

現地表から1.00～1.60mの深さまで花崗土の盛土があり，地盤までの約60cm間は非常に細かく複雑な土層堆積を呈している。土層は23層に分層されており，人為的に埋められたと考えられる。

遺構の分布は北側を除いた部分に見られ，その時期は中世～近世に比定される。中世の遺構は３工区から続くＳＤ16と溝・土坑・性格不明の落ち込みであり，その中でＳＤ16は調査区の大部分を占めている。近世の遺構は２工区のＳＤ11とほぼ同方向に延びるＳＤ14である。

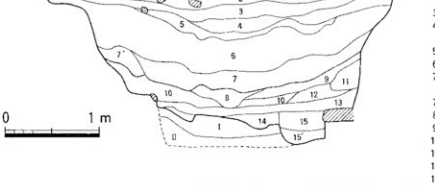
１）　中世～近世

１　堀

ＳＤ16　（第51～60図）

３工区の北側と４工区全域において検出された溝であり，調査の結果，溝の底面近くに１・２段積みの石垣が検出されたので，本報告書では堀として報告する。

確認面のレベルは，３工区で標高10.70～10.80mである。４工区南端での確認面のレベルは標高9.30m，中央では標高9.25m，北端では標高9.80mである。３工区では調査区北端から南に約24m離れた所で，東西方向に延びる堀跡が検出され，調査区東側において堀跡はほぼ直角に曲がり北方向に延びている。４工区では，３工区で検出された堀跡の延長線上に石垣と裏込が検出された。東西方向の堀跡はＥ－８°－Ｓであり，南北方向の堀跡はＮ－８°－Ｅである。３工区の堀跡の規模は，堀上場の幅が3.70～4.00m，底面の幅が1.90mを測る。確認面からの深さは1.60mである。南北方向の堀跡は調査区外にかかっているため西側の掘り込みのみの検出である。調査区東壁に崩落の危険性が生じたため，堀の底面まで完掘することはできなくて石垣の上面を確認できた段階で調査を中止した。４工区では堀跡上面は確認できなくて，石垣と裏込の石を検出した。その方向は３工区と同様にＮ－９°－Ｅを示している。



第51図　ＳＤ16　断面図（Ｓ：1/40）

3工区の東西方向の堀跡には，底面近くに石垣が検出され，その遺存状態は良好であった。石垣は堀跡底面に沿って築かれており，東端は調査区外に延びているため不明であるが，検出できた堀内側の南東コーナーから推測すれば，検出した南側の石垣の東端付近が外側の南東コーナーであると考えられる。北側の石垣と南側の石垣の間に，直交する方向の仕切り石垣が2ヶ所検出された。西側の仕切り石垣を仕切り①，東側の仕切り石垣を仕切り②と仮称する。

北側の石垣は調査区西端から長さ13.10mにわたって検出され，部分的に跡切れている。石垣の築石は長辺0.20～0.80mを測る自然面を保って丸味の強い野面石である。西端から仕切り1までの石垣は1段積みであり，石垣上面のレベルは標高10.00mである。石材の厚さは15～20cmである。仕切り①と②の中間より西側は3段積みであり，石垣上面のレベルは標高9.90m，下面では9.35mである。最下位の石材は長辺0.60～0.80mを測り，上位の石材と比較して大きな石が使用されている。間詰石は5～15cmの小石である。仕切り①と②の中間より東側は，部分的に2段となっているが，大部分は1段積みである。石垣上面のレベルは標高9.40～9.80mであり，東側になるにしたがい低くなっている。下面のレベルは標高9.20～9.35mである。石材の長辺は0.35～0.70mを測り，数個の小さな石があるが大部分は大きな石材が使用されている。

南側の石垣は長さ15.20mにわたって検出され，部分的に跡切れる所がある。調査区西端から仕切り①までは1段積みであり，石垣上面のレベルは標高9.95mである。石材の長辺は0.30m未満であり，小さな石材である。仕切り①と②の間は一部崩れているが，3段積みである。石垣上面のレベルは標高9.90～10.00mであり，下面のレベルは標高9.50mである。石材の長辺は0.20～0.70mを測り，最下位の石材は比較的大きい。間詰石は7～20cmを測る円礫である。仕切り②より東側は1段ないし2段積みであり，石垣上面のレベルは標高9.40～9.90であり，東側になるにしたがい徐々に低くなっている。石垣下面のレベルは標高9.25～9.35mである。最下位の石材は長辺0.25～0.70mを測り，その大部分は大きな石が使用されている。間詰石はあまり見られないが，小さな礫である。

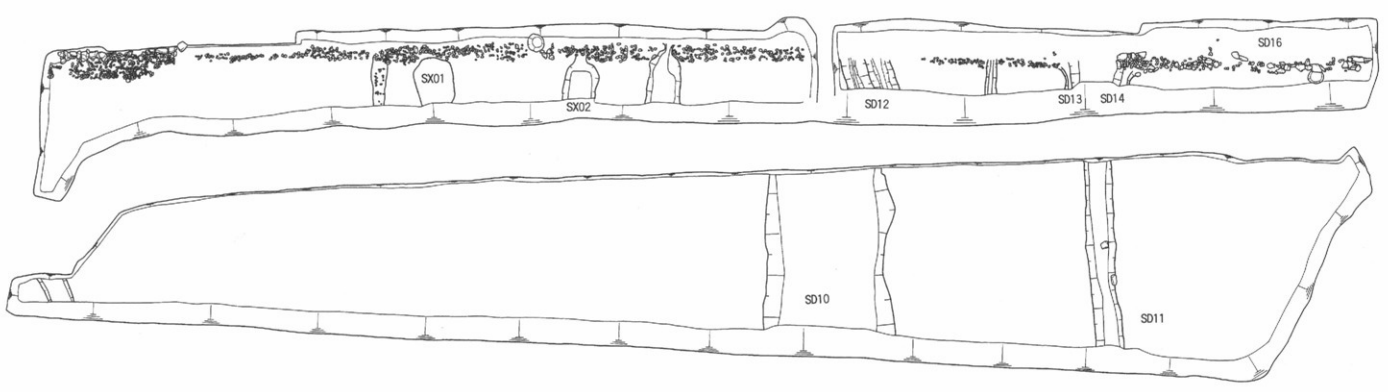
仕切り①は1段積みであり，石垣上面のレベルは標高9.70m，下面は標高9.42mである。石材は長辺0.50m前後の石5個，0.25mの石2個を数える。石垣は東側に面を持つように築かれている。

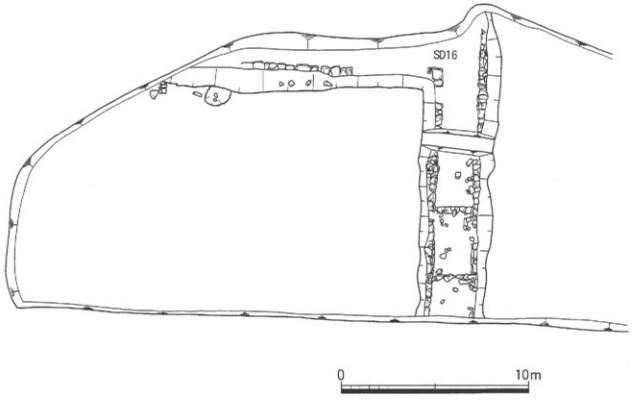
仕切り②は仕切り①より1.80m東側に検出され，1段ないし2段積みである。2段積みの上面のレベルは標高9.88m，1段積みは標高9.70mである。下面のレベルは標高9.30mである。石材は長辺0.30～0.70mを測る。小さな礫を間詰石とする。

堀跡の底面は仕切り石垣ごとに段階的に低くなっている。仕切り①より西側の底面のレベルは標高9.60m前後，仕切り①と②の底面のレベルは標高9.35m前後，仕切り②より東側では標高9.20～9.30mである。

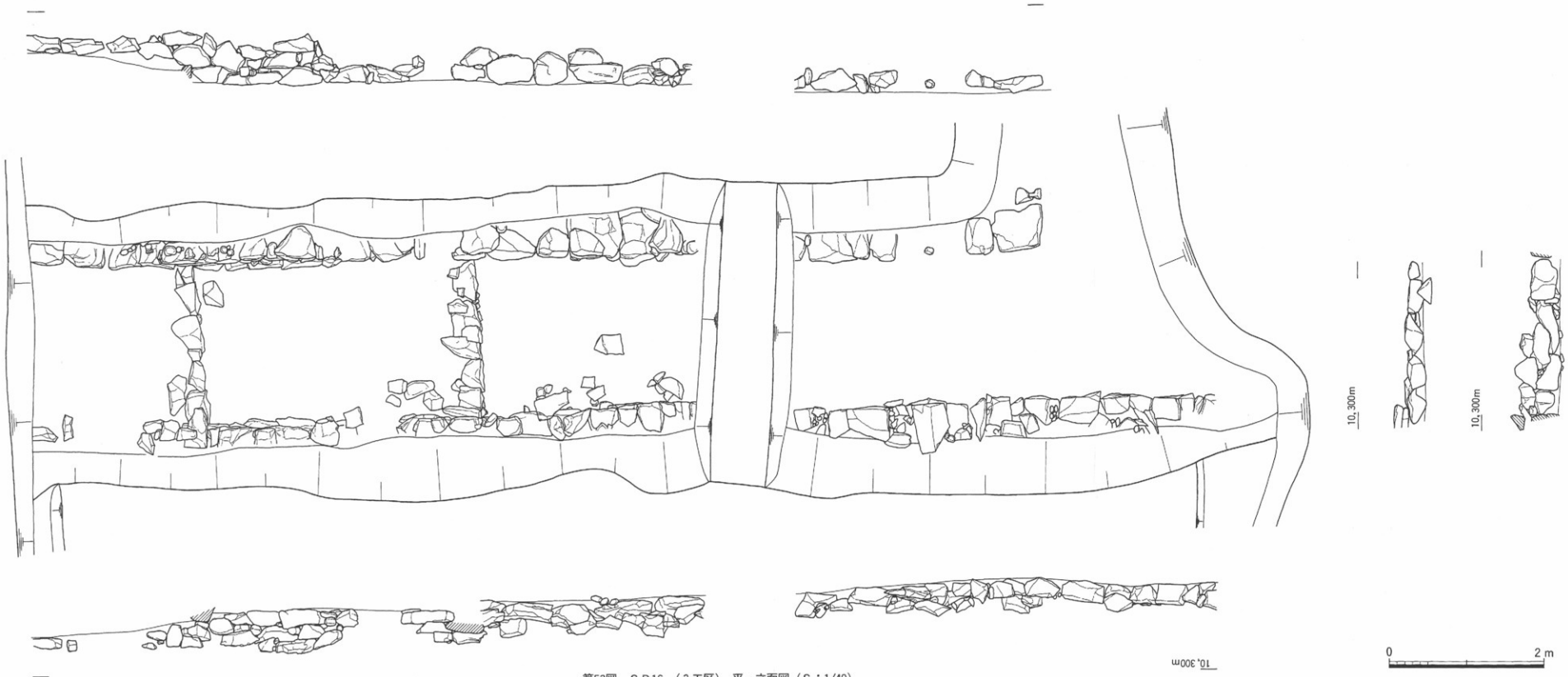
北方向に延びる石垣は西側のみ検出された。前述したように崩落の危険が生じたため，石垣の上面のみ検出した。石材は12個を数え，長辺は0.20～0.35mを測る。石垣上面のレベルは標高9.40m前後である。石垣の段積み，下面のレベルは不明である。

堀跡の土層堆積は15層に細分され，レンズ状堆積を呈している。17層の土層は，上層の1～7層と下層の8～15層に大きく分けられる。すなわち，上層は黒褐色シルト質極細砂を中心とした層であり，江戸時代前半に堆積したと考えられる。下層は黄灰色・灰色シルト質細砂，白灰色・白色・灰オリーブ色粗～中砂であり，堀として機能していた時から堀が廃棄された直後に堆積したと考えられる。

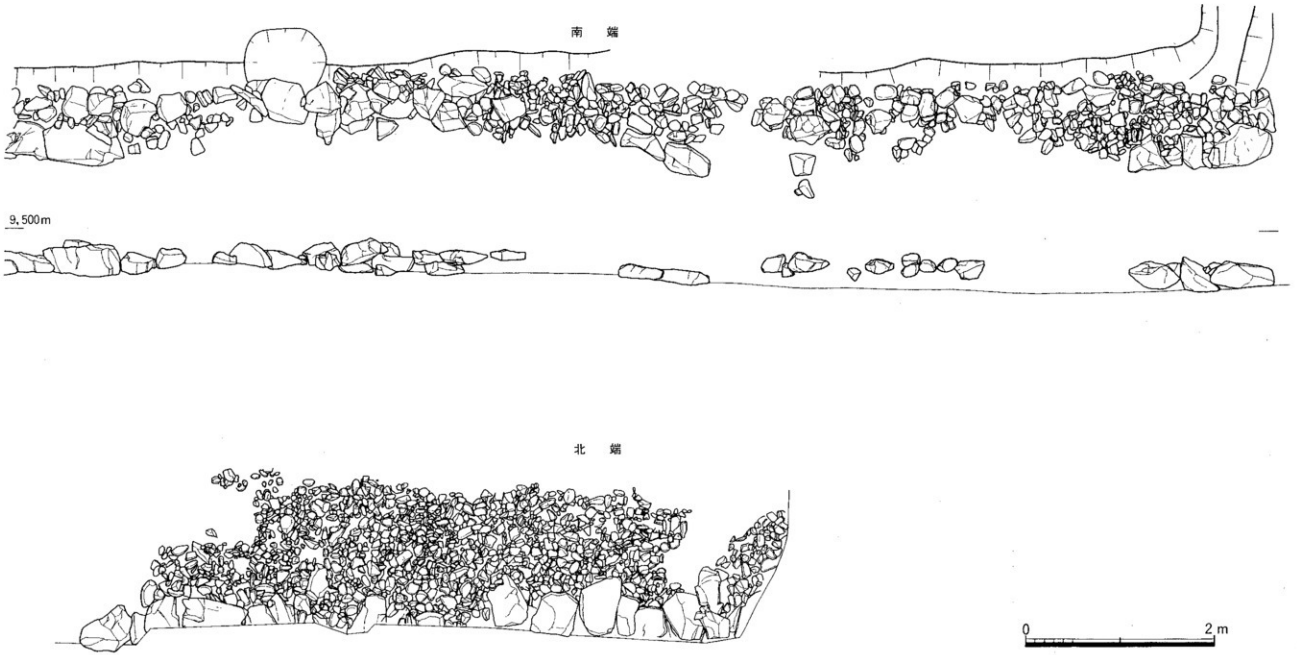




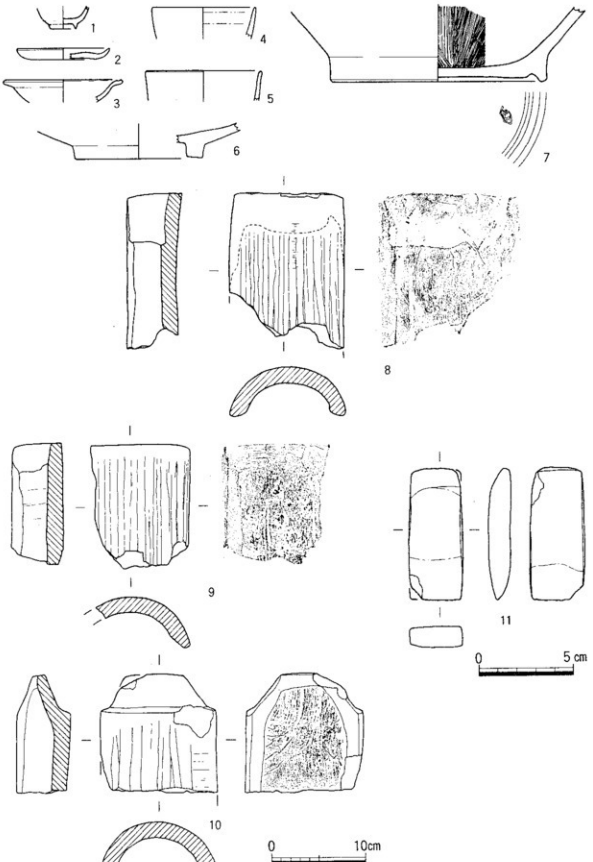
第52図　ＳＤ16　平面図（Ｓ：1/200）



第53図　ＳＤ16　（３工区）　平・立面図（Ｓ：1/40）



第54図　ＳＤ16　（４工区）　平・立面図（Ｓ：1/40）

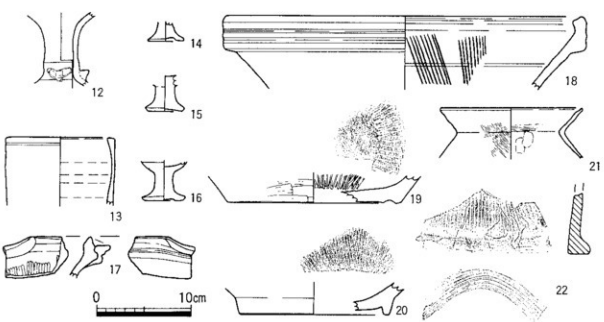


第55図　ＳＤ16　出土遺物(1)（Ｓ：1/2，1/4）

（第55図）

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	色調 内	胎土
1	瀬戸 歪		2.8	(2.4)	畳付を除き透明の軸。淡黄色の染付。	(地)白		精選
2	土師質土器 皿	9.8	6.6	1.2	回転ナデ。底面は未調整。	淡黄橙(10YR/3)		微砂若干
3	唐津 碗	12.8		(2.3)	内面のみ、白色の軸。	(地)黄い赤褐(5YR5/3)		精選
4	磁器 碗	11.0		(3.4)	全面軸。口縁部になるにしたがい薄くなる。	(地)灰白(5Y7/1)	(軸)淡黄(5Y8/3)	〃
5	瀬戸 〃	12.2		(3.2)	直線的な体部。全面軸。	(地)灰白(7.5YR/1)	(軸) 〃 〃	〃
6	磁器 大皿		13.6	(3.7)	内面のみ透明な軸がかかる。断面方形の高台。	(地)灰白(10YR7/1)		〃
7	備前 擂鉢		23.0	(8.0)	卸目は9～12本単位。底部外面に「長上」の刻印。	灰赤(10YR4/2)		細～粗砂

番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
8	丸 瓦	(16.4)	(12.2)	1.8			凸面ヘラナデ、凹面布目。
9	〃	(13.1)	(10.1)	1.7			凸面ヘラナデ、凹面布目の後にナデ。
10	〃	(12.5)	12.3	1.7			玉縁付近のみ残存。凸面ヘラナデ、凹面布目。
11	磨製石斧	7.1	3.0	1.0	47.2	緑泥片岩	柱状片刃。全面ていねいに加工。



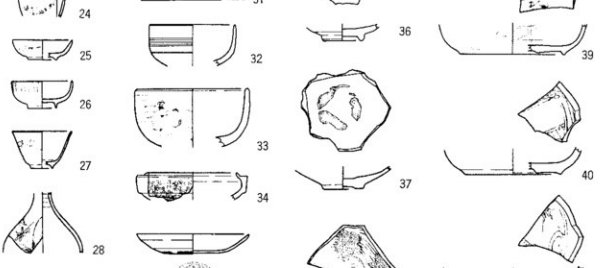
番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	色調 内	胎土
12	青磁 花生			(7.7)	動口形を呈する花生の頸部。	(地)灰白(10Y7/1)		精選
13	〃 火人	11.6		(7.2)	直線的に口縁部へ到る。	(地)灰白(2.5YR/2)	(軸)明緑灰(7.5GY8/1)	〃
14	磁器 仏飯器		3.8	(2.0)	脚部畳付の軸が広い。	(地)灰白(N8/)		〃
15	〃 〃		3.6	(3.8)		(地) 〃	(軸)明緑灰(10GY8/1)	〃
16	〃 〃		4.0	(4.1)	畳付の軸が広く、外面に段を持つ。外面のみ軸。染付。	(地) 〃	鈍い橙(2.5YR/4)	〃
17	備前 擂鉢			(4.3)	口縁部に段を有する。卸目は全面。	橙(2.5YR/6)		〃
18	〃 〃	38.0		(7.5)	口縁部に明瞭な段を有する。卸目は9本単位。	褐灰(5YR5/1)		微～細砂
19	〃 〃		18.2	(3.0)	全面に卸目がある。外面は板ナデ。底面は未調整。	赤褐(10YR4/4)	赤褐(10YR5/4)	微砂
20	〃 〃		15.8	(3.4)	内面にこまかい卸目がある。	鈍赤褐(2.5YR4/4)	鈍赤褐(2.5YR5/4)	微～細砂
21	弥生土器 甕	15.2		(5.3)	頸部・明瞭外面は弱毛目。駆部内面は指頭圧痕。	灰黄褐(10YR4/2)		石英、長石、角閃石

番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
22	丸 瓦	(8.8)	13.2	1.2			

第56図　ＳＤ16　出土遺物(2)（Ｓ：1/4）

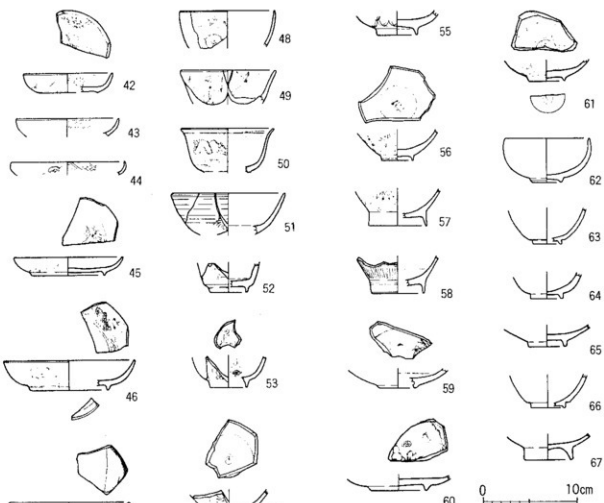
4工区では調査区南端と北端において石垣が検出され，調査区全域で裏込が検出された。南端の石垣は長さ13.35mにわたって部分的に跡切れながら検出された。石垣は最下位の1段のみであり，長径0.20～0.40mを測る石材である。石材は自然面を保った丸みの強い野面石であり，石垣上面のレベルは標高9.30～9.40mである。下面のレベルは標高9.00mである。石垣の西側には幅0.90mの裏込が検出された。裏込はこぶし大～0.30mの自然角礫や円礫を空詰している。

北端の石垣は用水路のコンクリートがあるため上面のみ検出されたにすぎない。石垣は長さ7.20mのみ検出され，北側の調査区外に延びると思われる。石材は長辺0.30～0.70mを測り，石垣上面のレベルは標高9.60～9.90mである。石材は自然面を保った丸みの強い野面石である。



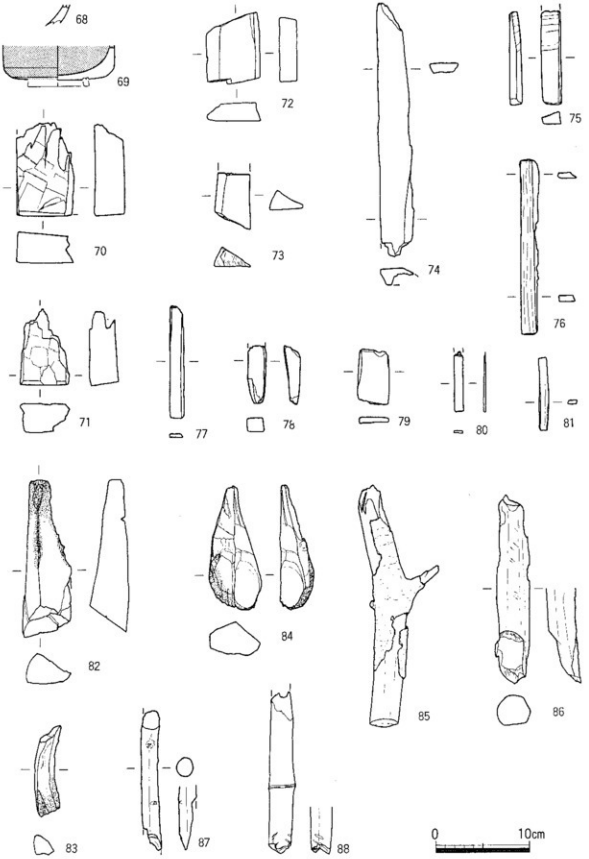
番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
23	碗 蓋	5.0		(2.7)	口縁部は若干外反する。全面に透明釉。	(釉)灰白(N8/)		精選
24	瀬戸 〃	5.6		(2.7)	口縁部は外反する。外面に淡青色の施釉文の染付。	(釉)〃		〃
25	〃 〃	6.4	3.1	2.1	畳付無釉。外面に淡青色の染付。	(釉)〃		〃
26	肥前 〃	6.5	3.0	2.9	細く長い高台。外面に淡青色の施より文。	(釉)灰白(2.5Y8/1)	(釉)灰白(5Y8/1)	〃
27	瀬戸 〃	6.4	2.2	3.9	体部は直線的で薄い。外面に青色の草花文染付。	(釉)灰白(N8/)		〃
28	肥前 瓶			(6.1)	外面に青色の草花文染付。	(釉)〃		〃
29	瀬戸 そば猪口		4.0	(5.4)	外面に淡緑青色の染付。	(釉)〃		〃
30	陶器 碗	7.0	4.0	1.9	厚めの断面を呈して再利用する。	(釉)黄いね2.5Y8/6	(釉)灰白5Y7/1	〃
31	磁器 灯明皿	11.0	5.4	1.8	外面は施釉。	(釉)灰白(5Y7/1)		〃
32	瀬戸 天目	9.0		(4.3)	体部上半は直立し，口縁部に至る。全面釉。泥漿。	(釉)灰白(2.5Y8/1)		〃
33	〃 〃	11.8		(6.1)	器肉が厚い。外面は緑灰色の染付。	(釉)黄灰(2.5Y5/1)	(釉)明オリーブ(5GY7/)	〃
34	磁器 鉢	9.4		(2.8)	口縁部は肥厚。外面染付。	(釉)灰白(N8/)		〃
35	磁器 杯	12.0	5.0	2.1	体部外面上半は回転ヘラ削り。底面中央は手持ちヘラ削り。	黄いね(7.5Y8/3)		微砂
36	磁器 蓋		4.2	(1.7)	見込に蛇の目釉いず。貫入・気泡は無釉。	(釉)黄いね(10YR8/6)		精選
37	〃 〃		4.0	(2.4)	蛇の目高台。見込に砂目3個所痕。	(釉)〃	(釉)灰オリーブ(7.5Y5/	〃
38	肥前 〃		8.8	(2.5)	外面無釉。見込に蛇目釉剥し，焼成。	(釉)灰白(N7/)		〃
39	〃 〃		11.2	(3.2)	蛇の目凹形高台。体部内面に染付文。	(釉)灰白(N8/)		〃
40	〃 〃		10.2	(2.7)	蛇の目凹形高台。見込に銅色の染付。	(釉)〃		〃
41	〃 〃		10.2	(3.7)	蛇の目凹形高台。見込に淡緑色の染付。	(釉)〃		〃

第57図　ＳＤ16　出土遺物(3)（Ｓ：1/4)



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	色調 内	胎土
42	肥前 瓶	9.4	6.2	2.0	わずかな高台。外面草花文、内面にたこ唐草文。	(地)灰白(N8/)		精選
43	〃 〃	11.0		(1.9)	見込に明緑灰色の染付。	(地)〃		〃
44	〃 〃	12.0		(1.4)	見込みに蛇屈指による染付。口唇部は金色。	(地)〃		〃
45	〃 〃	11.6	7.6	1.9	外面は紺色の染付。見込は草花文の染付。	(地)〃		〃
46	〃 〃	14.0	8.2	3.1	外面は紺色の染付。見込は草花文の染付。口唇部はこげ茶色。	(地)〃		〃
47	磁器 〃	13.0	7.5	2.4	見込に非常にうすい金色の線。口縁部は濃紺色。	(地)〃		〃
48	肥前 碗	10.0		(4.0)	外面に蓮花文の染付。	(地)〃		〃
49	瀬戸 〃	10.0		(3.6)	内外面に淡青青色の草花文。	(地)〃		〃
50	肥前 向付	10.0		(4.6)	外面は紺色の山水画。口縁部は外反。	(地)〃		〃
51	肥前 碗	12.0		(4.3)	外面は紺色の草花文。見込紋の目粘ハギ。	(地)〃		〃
52	瀬戸 鉢1		4.0	(3.1)	外面は淡青色の染付。	(地)明緑灰(7.5GY8/1)		〃
53	肥前 碗		4.0	(3.3)	高い高台。内外面とも群青色の草花文。	(地)灰白(N8/)		〃
54	〃 〃		3.5	(3.2)	外面に淡青色の草花文。見込に紺色文。	(地)〃		〃
55	瀬戸 〃		4.2	(2.5)	外面に紺色の鉄山文。	(地)〃	(地)明緑灰(7.5GY8/1)	〃
56	肥前 〃		6.0	(3.9)	高く細い高台。外面に明緑灰色の草花文。	(地)〃		〃
57	〃 〃		3.4	(3.2)	外面に紺色の草花文。見込に紺氏呑文を染付。	(地)〃		〃
58	〃 〃		5.6	(3.9)	高く細い高台。外面に梵字文様の染付。	(地)〃		〃
59	磁器 皿		4.0	(2.0)	見込に淡青色の染付。	(地)〃		〃
60	肥前 〃		5.8	(1.6)	見込に緑灰色の草花文。	(地)灰白(7.5YR/1)		〃
61	瀬戸 碗		3.8	(2.2)	内外面に鉄山文。底面中央に染付。	(地)灰白(N8/)		〃
62	磁器 天山	9.0	3.2	4.6	底面・高台・体部下位は無釉。体部内面。	(地)灰白(N8/)	(地)灰白(5Y7/2)	〃
63	磁器 碗		3.0	(3.7)	底面と体部の境に稜を持ち、底面・高台は無釉。	(地)灰白(N8/)	(地)灰白(2.5GY8/)	〃
64	〃 〃		3.4	(2.7)	〃	(地)灰白(7.5Y7/1)		〃
65	磁器 瓶		4.0	(2.2)	底面・高台は無釉。見込に蛇の目粘ハギ。	(地)灰白(N8/)		〃
66	磁器 鉢口		3.4	(3.5)	底面と体部の境に明瞭な稜を持ち、底面・高台は無釉。	(地)灰白(7.5GY8/1)	(地)灰白(5YR/2)	〃
67	磁器 皿		5.0	(2.7)	高い高台。畳付無釉。	(地)灰白(2.5YR/2)	(地)淡黄(2.5YR/3)	〃

第58図　ＳＤ16　出土遺物(4)（Ｓ：1/4）

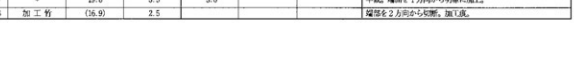


第59図　ＳＤ16　出土遺物(5)（Ｓ：1/4）

（第59図）

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
68	木器 椀			(2.5)	体部下半の破片。内外面とも赤彩。			
69	〃 〃			(3.7)	底台、口縁部を欠損。内外面とも黒彩。			

番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
70	加工木	(9.8)	(6.2)	3.3			全面に加工痕が残る。板目。
71	〃	(7.9)	(5.2)	3.1			上端、側面を加工。樹皮取り。
72	〃	7.5	5.6	1.9			両端を切断する。板目。
73	〃	(5.0)	3.6	2.2			ミカン割り。端面を加工。
74	加工板	(11.8)	1.45	0.4			板目。
75	加工木	(6.1)	(1.7)	1.5			断面方形。下方に向かって細くなる。
76	加工板	(27.0)	(2.6)	1.8～1.0			板目。
77	〃	5.8	3.1	0.7			柾目。
78	〃	(9.9)	1.9	1.8			全面樹取り。加工痕。柾目。
79	〃	(18.5)	(1.7)	0.7			柾目。
80	〃	(6.3)	1.0	0.2			柾目。
81	〃	7.7	0.9	0.4			板目。
82	加工木	14.7	4.8	3.2			ミカン割り。端面を加工。使っている。
83	〃	9.6	2.2	2.1			〃 〃 〃
84	〃	13.0	5.6	3.6			4面を樹取りし、加工痕が残る。裏面を使っている。
85	〃	(14.0)	2.0				丸木。端面を1方向から加工。
86	〃	(25.6)	3.5				樹皮を残す丸木。端面を切断。柾。
87	〃	19.8	3.5	3.0			半截。端面を1方向から斜断に加工。
88	加工竹	(36.9)	2.5				端部を2方向から切断。加工痕。



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
89	木器 椀			(2.2)	高台の一部を残存。外面は赤彩。			

番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
90	加工板	23.6	3.6	1.5			柾目。両端を切断する。

第60図　ＳＤ16　出土遺物(6)（Ｓ：1/4）

石垣の西側には幅1.20mを測る裏込が検出された。

石垣が検出されなかった調査区中央部においては，幅0.30～0.80mを測る裏込が一部跡切れるがほぼ全域で検出された。裏込はこぶし大～0.30mの自然角礫・円礫が使われている。石垣・裏込の東側は，約0.25～0.30mの比高差をもって低くなっている。この面は堀跡の底面近くであると考えられるが，調査区東壁が崩落したためこれ以上掘り下げることができなかった。

出土遺物　堀跡からの出土遺物は，３区より出土した遺物と４工区より出土した遺物で図版を別にした。第55図・第59図は３工区の出土遺物，第56～58図・第60図は４工区の出土遺物である。

３工区より出土した遺物は，瀬戸盃（１），同碗（５），唐津碗（３），磁器碗（４），同大皿（６），備前焼擂鉢（７），土師質土器小皿（２），丸瓦（８～10），磨製石斧（11），木器椀（68・69），加工木（70～73・75・82～87），加工材（74・76～81），加工竹（88）である。４工区より出土した遺物は，瀬戸盃（24・25・27），同そば猪口（29・52），同天目（32・33），同碗（49・55・61），肥前盃（26），同瓶（28），同皿（38～46），同碗（48・51・53・54・56～58），同皿（60），磁器盃（23），同灯明皿（31），同鉢（34），同皿（36

・37・47・59・65・67），同碗（63・64），同天目（62），同猪口（66），同仏飯器（14～16），青磁花生（12），同火入（13），備前焼擂鉢（17～20），陶器碗（30），土師器杯（35），弥生土器（21），丸瓦（22），木器椀（89），加工板（90）である。

2は底面未調整で，内面に若干の高まりを有する。

3は端反り碗である。

7は全面に卸目を施し，底部外面に「長上」の刻印を有する。

12～16は仏容器である。

17・19は口縁部が拡張され，外面に2・3本の凹線を有する。

23～27は盃であり，24・27は草花文，26は雨ふり文の染付がある。

35は完形の杯であり，底面は切り離し後に手持ちヘラ削りを施す。

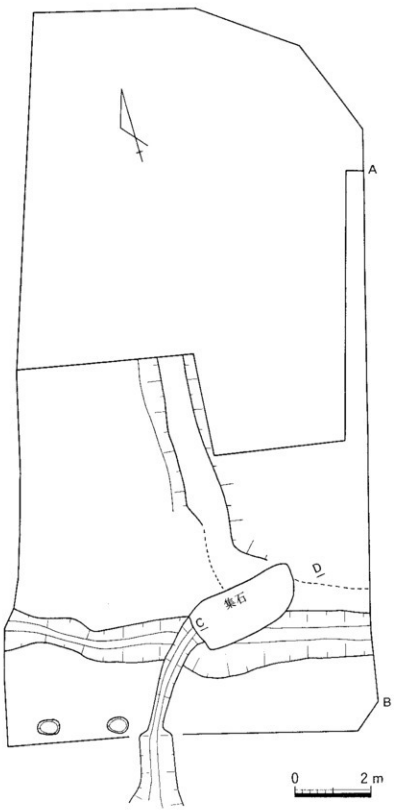
36は見込に蛇の目釉ハギ，37・38は砂目が溶着し，38は波状文の染付がある。

39～41は蛇の目凹形高台である。

42～47は小形の皿であり，42はたこ唐草文，44は型紙摺による染付がある。

48は菊花文，49は草花文の染付がある。

50は山水画の染付。53～58は碗であり，53・54・56・57は草花文，55は網目文，58は梵字文様。54の見込に



第61図　整地部平面図（S：1/40）

は渦巻文，56は源氏香文がある。

61は内外面に網目文があり，底部外面に渦巻文がある。

68は内外面とも赤漆，69は内外面とも黒漆塗りである。

70～73・75は板状に加工しており，70・71は加工痕を明瞭に残す。73はミカン割り後に加工する。

82～84は表面の一部を焼いている。

88は先端部を２方向から加工した竹である。

89の外面は赤漆塗りである。

３工区において，ＳＤ16の北側部分，換言すれば堀跡に囲まれた内側の調査は，南半分のみ行った（第61～63図）。その結果，溝状遺構２本，集石１ヶ所，ピット２個，道路状遺構が検出された。

集石は中央部やや東寄りで検出され，確認面のレベルは標高10.20m前後である。集石は南北方向に延びる溝の北端にあり，径５～30cmを測る野面石である。最終的には溝の両側にやや大きな石を並べ，その裏側に小石を詰めたようになっているが，検出時には平面形が楕円形を呈する集石が確認された。集石の東側から下駄が出土した。

集石から若干湾曲気味に南に延びる溝は，幅0.90m，深さ0.40mを測る。南端はＳＤ16に流れ込んでいる。溝の断面はＵ字形を呈し，底面のレベルは南側に徐々に低くなっている。溝内より加工板が出土した。

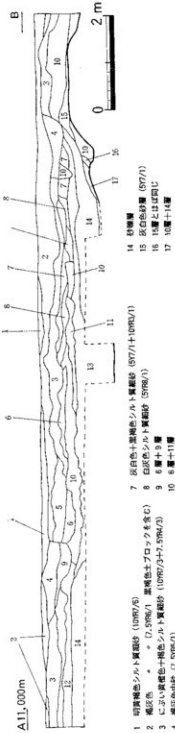
東西方向に延びる溝は，幅0.80～1.30mを測る。確認面のレベルは標高9.50～10.10mである。溝の断面はＵ字形を呈し，深さは0.10～0.40mである。

２個のピットは直径0.55mを測り，楕円形を呈する。確認面のレベルは標高10.15m前後である。西側のピットの深さは0.20m，東側は0.10mである。

道路状遺構は調査範囲のほぼ中央で南北方向に検出された。遺構は0.80m幅の高まりであり，周囲との比高差は10cmである。上面は周囲より若干固くしまっている。

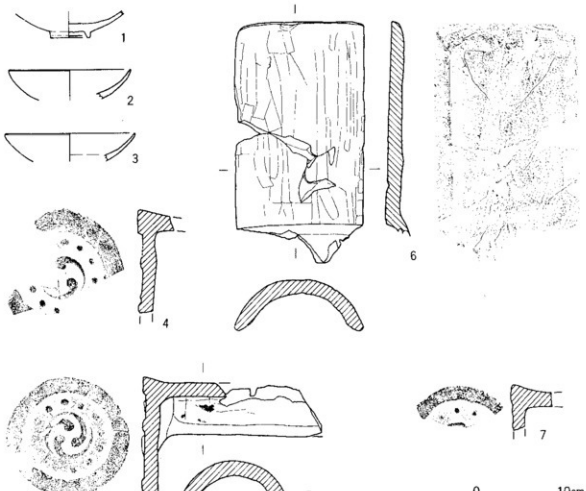
第62図は調査範囲の東壁土層図である。土層は17層に細分されており，堆積状態は非常に乱れており人為的に埋められたと考えられる。

出土遺物　遺物は肥前皿（１・２），瀬戸皿（３），軒丸瓦（４・５・７），丸瓦（６），木器椀（８～10），重箱（11），曲物（12・13），加工木（14・16），加工材（15・17～33），下駄（34）である。



第62図　整地部断面図
（Ｓ：1/80）

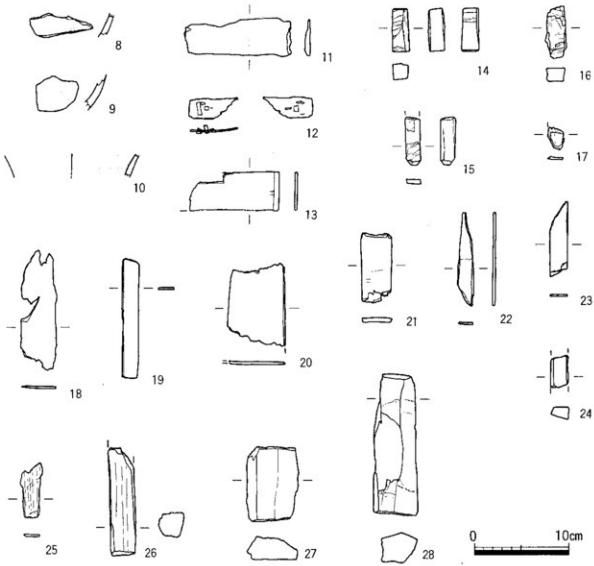
第63図　整地部集石平面図（S：1/40）



番号	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	形態・手法の特徴	色調 外	色調 内	胎土
1	肥前瓦	13.0		(3.1)	低い腰高。見込み部の下端を除き、釉がかかる。	(地)灰白(7.5YR/1)	(釉)明黒ｲﾄﾞﾘ灰(5G 17/1)	精選
2	〃　〃		4.3	(2.8)	見込み部に淡青色の砂付。蛇の目釉ハギ。	(地)白		〃
3	瀬戸　〃	14.0		(2.9)	全面に釉。	(地)灰白(N8/)	(釉)淡水色	〃

番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
4	軒丸瓦		(径) 13.3	1.5			巴瓦。
5	〃	(19.1)	12.1	1.6			巴瓦。凸面はヘラナデ、凹面は布目の後にヘラ削り。
6	丸瓦	(25.2)	13.7	1.5			凸面はヘラナデ、凹面は布目。
7	軒丸瓦			1.5			巴瓦。

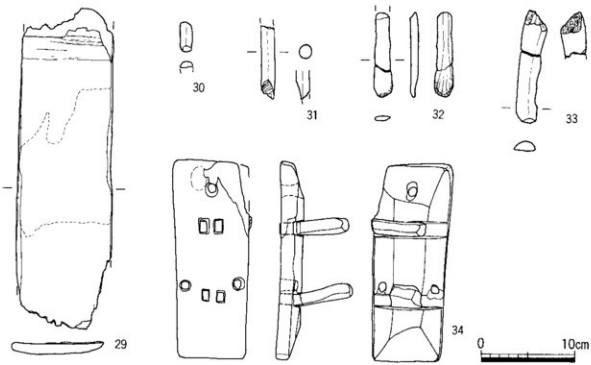
第64図　整地部出土遺物(1)（S：1/4）



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
8	木器 鍬			(2.6)	鍬の下半の破片。内外面ともに赤彩。			
9	〃 〃			(2.8)	鍬の下半の破片。外面を赤彩。			
10	〃 〃			(2.4)	鍬の下半の破片。内面を赤彩。			

番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
11	棗箱	(11.5)	3.9	0.6			表面は非常になめらかで、片面のみ赤彩。
12	曲物	(5.3)	(2.2)	0.2			桜の樹皮が残存。
13	〃	(9.6)	4.1	0.2			柾目。端部を若干うすくする。
14	加工木	4.4	1.7	1.7			全面を面取りし、2面に加工痕が残る。
15	加工材	(5.0)	1.6	0.5			柾目。端部を加工する。
16	加工木	(5.6)	(1.9)	1.4			2面を加工。
17	加工材	(2.4)	1.6	0.3			樹皮、側面を加工。
18	〃	(12.7)	(3.7)	(0.2)			板目。
19	〃	12.6	1.8	0.2			〃
20	〃	(8.7)	(6.1)	0.3			〃
21	〃	(7.4)	(3.2)	0.4			板目。
22	〃	9.9	1.65	0.3			柾目。側面を加工する。
23	〃	(7.9)	1.8	0.15			柾目。
24	〃	(3.3)	(1.8)	(1.3)			柾目。3面を面取りする。
25	〃	(5.8)	(2.4)	0.2			柾目。
26	〃	(11.4)	2.7	2.7			ミカン割り後に面取り。端部を切断する。
27	〃	7.9	5.4	2.5			ミカン割り。両端を切断する。
28	〃	14.9	3.8	3.0			ミカン割り後に面取り。両端を切断する。

第65図　整地部出土遺物(2)（S：1/4)



番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
29	加工板	(33.8)	9.9	1.1			平担面に加工痕が残り、擦痕が僅く付着する。粗目。
30	〃	(3.1)	(1.3)				端部を1方向から加工する。
31	〃	(7.7)	1.4				大木。端部を1方向から強く加上する。
32	〃	(8.9)	1.6	0.7			端部を欠いている。
33	〃	11.9	2.3	1.1			半裁。下端は1方向から加工。上端は欠いた後に加工。
34	下駄	21.8	8.0				右足用。

第66図　整地部出土遺物(3)（S：1/4)

2．　性格不明土坑

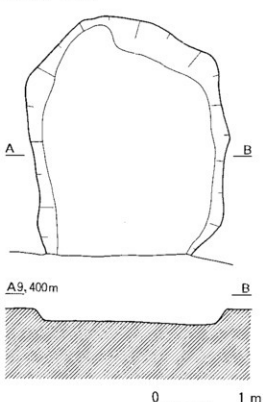
ＳＸ01　（第67図）

4工区中央北寄りにおいて検出された土坑であり，ＳＤ16の栗石の西側に位置する。

確認面のレベルは標高9.25mである。土坑の西端が調査区外にかかっているため，正確な規模は不明である。平面形は不整な楕円形を呈し，東西方向の長軸は2.55m以上，南北方向の短軸は2.05mを測る。確認面からの深さは15mである。底面のレベルは，南側が若干低くなるが，ほぼ平坦である。

土坑は多量の松・杉等の粗朶を充填しており，いわゆる「敷粗朶」であると考えられる。その機能としては，ＳＤ16の石垣を築く際の排水施設であると考えられる。

出土遺物　遺物はなかった。



第67図　ＳＸ01　平・断面図（S：1/40)

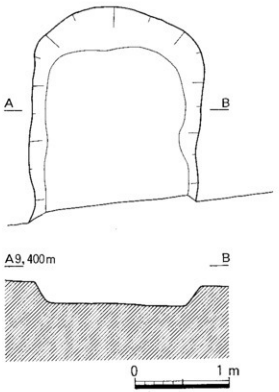
ＳＸ02　（第68図）

４工区の中央やや北寄りにおいて検出された土坑であり，ＳＸ01とＳＸ03の中間に位置する。

確認面のレベルは，北側が標高9.25m，南側が標高9.20mである。土坑の西側が調査区外にかかっているため，正確な平面形・規模は不明である。検出できた平面形は隅丸長方形であり，東辺が大きく広がっている。東西方向の長軸は2.10m以上，南北方向の短軸は1.80mを測る。確認面からの深さは20cmである。掘り込みは緩やかで，底面は平坦である。

土坑内にはＳＸ01と同様に松・杉等の粗朶が多量に充填されており，「敷粗朶」である。

出土遺物　遺物は数点の土師質土器・陶磁器だけであり，小片のため図化できなかった。



第68図　ＳＸ02　平・断面図（Ｓ：1/40）

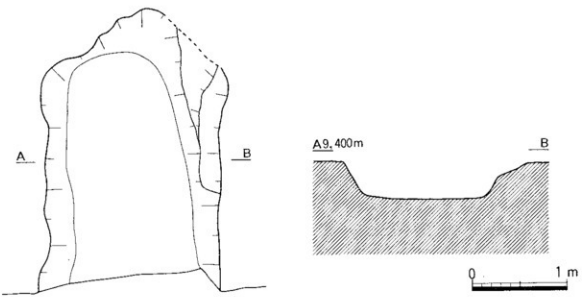
ＳＸ03　（第69図）

４工区の中央やや北寄りにおいて検出された土坑であり，ＳＸ02の南側に位置する。

確認面のレベルは標高9.30mである。土坑の西側が調査区外にかかっているため，正確な平面形・規模は不明である。検出できた平面形は不整な隅丸長方形であり，東西方向の長軸は2.80m以上，南北方向の短軸は1.90mを測る。確認面からの深さは40cmである。底面は平坦である。南東隅の掘り込みはわずかな段を有する。

土坑内にはＳＸ01・02と同様に松・杉等の粗朶が多量に充填されていた。

出土遺物　遺物は数点の陶磁器片のみであり，図化できるものはなかった。



第69図　ＳＸ03平・断面図（Ｓ：1/40）

3　住居跡

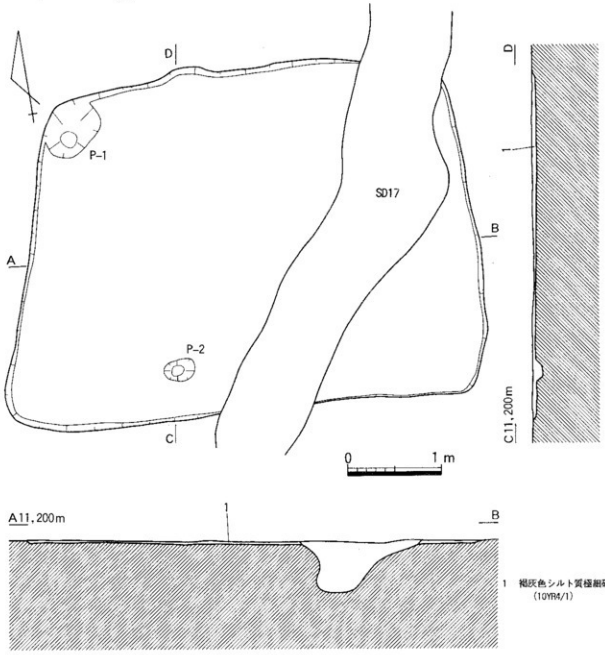
ＳＨ01　（第70図）

３工区の中央やや南側に検出された住居跡であり，ＳＤ17を切っている。

確認面のレベルは標高11.00mである。平面形は北辺の短い台形を呈し，南辺の長さは5.00m，北辺は4.10mを測る。南北方向は3.60mである。掘り込みは非常に浅く１～４cmである。床面は軟弱であり，ほぼ平坦である。柱穴は北西隅と南壁寄りの２個検出され，Ｐ－１の深さは14cm，Ｐ－２の深さは６cmである。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物　遺物は数点の土師質土器・磁器片のみであり，図化できなかった。

ＳＨ01～04に関しては，住居跡の根拠に乏しいが，方形のプラン・柱穴の存在から本報告書では住居跡として報告する。



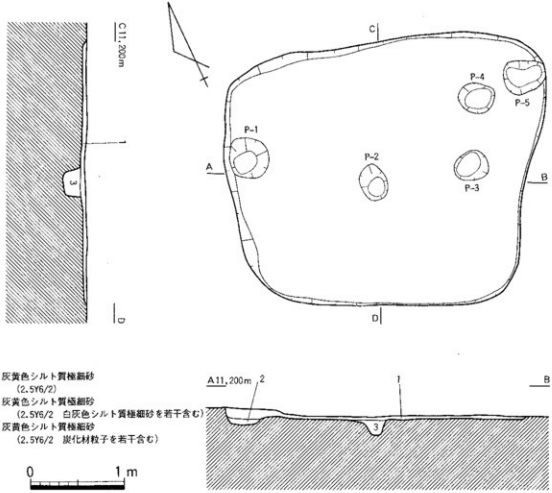
第70図　ＳＨ01平・断面図（Ｓ：1/40）

ＳＨ02　（第71・72図）

３工区の中央やや南側に単独で検出された住居跡であり，ＳＨ01の西側に位置する。

確認面のレベルは標高11.05m前後である。平面形は南辺の短い台形を呈し，南辺の長さは約2.50m，北辺は約3.40m，南北方向の短辺は2.80mを測る。掘り込みは非常に浅く２～６cmである。床面は軟弱であり，ほぼ平坦である。柱穴は５個検出され，深さはＰ－１が５cm，Ｐ－２が16cm，Ｐ－３が３cm，Ｐ－４が２cm，Ｐ－５が２cmである。埋土は灰黄色シルト質極細砂の単一層である。柱穴の埋土は灰黄色シルト質極細砂であり，白灰色シルト質極細砂を若干含む層と炭化材粒子を含む層に分かれる。

出土遺物　遺物は唐津灰釉皿（１），数点の磁器片である。１は折縁皿である。



第71図　ＳＨ02平・断面図（Ｓ：1/40）

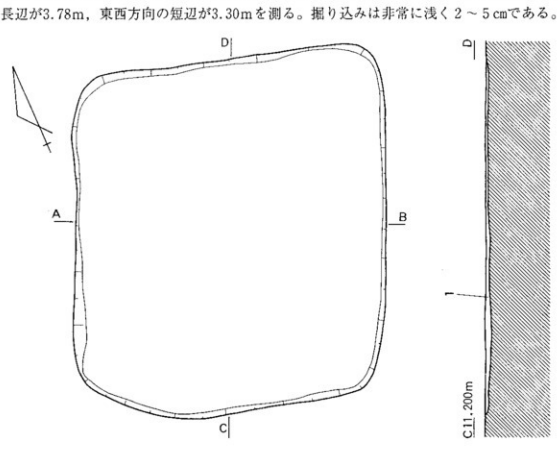
番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
1	唐津 皿	12.2		(1.5)	口縁部はわずかな稜を持ち外反し，口唇部は尖立。灰釉。	(釉)灰白(5Y7/1)	(釉)灰オリーブ(5Y 6/2)	精選

第72図　ＳＨ02出土遺物（Ｓ：1/4）

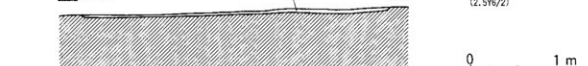
ＳＨ03　（第73・74図）

３工区の中央やや南側に単独で検出された住居跡であり，ＳＨ02の南側に位置する。

確認面のレベルは標高11.05m前後である。平面形は隅丸長方形を呈し，その規模は南北方向の長辺が3.78m，東西方向の短辺が3.30mを測る。掘り込みは非常に浅く２～５cmである。



第73図　ＳＨ03　平・断面図（Ｓ：1/40）



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	色調 内	胎土
1	肥前 皿	14.2		(2.3)	若干内湾する。灰釉。	(釉)明オリーブ灰(5GY7/1)	(釉)明オリーブ灰(5GY7/1)	精選
2	唐津 皿	8.6		(1.65)	体部下半は無釉。	(釉)灰白(2.5Y7/1)	(釉)灰黄(7.5YR6/2)	精選
3	肥前 皿		4.2	(2.1)	蛇の目高台。見込に蛇の目釉ハギ。淡緑色の染付。	(釉)灰白(N8/)	(釉)明オリーブ灰(5GY7/1)	精選
4	備前焼 擂鉢	34.4		(3.7)	口縁部に段を有し，卸目は全体に施される。	褐灰(5YR4/1)	暗灰(5YR5/1)	微砂

第74図　ＳＨ03出土遺物（Ｓ：1/4）

床面は軟弱であり，ほぼ平坦である。柱穴は検出されなかった。埋土は灰黄色シルト質極細砂。

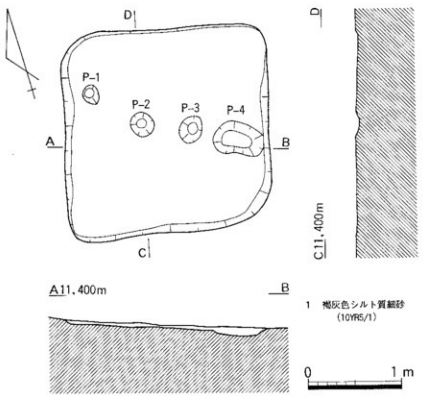
出土遺物　遺物は肥前灰釉皿（1），唐津灰釉皿（2），肥前染付皿（3），備前焼擂鉢（4），磁器片である。2は折縁皿，3は蛇の目高台で，見込に蛇の目釉ハギがある。4は口縁部外面を上下に拡張し，凹線が2本みられる。内面の卸目は細かい。

ＳＨ04　（第75・76図）

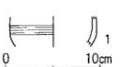
3工区の中央やや南側に単独で検出された住居跡である。

確認面のレベルは標高11.05m前後である。平面形は方形を呈し，規模は一辺2.20mを測る。確認面からの深さは1～5cmである。床面は軟弱であり，東側に若干低くなる。Ｐ－1・2の深さは2cm，Ｐ－3は4cm，Ｐ－4は6cmである。埋土は褐灰色シルト質細砂の単一層である。

出土遺物　遺物は天目茶碗（1），磁器片，染付片である。



第75図　ＳＨ04　平・断面図（Ｓ：1/40）



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
1	磁器 天目			(3.2)	外面に浅い沈線。うぐいす色・釉調褐色の釉。	(褐)灰白(2.5Y8/1)		精選

第76図　ＳＨ04　出土遺物（Ｓ：1/4）

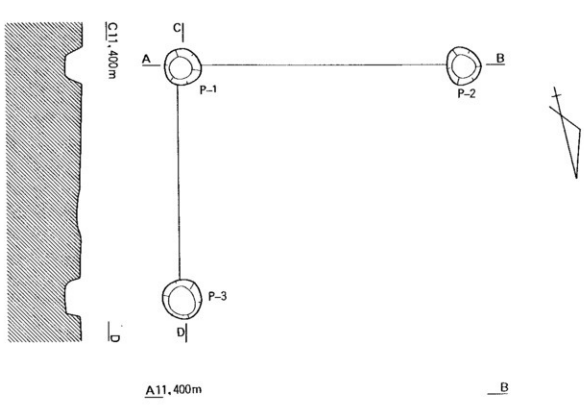
4　掘立柱建物跡

ＳＢ01　（第77図）

3工区の南端で検出された東西棟の1×1間の掘立柱建物跡である。北西隅の柱穴を欠く。

確認面のレベルは標高11.10m前後である。柱間は桁行2.60m，梁行2.05mを測る。主軸方向はＥ－14°－Ｓである。柱穴の平面形は円形で，直径0.40mを測る。Ｐ－1・3の深さは18cm，Ｐ－2は6cmである。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物　遺物は数点の土師質土器片・磁器片のみである。



第77図　ＳＢ01　平・断面図（Ｓ：1/40）

ＳＢ02　（第78図）

３工区の中央部においてＳＤ20・21・23と重複して検出された掘立柱建物跡であり，切り合い関係は不明である。

確認面のレベルは標高10.80m前後である。Ｐ－１～10の10個の柱穴をほぼ等間隔で梢円形に配する。柱穴の平面形は不整な円形を呈する。Ｐ－１は直径17cm，深さ17cm，Ｐ－２は直径40cm，深さ６cm，Ｐ－３は直径22×16cm，深さ10cm，Ｐ－４は直径37×30cm，深さ９cm，Ｐ－５は直径46×40cm，深さ11cm，Ｐ－６は直径25×20cm，深さ６cm，Ｐ－７は直径40×24cm，深さ12cm，Ｐ－８は直径26×17cm，深さ18cm，Ｐ－９は直径24cm，深さ13cm，Ｐ－10は直径20cm，深さ５cmである。埋土は褐灰色シルト質細砂である。

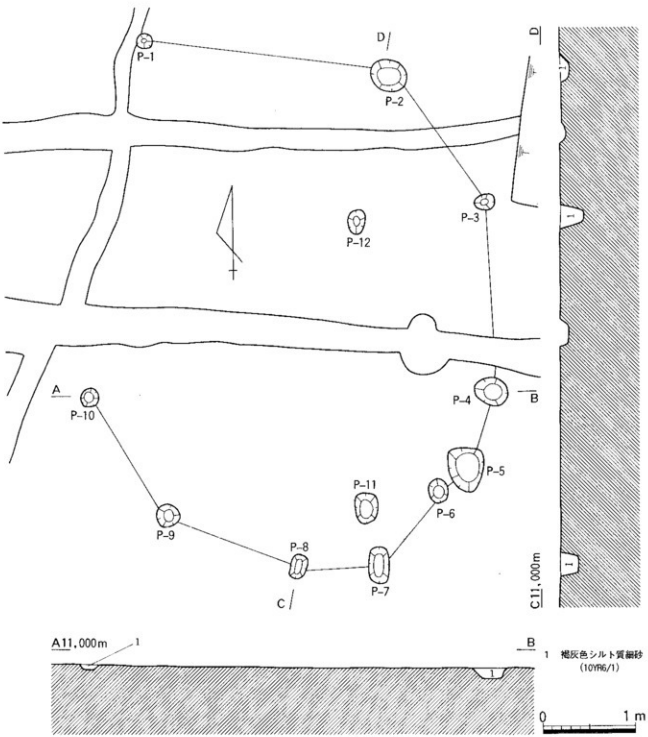
出土遺物　遺物は数点の土師質土器片・磁器片のみである。

５　土坑

ＳＫ07　（第79図）

４工区の中央北側において検出された土坑で，ＳＤ16の裏込を切っている。

確認面のレベルは標高9.20mである。平面形は円形を呈し，直径0.86cm，深さ0.62cmを測る。底面は片寄っている。掘り込みは急傾斜である。遺物は出土しなかった。



第78図　ＳＢ02　平・断面図（Ｓ：1/40）

ＳＫ08　（第79・80図）

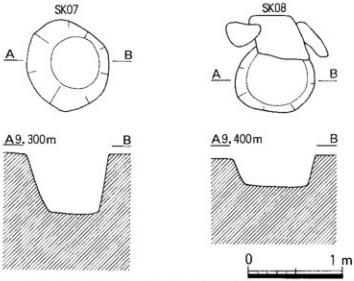
４工区南端において検出された土坑である。

確認面のレベルは標高9.30mである。平面形は円形を呈し，直径0.84mを測る。確認面からの深さは0.30mであり，掘り込みは急傾斜である。底面は平坦でやや南側に片寄っている。土坑の東側にはＳＤ16の石垣がある。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物　遺物は，肥前灰釉碗（1），磁器湯飲み碗（2），土師質土器焙烙（3）である。

1は内湾する体部で，外面に草花文の染付がある。2は外面に稜をもち直立する。外面に青海波の染付がある。

3は外面指押え，内面ヘラナデ・ハケメの後にナデを施しており，口縁部は内外面ともヨコナデである。体部外面に煤が多量に付着している。



第79図　ＳＫ07・08　平・断面図（Ｓ：1/40）

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	色調 内	胎土
1	肥前 碗	9.8		(4.2)	外面に絵色の草花文。	(釉)灰白(N8/)	(釉)明緑灰(10GY8/1)	精選
2	磁器 湯飲み碗			(2.3)	外面に群青色の青海波の染付。	(釉)灰白(2.5Y8/1)		精選
3	土師質土器焙烙	33.2		(3.2)	口縁部ヨコナデ。体部外面指押え。内面ヘラナデ，ハケメの後，ナデ。	黒褐(2.5Y3/1)	黄灰(2.5Y4/1)	微～細砂

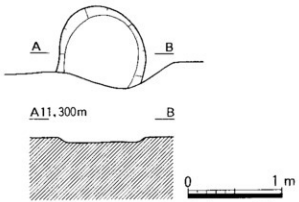
第80図　ＳＫ08　出土遺物（Ｓ：1/4）

ＳＫ09　（第81図）

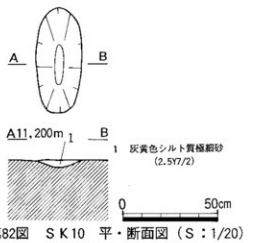
3工区南端に検出された土坑であり，確認面の標高は11.10mである。平面形は不整円形を呈し，直径0.92cm，深さ5cmを測る。底面は平坦である。埋土は灰黄色シルト質極細砂である。

ＳＫ10　（第82図）

3工区南側に検出された土坑である。確認面のレベルは標高11.10mである。平面形は楕円形を呈し，長軸0.56m，短軸0.24mを測り，深さは4cmである。掘り込みはゆるやかである。



第81図　ＳＫ09　平・断面図（Ｓ：1/40）



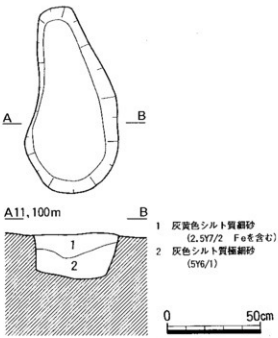
第82図　ＳＫ10　平・断面図（Ｓ：1/20）

ＳＫ11　（第83図）

３工区中央やや南寄りにおいて検出された土坑であり，ＳＨ04の東側に位置する。

確認面のレベルは標高11.00ｍである。平面形は不整な楕円形を呈する。東西方向の長軸は1.00ｍ，南北の短軸は0.46ｍを測り，東半分は細くなっている。確認面からの深さは0.24ｍである。掘り込みは急傾斜である。底面は南側に若干低くなっている。埋土は灰黄色シルト質細砂と灰色シルト質極細砂の２層である。

出土遺物　数点の磁器片が出土したのみであり，図化できるものはなかった。



第83図　ＳＫ11　平・断面図（Ｓ：1/20）

ＳＫ12　（第84図）

３工区中央やや南寄りにおいて検出された土坑であり，ＳＫ10の東側に位置する。

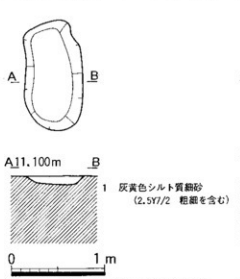
確認面のレベルは標高11.00ｍである。平面形は不整楕円形を呈し，東西方向の長軸は1.16ｍ，短軸0.60ｍを測る。深さは10㎝である。底面は平坦である。埋土は灰黄色シルト質細砂の単一層である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ13　（第85図）

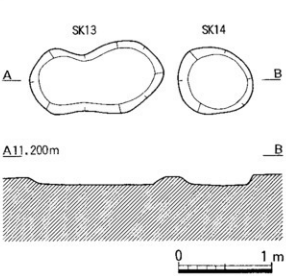
３工区北側において単独で検出された土坑であり，ＳＫ14の北側に位置する。

確認面のレベルは標高11.00ｍである。平面形は中央部の括れるピーナツ形を呈する。南北方向の長軸は1.45ｍ，短軸は0.77ｍを測る。深さは８㎝であり，底面は平坦である。埋土は灰黄色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物　数点の磁器片のみであり，図化できるものはなかった。



第84図　ＳＫ12　平・断面図（Ｓ：1/40）

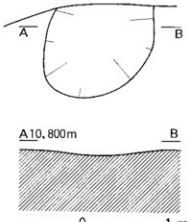


第85図　ＳＫ13・14　平・断面図（Ｓ：1/40）

ＳＫ14　（第85図）

３工区北側に検出された土坑で，ＳＫ13の南側にある。

確認面のレベルは標高11.00mである。平面形は不整な円形を呈し，直径は0.80mを測る。深さは12cmである。底面は平坦である。埋土は灰黄色シルト質細砂の単一層である。遺物は出土しなかった。



第86図　ＳＫ15　平・断面図（Ｓ：1/40）

ＳＫ15　（第86図）

３工区北端において検出された土坑であり，東側はＳＤ16に切られている。

確認面のレベルは標高10.70mである。平面形は不整な円形を呈し，直径は1.10mを測る。深さは５cmであり，掘り込みは非常になだらかである。遺物は出土しなかった。

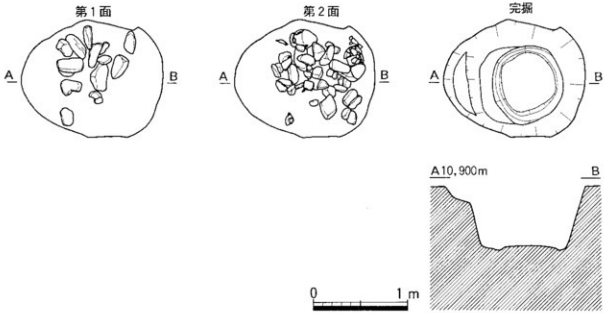
ＳＫ16　（第87・88図）

３工区中央において単独で検出された土坑である。

確認面のレベルは標高10.80mである。平面形は不整な円形を呈し，長軸は1.50m，短軸は1.25mを測る。確認面からの深さは0.64mである。掘り込みは急傾斜であり，西側には三日月状のテラスを有する。底面は平坦であり，直径0.75×0.85mを測る環状の落ち込みが東側に片寄った位置で確認される。深さは２cmである。

確認面から約0.20m下がった所で集石が検出された（第１面）。さらに約0.10m下において集石が検出された（第２面）。集石にはほぼ完形の瓦器茶釜（第88図１・２）や木製品が共伴していた。底面直上には竹の籠の破片が残存していた。

出土遺物　遺物は土師質土器茶釜（１・２），木製椀（３・４），加工竹（５），加工材（６・７），底板（８・９），土師質土器片・陶磁器片がある。

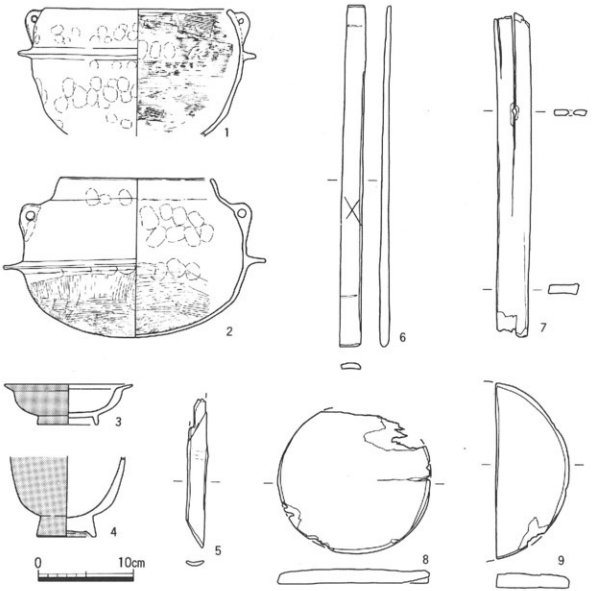


第87図　ＳＫ16　平・断面図（Ｓ：1/40）

1は鍔を上位に付け，外面には指押え，内面には細かいハケメが施されている。鍔以上に煤が付着する。2は鍔を中位に付け，以下はハケメを施す。口縁部は長く内傾している。

3・4は外面に黒漆，内面に赤漆を塗っている。

5は先端を尖らしている。6は×印の線刻を有する。



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
1	瓦器	椀	19.4		(13.4)	口縁部ヨコナデ，体部外面指押え，内面ハケメ。ススム。	暗灰(N3/0)	灰白(2.5Y7/1)	微～細砂
2	〃	〃	16.0		16.8	鍔以上はヘラナデ，以下はハケメ，内面指押え，ミガキ。	灰(5Y4/1)	灰(5Y6/1)	微砂
3	木器	椀	13.6	6.4	4.3	口縁部は大きく広がる。外面に黒漆，内面は赤彩。			
4	〃	〃		6.2	(8.4)	写い底部。外面は黒彩，内面は赤彩。			

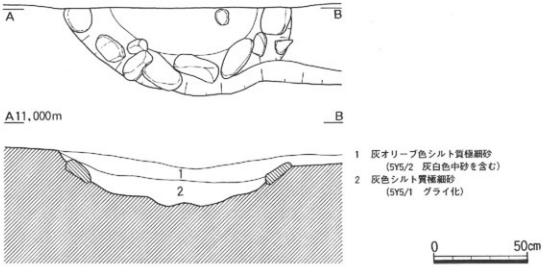
番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
5	加工竹	(15.6)	1.9	0.4			竹を割り，先端部を加工。
6	加工板	35.9	2.1	0.7			板目。全面面取り，「×」印の線刻。未完成の孔2個。
7	〃	(34.3)	3.3	0.8			板目。孔1個残存。
8	底板	16.0		1.5			柾目転用。板目。
9	〃	16.0		1.6			板目。

第88図　SK16　出土遺物（S：1/4）

ＳＫ17　（第89図）

３工区中央において検出された土坑であり，ＳＤ21の西端と接する。西側は調査区外である。

確認面のレベルは標高10.90mである。平面形は円形を呈すと考えられ，検出された径は1.20m，深さ0.30mを測る。掘り込みは非常になだらかであり，底面は凹凸である。掘り込み面に10個の石を並べている。出土遺物は数点の磁器片・染付片のみである。



第89図　ＳＫ17　平・断面図（Ｓ：1/20）

ＳＫ18　（第90・91図）

３工区北側において検出された土坑であり，ＳＫ13・14，ＳＤ25・26の西側に位置する。

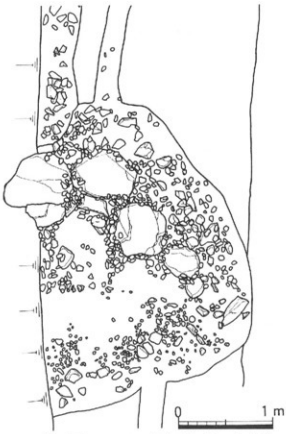
確認面のレベルは標高10.92mである。本遺構の西側は調査区外にかかっており，平面形・規模は不明である。検出できた範囲の平面形は不整な円形で，径は3.25mを測る。確認面からの深さは約0.20mであり，掘り込みはゆるやかである。

埋土上面に0.50×0.50m以上の石３個を並べ，その周囲には多量の小石を配している。集石のレベルはほぼ均一である。

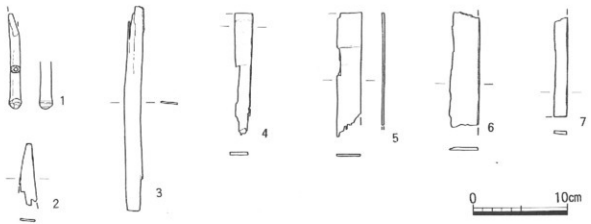
土坑の南側には浅い溝が１本，北側には２本の溝が延びている。溝の埋土中には多量の石が見られる。

出土遺物　遺物は加工竹（１），加工材（２～７），磁器片・染付片であり，土器は小片のため図化できるものはなかった。

１は節部分を加工している。２～７は板状に加工している。



第90図　ＳＫ18　平面図（Ｓ：1/40）



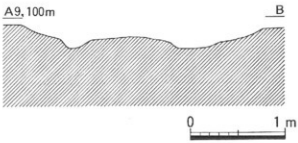
番号	器 種	現在長(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	材 質	特 徴
1	加工竹	(30.1)	1.0× 1.7				節部分を抜いて加工する。
2	加工板	(6.5)	(1.6)	0.2			杭目。三角形を呈す。
3	〃	(21.5)	(1.8)	0.1			杭目。
4	〃	(12.9)	(1.9)	0.3			杭目。一部に加工痕を残す。
5	〃	(13.1)	(2.5)	0.2			杭目。上端を加工し、やや薄くなる。
6	〃	(12.1)	(3.1)	0.3			杭目。
7	〃	(10.5)	(1.4)	0.3			〃

第91図　ＳＫ18出土遺物（Ｓ：1/4）

6　溝

ＳＤ12　（第92図）

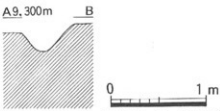
4工区中央やや南寄りにおいて検出された溝であり，確認面のレベルは標高9.00mである。溝の方向はＥ－10°－Ｎ，長さ1.50mのみ検出する。幅は2.60mである。遺物は数点の磁器片のみである。



第92図　ＳＤ12　断面図（Ｓ：1/40）

ＳＤ13　（第93図）

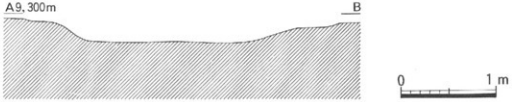
4工区中央やや南寄りで検出された溝であり，確認面の標高は9.20m前後である，溝の方向はＥ－10°－Ｓである。幅は0.55m，深さは0.25mである。



第93図　ＳＤ13　断面図（Ｓ：1/40）

ＳＤ14　（第94図）

4工区南側で検出された溝であり，確認面の標高は9.20mである。幅は3.50m，深さは0.30mである。遺物はなかった。本遺構はＳＤ11と同一と考えられる。



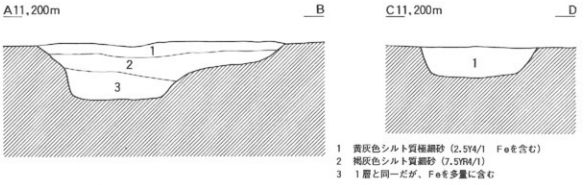
第94図　ＳＤ14　断面図（Ｓ：1/40）

ＳＤ15

4工区南側で検出された溝であり，確認面の標高は9.33mである。幅は1.20m，深さは10cmを測る。遺物は出土しなかった。

ＳＤ17　（第95・96図）

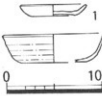
3工区南側で検出された溝であり，ＳＨ01・ＳＤ18と重複している。確認面のレベルは標高11.00m前後である。南側は部分的に跡切れるが，直線的に南北方向に延び，ＳＨ01の北側で



第95図　ＳＤ17　断面図（Ｓ：1/20）

東へ直角に曲がる。溝の方向はＮ－10°－Ｅである。幅は0.40～1.00m，深さは5～30cmを測る。底面のレベルは南から北に徐々に低くなっている。ＳＨ01との重複部分は一部深くなっている。埋土は3層である。

出土遺物　遺物は土師質土器小皿（1），土師器杯（2）である。

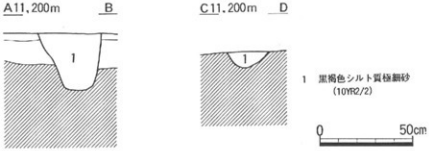


番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	色調 内	胎土
1	土師質土器小皿	7.0	4.6	1.2	回転ナデ。底面は回転ヘラ切り。若干上げ底。	灰白(10YR8/2)		微～細砂
2	土師器　杯	10.6	6.6	2.95	回転ナデ。外面に沈線を四条。	灰白(2.5Y8/1)	灰白(2.5Y8/2)	微砂

第96図　ＳＤ17出土遺物（Ｓ：1/4）

ＳＤ18　（第97図）

3工区南側において検出された溝である。ＳＤ17と重複する。確認面の標高は10.95m前後である。溝の方向はＮ－37°－Ｅである。幅は0.30～0.45m，深さは6cmである。底面のレベルは北東に向かってゆるやかに低くなっている。遺物は出土しなかった。

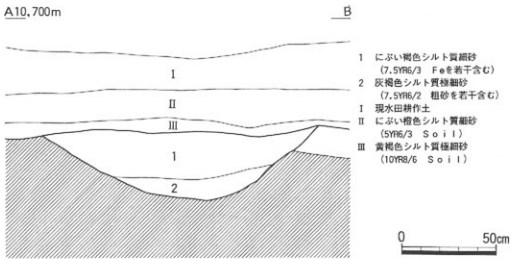


第97図　ＳＤ18　断面図（Ｓ：1/20）

ＳＤ19　（第98図）

３工区中央やや南寄りにおいて検出された溝であり，ＳＨ01東側に位置する。

確認面のレベルは標高11.00ｍである。溝の方向はＥ－５°－Ｎである。検出できた全長は4.40ｍで東方の調査区外に延びる。幅は1.25ｍ，深さは0.44ｍを測る。底面のレベルは西端方向に若干低くなっている。遺物は出土しなかった。



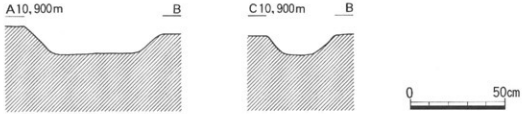
第98図　ＳＤ19　断面図（Ｓ：1/20）

ＳＤ20　（第99・100図）

３工区中央において検出された溝であり，ＳＢ02・ＳＤ21・23と重複する。

確認面のレベルは標高10.80ｍである。溝の方向はＥ－２°－Ｓである。検出できた全長は8.35ｍ，幅は0.34～0.70ｍを測り，西端が幅広くなっている。確認面からの深さは10cmである。底面のレベルはほぼ平坦である。埋土中に集石が検出される。

出土遺物　遺物は土師質土器羽釜（１・２），陶磁器片である。



第99図　ＳＤ20　断面図（Ｓ：1/20）

番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	瓦器　羽釜			(5.7)	鍔付近のみ残存。外面指押え，内面細かいハケメ。	暗灰(N3/)	灰(N4/)	微・細砂
2	〃　〃			(2.1)	鍔のみ残存。外面ヨコナデ，内面指押え後にハケメ。	〃	鈍い黄褐(10YR5/3)	〃

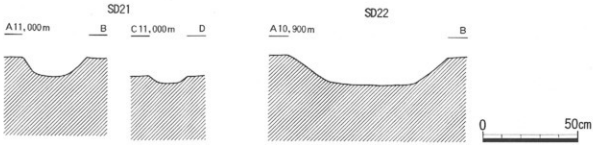
第100図　ＳＤ20出土遺物（Ｓ：1/4）

ＳＤ21　（第101・102図）

３工区中央において検出された溝であり，ＳＢ02・ＳＤ23・ＳＫ17と重複する。

確認面のレベルは標高10.80mである。溝はＳＫ17から約２ｍ北流し，直角に曲がって東流する。東流する溝の方向はＥ－０°－Ｓである。東端は試掘トレンチにより消滅している。幅は0.20～0.60mを測り，西端になるにしたがって幅は広くなっている。底面のレベルは東方にゆるやかに低くなっている。

出土遺物　遺物は磁器皿（１），数点の磁器片のみである。



第101図　ＳＤ21・22　断面図（Ｓ：1/20）

番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	磁器皿			(3.1)	灰釉。	(地)灰白(N8/)	(地)明緑灰(10G8/1)	精選

第102図　ＳＤ21出土遺物（Ｓ：1/4）

ＳＤ22　（第101・103図）

３工区中央において単独で検出された溝であり，ＳＤ27の北側に位置する。

確認面のレベルは標高10.80mである。検出できた全長は0.90mである。幅は0.80m，深さは15cmを測る。底面のレベルは東方にゆるやかに低くなっている。

出土遺跡　遺物は土師質土器小皿（１），陶磁器片である。

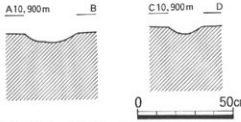
番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	土師質土器皿	11.2	8.8	1.6	回転ナデ。底面は回転ヘラ割り。内外面にスス・油付着。	褐灰(10YR6/1)		微～細砂

第103図　ＳＤ22出土遺物（Ｓ：1/4）

ＳＤ23　（第104図）

３工区中央において検出された溝で，ＳＢ02・ＳＤ20・21と重複する。

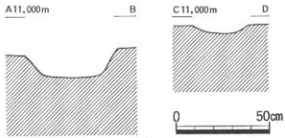
確認面の標高は10.83m前後である。溝の方向はＮ－15°－Ｅである。検出できた全長は11.40m，幅は0.10～0.35m，深さは４cmを測る。底面は北方に若干下がる。遺物はなかった。



第104図　ＳＤ23　断面図（Ｓ：1/20）

ＳＤ24　（第105図）

３工区北側で検出された。確認面の標高は10.85m前後。方向はＮ－０°－Ｅである。幅は0.10～0.50mで，深さ５～15cmである。



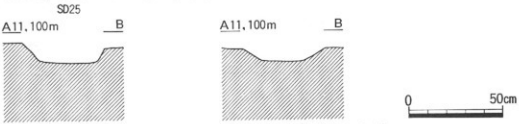
第105図　ＳＤ24　断面図（Ｓ：1/20）

ＳＤ25　（第106図）

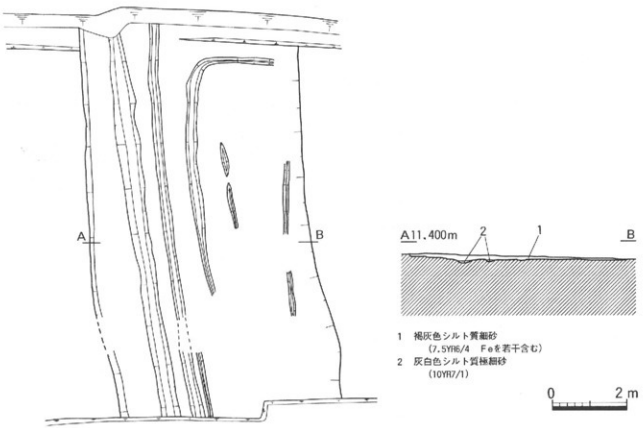
３工区北側で検出された。確認面の標高は10.90m。方向はＮ－13°－Ｅ。幅は0.20～0.40m，深さは２～７cmを測る。北端に径0.64×0.80mの土坑状落ち込みを有する。

ＳＤ26　（第106図）

３工区北側で検出された。確認面の標高は10.90mである。方向はＮ－14°－Ｅである。幅は0.20～0.50m，深さは４cmを測る。北端に0.80×0.90mの土坑状落ち込みを有する。



第106図　ＳＤ25・26　断面図（Ｓ：1/20）

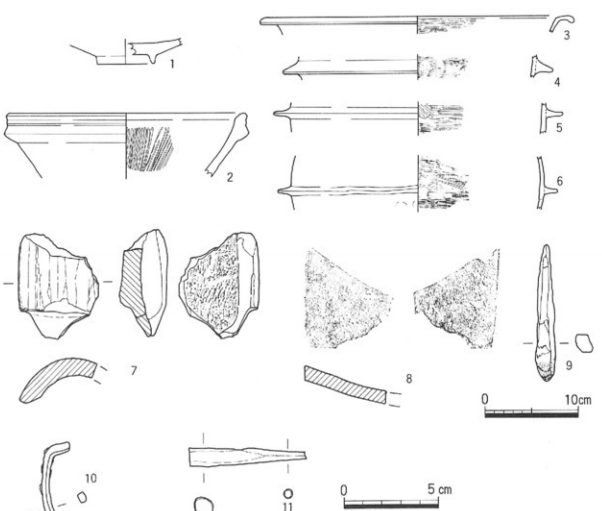


第107図　ＳＤ27　平・断面図（Ｓ：1/100）

ＳＤ27　（第107・108図）

３工区中央で検出された溝で，確認面のレベルは標高10.80～11.00mである。溝の方向はＥ－０°－Ｓである。幅は5.80mであり，底面に３条の溝状落ち込みがある。最深部は約0.30mであり，溝の北半分は浅く平坦である。溝底面のレベルは東方にゆるやかに低くなっている。

出土遺物　遺物は灰釉皿（１），備前焼擂鉢（２），土師質土器焙烙（３），瓦器羽釜（４～６），丸瓦（７），平瓦（８），加工材（９），釘(10)，煙管(11)である。



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	色調 内	胎土
1	磁器皿		6.0	(2.2)	畳付無釉。見込に蛇の目釉ハギ。灰釉。	(地)灰白(10Y7/1)	(地)明サーブ灰(5GY 7/1)	精選
2	備前焼 擂鉢	25.2		(6.7)	口縁部を上下に拡張し，外面に凹線。11本単位の刷目。	赤(10R5/6)		微～細砂
3	土師質土器焙烙	33.6		(1.8)	口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラナデ，内面ハケメ。	黒褐(10YR3/1)	褐灰(10YR4/1)	微砂
4	瓦器 羽釜			(2.4)	鍔のみ残存。外面ヨコナデ，内面ハケメ。	灰(N4/)	灰白(N7/)	〃
5	〃　〃			(3.3)	やや幅の広い鍔。外面ヨコナデ，内面ハケメ。スス付着。	灰(10Y5/1)	黄灰(2.5Y5/1)	〃
6	〃　〃			(5.6)	外面上半ナデ，下半指押え。内面ハケメ。スス付着。	灰(N4/)	黄灰(2.5Y5/1)	〃

番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
7	丸瓦	(10.8)	(8.5)	2.0			凸面ヘラナデ，凹面布目。
8	平瓦	(10.5)	(9.2)	1.4			ヘラナデ。
9	加工材	(14.4)	(2.1)	1.9			先端部を焼く。
10	釘	(5.0)	0.4	0.5		鉄	断面方形。
11	煙管	6.2	1.0	0.05		銅	完形。

第108図　ＳＤ27出土遺物（Ｓ：1/4）

7　建物

ＳＢ03　（第109図）

３工区北側で検出された建物であり，ＳＢ04・ＳＤ16と重複する。切り合い関係はＳＢ04に切られ，ＳＤ16を切っている。しかし，調査時にＳＤ16を先行して調査したため，本遺跡の南端は消滅してしまった。

確認面のレベルは標高10.80ｍである。本遺構は0.30×0.40ｍ以上の比較的大きな石と0.20

第109図　ＳＢ03　平・断面図（Ｓ：1/40）

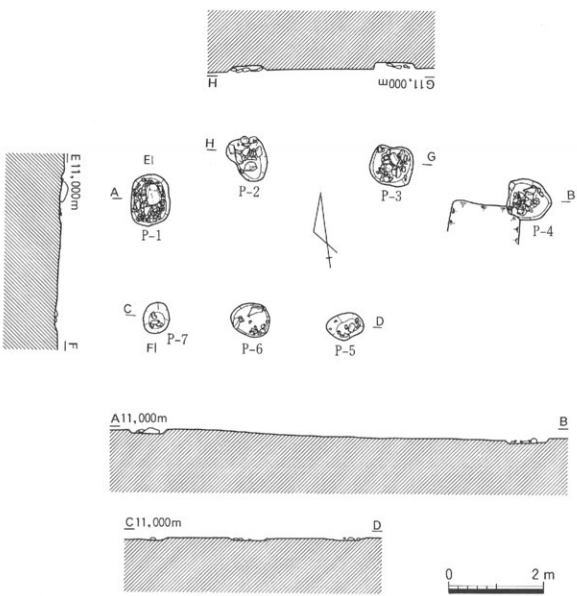
m未満の小石を長方形に配した建物の基礎である。規模は南北方向の長辺が6.50m以上，東西方向の短辺が3.50mを測る。西側の集石は0.50mの幅をもって並べられているが，東側は集石の並びは乱れている。北側の中央部には幅0.80mに測る長方形に拡張している部分があり，これは出入口の基礎であると考えられる。本遺構の中央には東西方向に幅1.50mを測る集石があり，その北側と南側には空白となっている。

この建物は，その平面形・規模から北側に出入口を持つ土蔵であると考えられる。

出土遺物　遺物は数点の磁器片・染付片・瓦片が出土したが，全て小片であり，図化できるものはなかった。

ＳＢ04　（第110図）

３工区北側で検出された東西棟の掘立柱建物跡であり，ＳＢ03・ＳＤ16と重複している。切



第110図　ＳＢ04　平・断面図（Ｓ：1/80）

り合い関係から見て本遺構が他の遺構を切っており，本遺構が最も新しい。

確認面のレベルは標高10.80～10.90mである。柱穴は７個検出され，南東隅柱を欠いている。主軸方向はＥ－９°－Ｓを示す。桁行は３間で9.00m，梁行は１間で3.30mを測る。北列側柱のＰ－２・３は北側にずれている。柱穴の掘り込みはわずかであり，底面には多数の小石を配し根石としている。Ｐ－１の中央部には0.30×0.40mの根石がある。Ｐ－１～４の平面形は方形を呈し，0.80×1.10mの規模である。Ｐ－５～７は円形で直径0.60～0.80mである。

出土遺物　遺物は数点の磁器片・染付片のみであり，全て小片で図化できるものはなかった。

ＳＢ05　（第111～116図）

３工区北側において検出された石列であり，ＳＤ16の埋没後に築かれた遺構である。

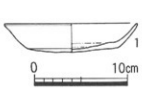
確認面のレベルは本遺構の南端で10.8m，北端で10.70mであり，地形の傾斜と同様に北方向へ徐々に低くなっている。石列は東側に若干湾曲しながら南北方向に延びており，南端と北端は後世の削平によって消滅している。検出することのできた全長は19.60mを測り，最も遺存状態の良い中央部での幅は1.10mである。石列の方向はＮ－10°－Ｅである。

石列の構造は，長辺0.30～0.50mを測る石を両側に並べ築石とし，その間に３～２０㎝の小石を充填している。築石は自然面を保って丸みの強い野面石で，外側に面を付けている。南端から北へ11.30mまでの石列は部分的に跡切れている部分もあるが，比較的に遺存状態が良く，前述したように若干東側に湾曲している。築石は東側・西側ともに20個を数え，１段のみであり，その高さは10～15㎝である。石列の中央より北側に関しては，築石が検出されなかったが，南側とほぼ同じ幅で間詰石が部分的に跡切れるが帯状に検出された。これにより北側にも築石が本来存在していたと考えられる。間詰石の上面のレベルは築石の上面と同じである。南端の築石上面のレベルは標高10.96mであり，本遺構中央では標高10.90mであり，ほとんど高低差が見られない。しかし，本遺構北端の間詰石の上面レベルは標高10.60mであり，約0.30mの比高差をもって低くなっている。

石列の東側と西側には，多量の丸瓦・平瓦が散乱している。特に，石列の西側中央部に集中して出土した。瓦の出土したレベルは標高10.90m前後であり，築石上面のレベルと同じ高さである。

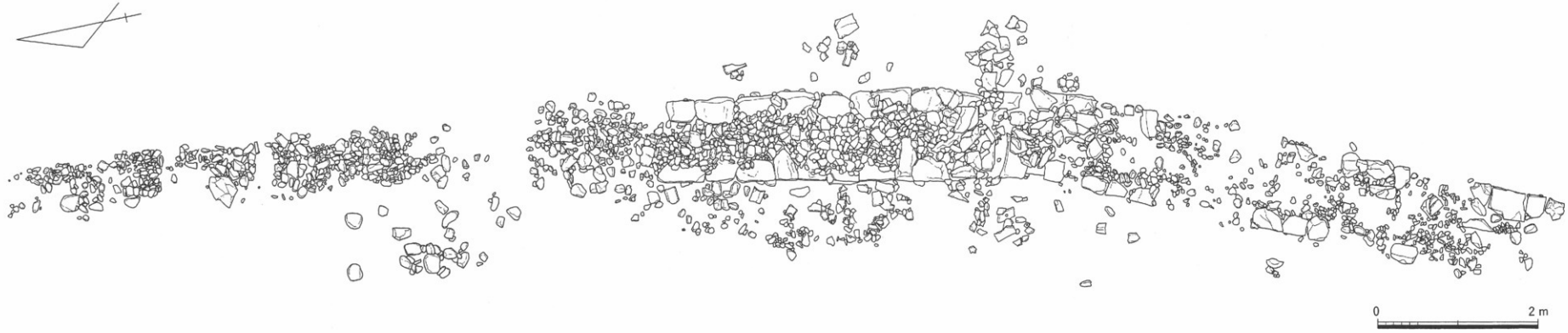
本遺構は，外側に面をそろえた築石と多量の瓦の存在から，瓦を葺いた塀である可能性が考えられる。

出土遺物　遺物は土師器杯（１），丸瓦（２～10），平瓦（11・12），軒平瓦（13～15）がある。これらは石列の西側・東側から出土したものであり，築石や間詰石の中から出土したのは，数点の染付皿片，磁器片のみであり図化できるものはなかった。

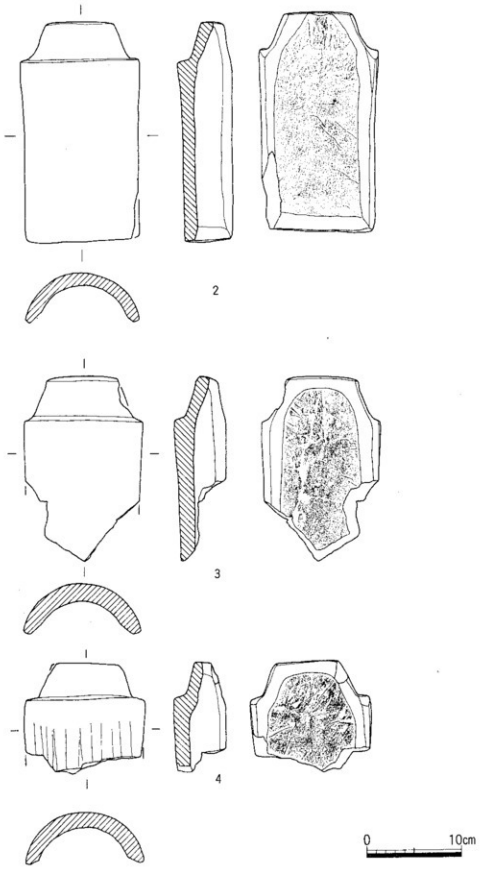


番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
1	土師器 杯	14.2	9.8	3.0	回転ナデ。底面は回転糸切り後に静止ヘラナデ。	灰白(2.5Y8/2)		微～細砂

第111図　ＳＢ05出土遺物(1)（Ｓ：1/4）



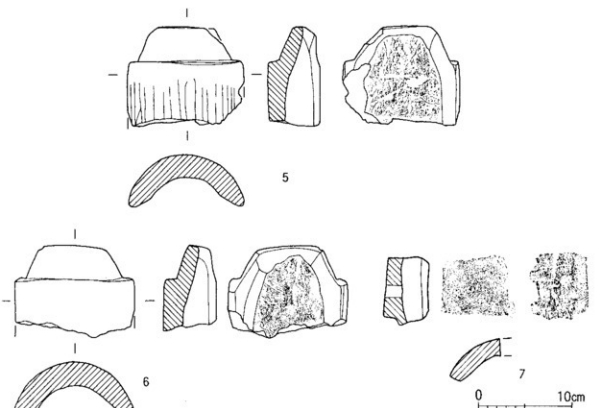
第112図　ＳＢ05　平面図（Ｓ：1/40）



第113図　ＳＢ05出土遺物(2)（Ｓ：1/4）

（第113図）

番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
2	丸瓦	23.3	12.0	1.3			完形。凸面ヘラナデ、凹面布目。
3	〃	(19.4)	12.4	1.6			凸面ヘラナデ、凹面布目。
4	〃	(11.6)	13.0	1.6			〃　〃

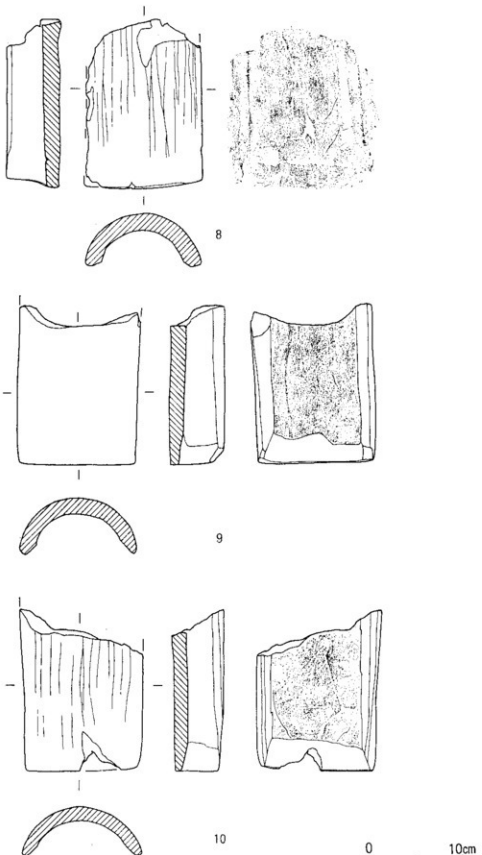


番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
5	丸瓦	(10.5)	12.3	2.3			凸面ヘラナデ、凹面布目。
6	〃	(9.8)	12.6	2.1			〃　〃
7	〃	(7.1)	(5.5)	1.7			〃　〃　孔を残存。

第114図　ＳＢ05出土遺物(3)（Ｓ：1/4）

1は完形の杯であり，出土地点は石列南端から北へ約７ｍ行った所の西側である。出土のレベルは標高10.93ｍである。体部は直線的に広がり，底部内面にわずかな高まりを有する。底面は回転糸切りの後に静止ヘラナデを施している。

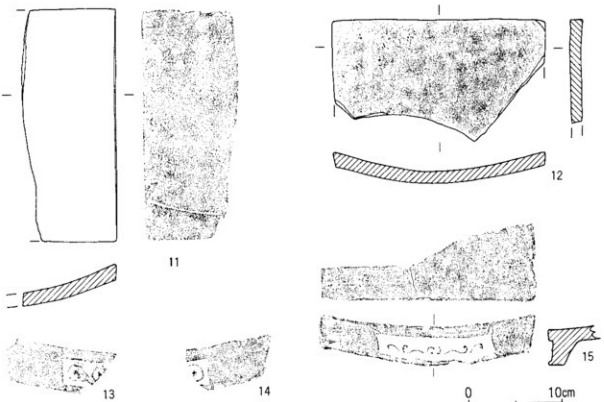
2～15は「いぶし」がかけられた黒色で焼成堅緻な瓦であり，2～10は丸瓦・11～17は平瓦である。2はほぼ完形の丸瓦であり，全長23.3㎝，幅12.0㎝を測る。凸面にはヘラナデが施され，凹面には粗い布目の圧痕が見られ，粘土紐の痕跡を認める。3～6は玉縁付近であり，凸面にヘラナデ，凹面に粗い布目が見られる。7～10は丸瓦部であり，凸面にヘラナデ，凹面に布目が見られ，粘土紐の痕跡が残るものもある。7は中央に孔を有する。11・12は平瓦であり，11の凸面には縄目の圧痕が残る。平瓦の大きさは全長24㎝，幅22.5㎝である。13～15は軒平瓦の瓦当部であり，その幅は22.9㎝である。瓦当の文様は簡略化された均整唐草文である。



第115図　ＳＢ05出土遺物(4)（Ｓ：1/4）

（第115図）

番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
8	丸瓦	(15.8)	12.4	1.7			凸面ヘラナデ、凹面布目。
9	〃	(14.6)	12.6	1.8			〃　〃
10	〃	(16.9)	12.8	1.4			〃　〃



番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
11	平瓦	24.3	(9.9)	1.3			凸面に縄目痕。
12	〃	(12.9)	22.5	1.2			凸面ヘラナデ
13	軒平瓦						瓦当部のみ残存。唐草文。
14	〃						〃　〃
15	〃	(8.1)	22.9	1.4			凹面はヘラナデ。瓦当部は唐草文。

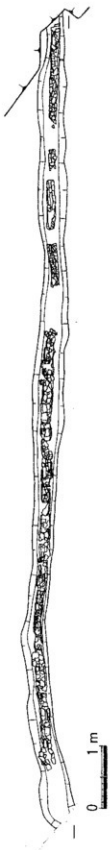
第116図　ＳＢ05出土遺物(5)（Ｓ：1/4）

8　導水管

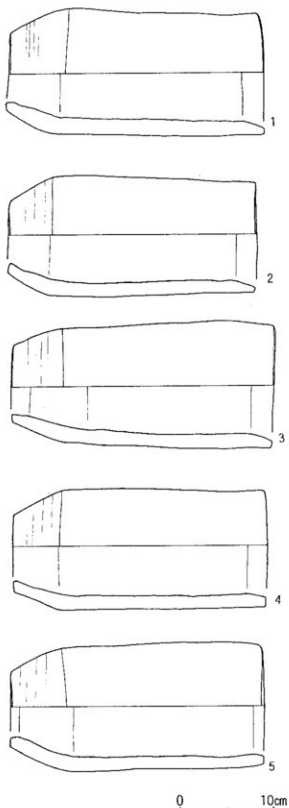
ＳＤ28（第117・118図）

3工区北端において検出された遺構であり，溝内に瓦質土管を並べている。

確認面のレベルは標高10.75～10.80ｍである。溝の方向はＮ－30°－Ｗであり，南端は後世の削平により消滅している。北側は調査区外に延びている。検出できた溝の全長は13.00ｍ幅は0.35～0.50ｍを測る。深さは５㎝である。溝底面に砲弾形の土管が部分的に跡切れているが41個並べている。土管は瓦質であり，器肉が厚い。土管の長さは26～28㎝，胴部の直径は12～13㎝を測る。先端部は稜をもち急に細くなっており，先端の直径は８㎝である。基部は胴部と同じ直径であるが，内側に稜をもち器厚が薄くなる。土管は先端を南側に向け，先端部の稜までを前の土管の基部に差し込んでいる。接合部分には漆喰がわずかに残存している所がある。溝の底面のレベルは平坦であるが，土管の先端部が南側に向いていることより水は北から南へ流れていたと考えられる。



第117図　ＳＤ28　平面図（Ｓ：1/60）



第118図　ＳＤ28 出土遺物（Ｓ：1/4）

（第118図）

番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
1	導水管	27.1	13.3	1.7			緩弯形。外面ヘラナデ、内面布目。
2	〃	26.3	12.1	1.4			〃　〃
3	〃	28.1	13.5	1.5			〃　〃
4	〃	27.0	12.6	1.4			〃　〃
5	〃	26.9	13.2	1.4			〃　〃

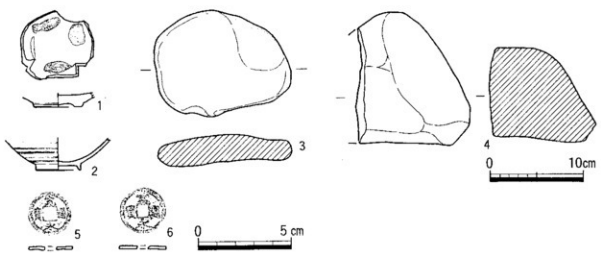
2）　3工区包含層出土遺物　（第119図）

3工区の包含層からの出土遺物は，国産灰釉皿（1），唐津灰釉碗（2），焼石（3・4）寛永通宝（5・6）を図化するが，その他にも陶磁器片・土師質土器片がある。

1は蛇の目高台で，見込に4個の砂目がある。2は薄い器厚で，細く高い高台をもつ。

3・4は表面が焼けている。

5・6はわずかに直径の異なる寛永通宝である。



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	色調 内	胎土
1	瀬戸皿		5.2	(1.5)	蛇の目高台。見込に砂目。底面・高台は無釉。	(地)褐灰(7.5YR4/1)	(釉)灰オリーブ(7.5Y5/1)	精選
2	唐津碗		4.6	(3.4)	体部下端・高台・底面は無釉。	(地)灰白(10YR7/2)	(釉)灰オリーブ(7.5Y6/1)	精選

番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
3	石	11.1	14.4	2.8		砂岩	焼けている。
4	〃	(14.1)	(12.0)	9.5		〃	〃
5	寛永通宝	2.3		0.2			
6	〃	2.4		0.2			

第119図　3工区包含層出土遺物（S：1/2，1/4）

第4章　おわりに

キモンドー遺跡では，2次にわたる発掘調査によって弥生時代中期～現代に至るまでの多くの遺構が全域において検出された。その中で最も遺構が多く中心となる時代は，中世末～近世である。

1工区では弥生時代中期後半～後期の自然旧河道と後期の溝・出水状遺構，近世の土坑・切石組みの井戸等が検出された。弥生時代の自然旧河道は南北方向に流れる旧河道の西岸のみの検出であるが，埋土中及び河床より多量の土器が出土した。溝と出水状遺構は関連する遺構である。ＳＥ02とＳＤ05は一連の遺構であり，ＳＥ02の湧水をＳＤ05が南方に流す構造である。

2工区では近世と比定される南北・東西方向の溝・土坑が検出された。調査区南側で検出されたＳＤ11は4工区のＳＤ14と同一の溝であり，以前に西接する水田の中にあったと言われる古井戸と何らかの関連があると考えられる。

3・4工区は，本遺跡で最も遺構数が多く，本遺跡を最も特徴づけている。検出された遺構は，中世末の溝・堀跡・土坑・集石・性格不明土坑と近世の掘立柱建物・土坑・溝・住居跡・石列・蔵跡・導水管である。

ＳＢ02は円形に配列する柱穴のみであり，試掘調査において弥生時代後期の壺が近くで出土しており，弥生時代の竪穴住居跡である可能性も考えられるが，柱穴内からの遺物の出土がなく，埋土は近世のものと同様であるため，近世の掘立柱建物と報告する。

本遺跡の最も大きな成果は堀跡であるＳＤ16の検出である。ＳＤ16は4工区全域と3工区北側で検出され，南北方向と東西方向に延びる堀跡である。検出された堀上場の幅が3.70～4.00m，下場の幅が約1.90mを測り，確認面からの深さは1.60mである。堀の両側には一段ないし二段積みの石垣が残存している。石材は野面石であり，基盤の石垣と南東コーナー内側の要石は大きな石が使用されている。東西方向の堀には間仕切りの石垣が2ヶ所ある。4工区では南端・北端のみ石垣が検出されるが，全域に裏込が検出されており，本来石垣が存在していたと考えられる。逆Ｌ字形の平面形を呈する堀跡に囲まれた部分では，溝・集石・道路状遺構・「敷粗朶」が検出され，堀を築造する際の工事過程が確認された。3工区で検出されたＳＤ16の南東コーナーは，2・4工区北側の現有用水路および「キモンドさん」と呼ばれる北東隅にある三つの祠から南へ約110mの距離を測り，方1町の敷地をもつ方形館と言われる「佐藤城」の南東隅にあたると考えられる。「佐藤城」は，天正10年(1582)8月5日の土佐軍との戦いで討ち死にした香西氏の武将・佐藤孫七郎の居城であり，調査以前より「キモンドさん」と呼ばれる祠，古井戸の存在，北・西側に巡る幅2m前後の現有用水路，「御殿角」という呼び名等を根拠にして，この付近が佐藤城であろうと考えられてきたが[1)]，今回の発掘調査によって佐藤城の存在が明確にされたことは特筆すべきことである。

江戸時代になると堀は完全に埋め立てられ，瓦を葺いた石列（ＳＢ05）・根石を持つ掘立柱建物跡（ＳＢ04）・蔵跡と思われる建物（ＳＢ03）・導水管（ＳＤ28）が建てられていた。これらの遺構は，この付近にあったと言われる太田村の大庄屋寺島氏の屋敷と何らかの関連があると考えられる。

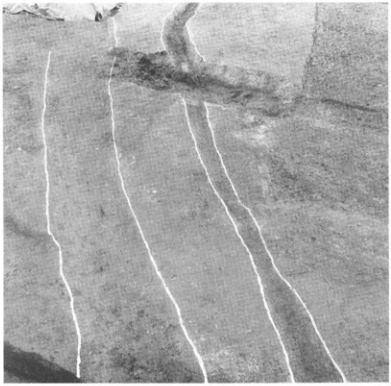
1次調査を実施してから既に6年，2次調査から既に4年以上がすぎてやっと報告書が刊行されることとなった。日々の調査に追われ，調査員の記憶も薄れかけ，報告書として充実した

内容を保っているか不安であるが，今回の発掘調査によって，中世城郭のひとつである「佐藤城」を確認したことと江戸時代の建物を検出したことは，当地域の歴史を研究する上で貴重な資料となるであろう。

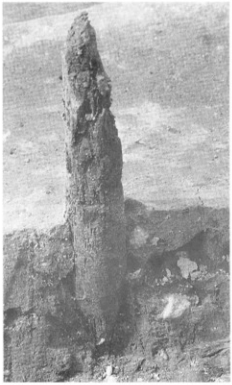
註１）秋山忠「古城跡を訪ねて」昭和57年　高松市歴史民俗協会・高松市文化財保護協会

図　　版

1．1工区完掘



2．SD01

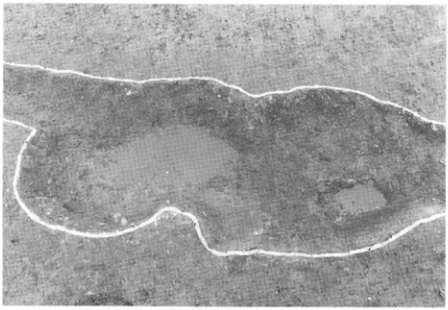


3．SD01杭

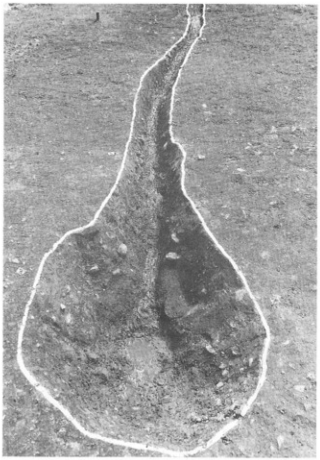
図版2

1. SD02

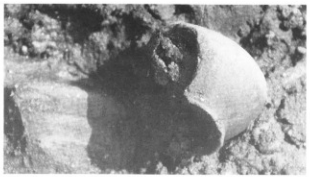
2. SD03 (SE01)



3. SE01



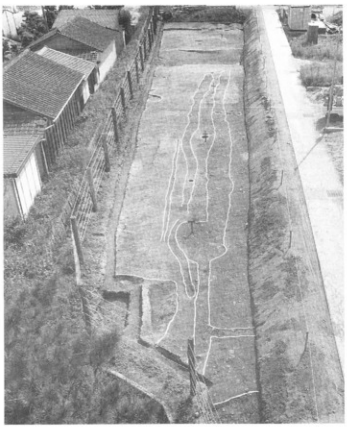
1．SD05（SE02）



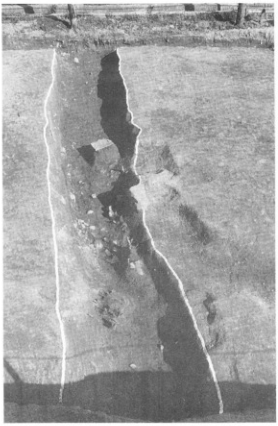
2．ＳＲ01遺物出土状況

3．SR01遺物出土状況

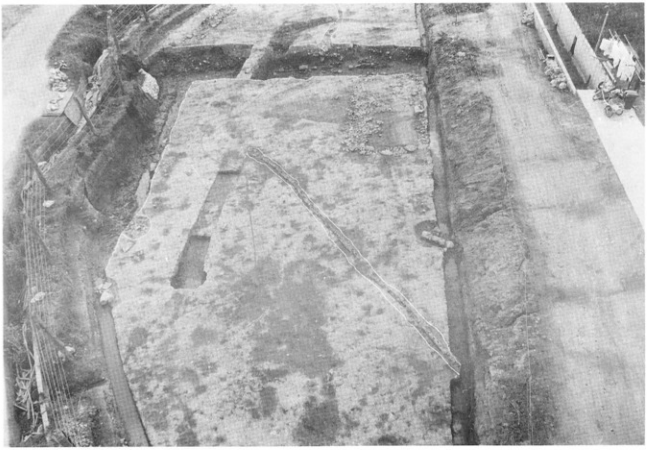
4．SE03



1．2工区完掘



2．SD11

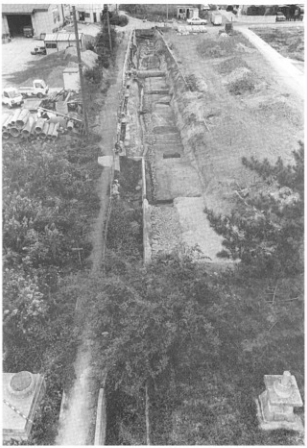


3．SD16

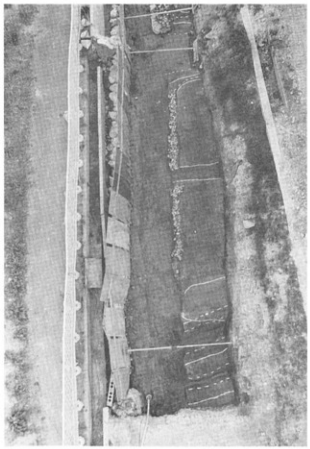
1．SD16石垣

2．SD16石垣

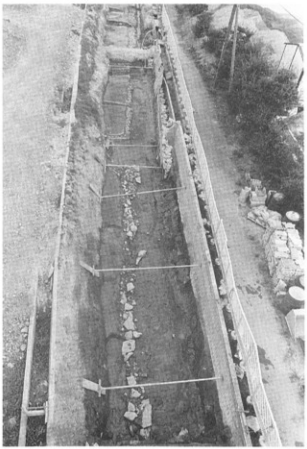
1．SD16石垣



2．4工区完掘

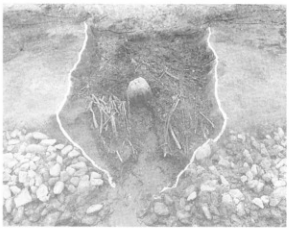


3．SD16石垣



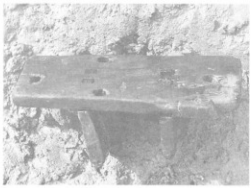
4．SD16石垣

1．SX01



2．SX03

3．集石

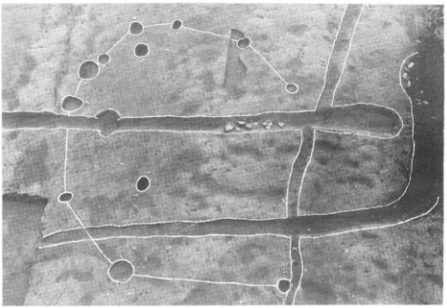


4．下駄出土状況

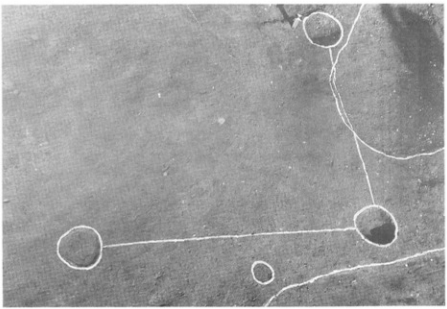
5．SD16石垣

6．SD16石垣

1．SH01～04



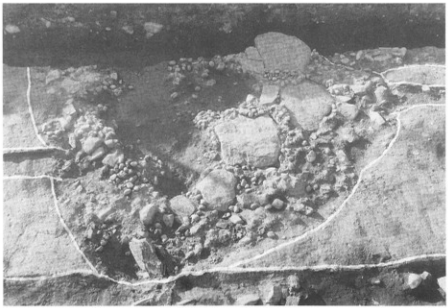
2．SB02



3．SB01

1．SK16（第1面）

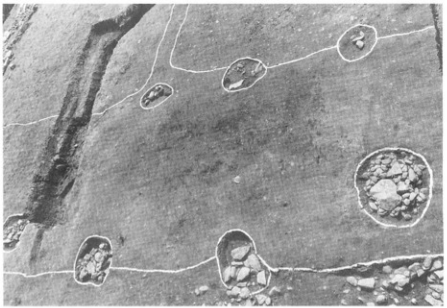
2．SK16完掘



3．SK18

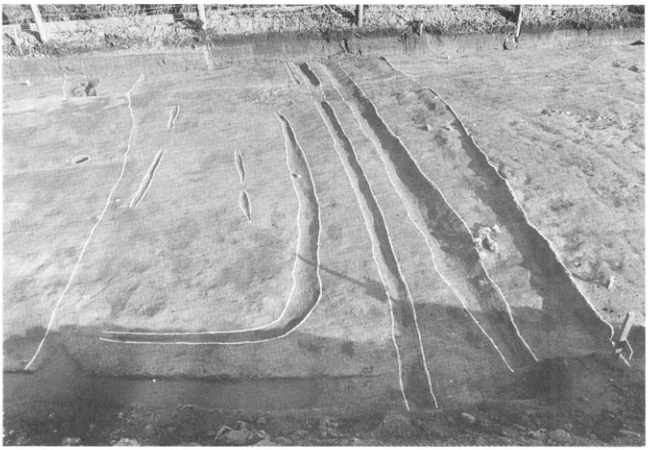
図版10

1．SB03・04

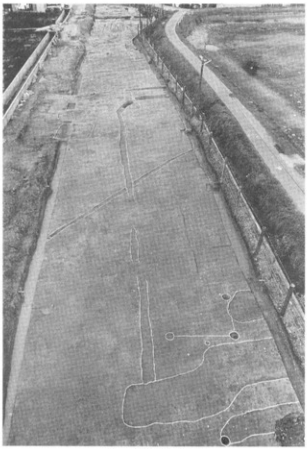


2．SB04

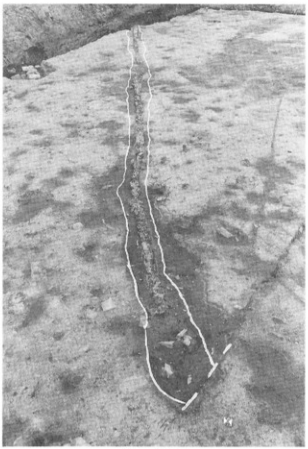
3．SB03



1．SD27



2．3工区完掘



3．SD28

図版12

1．SB05 遺物出土状況

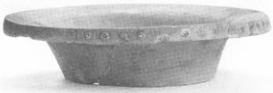
2．SB05

16–9

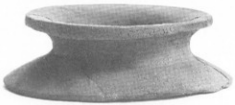
16–3

17–20

16–8



17–28



18–35

18–55

18–44